第 3 章　松林寺遺跡

第 1 節　遺跡の位置と歴史的環境

松林寺遺跡は島根県大田市仁摩町大国に所在し、南を向く丘陵の斜面に位置する。遺跡のある大田市仁摩町大国地区は、日本海へ注ぐ潮川の下流に位置し、潮川が狭い谷間を抜けて開けた仁万平野へ出る位置に相当する。仁万平野は平地の少ない石見で益田平野に次ぐ面積があり、遺跡の多いところである。

松林寺遺跡の「松林寺」の由来は、錦織智禅『石見社寺案内』（1922）において仁摩町大国町宮村に「（浄土宗）松林庵」があることに拠ると考えられる。松林寺遺跡の北側の斜面には、平坦面や墓地が広がっており、「松林庵」の跡と考えられる。

【旧石器・縄文時代】

この地域で旧石器時代の遺跡は知られていない。

仁万大橋遺跡（25）、久根ヶ曽根遺跡などでは縄文時代前期に遡る土器が出土している。仁万平野の南東側に位置する古屋敷遺跡（3）では、後期から弥生時代前期にかけての最大 9 面の遺構面から、地床炉 340 か所以上、炭溜まり約 50 か所、配石や集石 10 か所、土器溜まり 10 か所を確認した。晩期のクルミの集積やトチの水さらし場、晩期末の木棺墓など、縄文時代の生活に関連する遺構が見つかっていることが注目される。晩期には古屋敷遺跡に加えて五丁遺跡（7）でも土器が出土し、仁万平野の東側での活動が盛んになる。

【弥生時代】

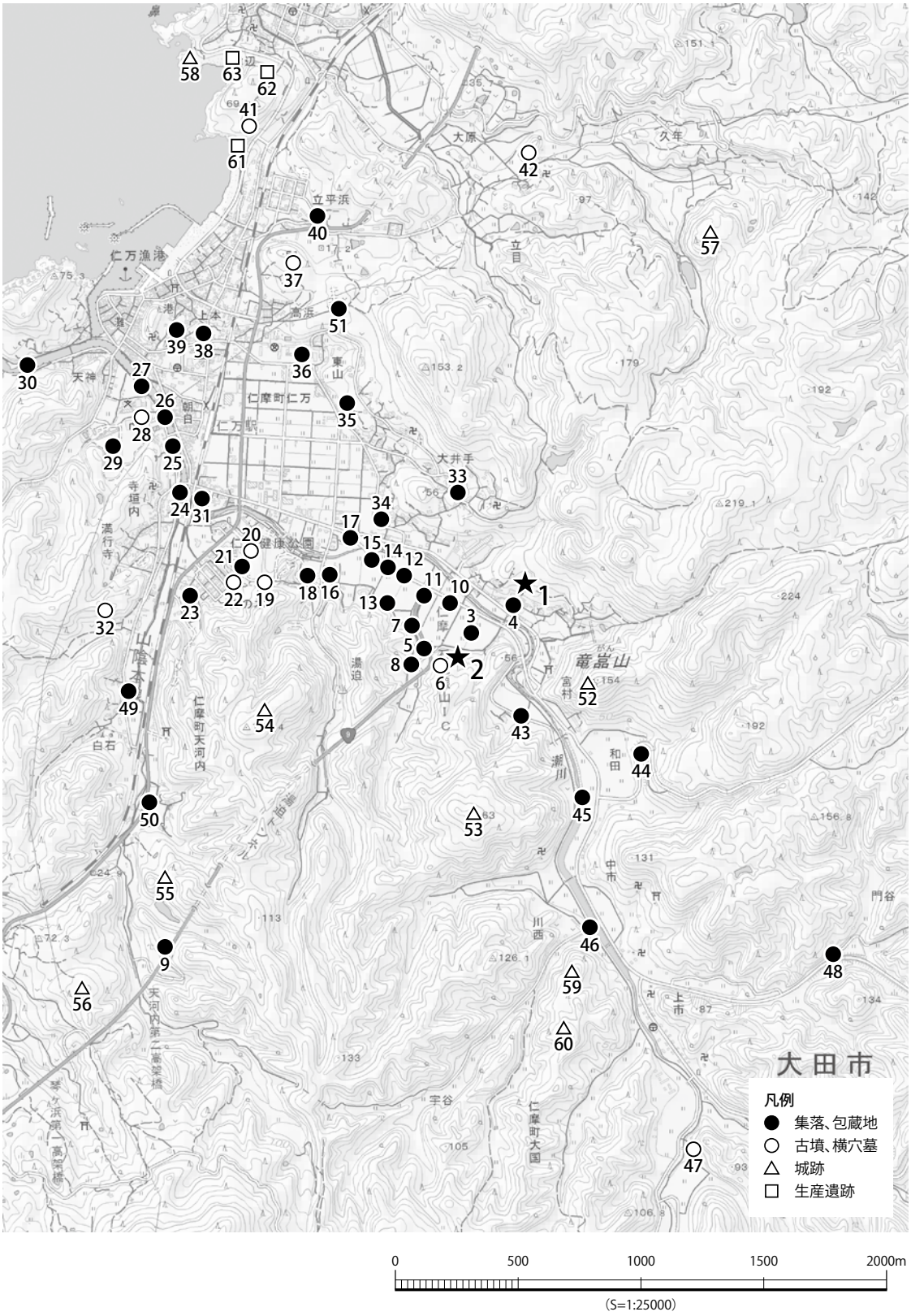
弥生時代前期の遺跡として、古屋敷遺跡や五丁遺跡、庵寺遺跡（5）がある。仁摩町教育委員会が平成 7 年度に調査した古屋敷遺跡 B 区では、土坑から弥生時代前期の土器とともに炭化米や炭化種子が出土している。潮川下流の川向遺跡（27）では弥生時代前期～中期の貯木施設、直柄平鍬や縦柄杓子などの木製品が出土している。庵寺古墳群では、標高 50 ～ 80m の斜面に中期後葉から後期前半の竪穴建物や段状遺構が築かれており、高地性集落と考えられる。弥生時代中期後葉から後期前半では、丘陵上や斜面に集落遺跡が築かれるようである。丘陵裾部では、大国地頭所遺跡（4）から後期の建物跡や大量の土器が見つかっている。後期後葉から古墳時代にかけては、丘陵裾部のような比較的標高の低い場所に集落遺跡が築かれるようになる。

【古墳時代】

大国地頭所遺跡では、弥生時代に引き続いて古墳時代前期～中期の建物跡や大量の土器が見つかっている。また、大寺遺跡（36）や庵寺遺跡では田下駄などの木製品が出土しており、水田の広がりを示唆する。清石遺跡（17）では古墳時代中期の土器溜まりが見つかっている。

庵寺古墳群は古墳時代前期～中期の古墳群である。庵寺 1B 号墳では八禽鏡を副葬しており、この地域の首長クラスの古墳と考えられる。このほか、安養寺 1 号墳（22）や坂灘遺跡（30）では埋葬施設に箱式石棺を用いている。古墳時代後期には明神古墳（37）が築かれている。明神古墳は、全長 10m を超える大型の横穴式石室に家形石棺を納め、金銅装円頭大刀や銅碗などの優れた副葬品があった。

このほか、楡ノ木谷横穴群（20）、矢迫屋横穴群（32）、赤崎山横穴群（41）、坊迫横穴墓（47）



第 31 図　松林寺遺跡と周辺の遺跡

などの横穴墓が築かれている。

【奈良・平安時代】

奈良時代前半の遺跡の様相は不明な点が多いが、奈良時代後半には五丁遺跡（7）、孫四田遺跡（10）、ヒヨトリヶ市遺跡（13）、京円原遺跡（14）、古市遺跡（46）など多くの遺跡で土器が出土するようになり、善興寺橋遺跡（24）、仁万大橋遺跡（25）、馬庭遺跡（31）など潮川下流域の遺跡でも同様である。五丁遺跡で条里制の畦畔が確認されており、大規模な開発が行われていた可能性がある。楡ノ木谷横穴群（20）は、奈良時代まで追葬を行っていたようである。

なお、『和名類従抄』によると、松林寺遺跡周辺は「邇摩郡大国郷」に含まれる。

【鎌倉・室町時代】

白石遺跡（18）では、多数の掘立柱建物跡が見つかり、白磁や青磁などの貿易陶磁が出土した。この他、古屋敷遺跡（3）、孫四田遺跡（10）、大月遺跡（11）、コヲスミ遺跡（12）、京円原遺跡（14）、清石遺跡（17）、古市遺跡（46）や原田遺跡（48）でもこの時代の遺物が出土しており、仁万平野一円に遺跡が広がる。

石見銀山の銀鉱山開発がさかんになると、銀を巡り戦国大名の争奪の場となる。大国地区には石見城跡（52）が築かれる。仁万平野の奥の標高約 150m の山頂に位置しており、狭い谷部を潮川が流れている部分に相当する。

なお、仁万平野の遺跡の動向と石見銀山遺跡が連動している可能性が指摘されている（新川 2013）。

【参考文献】

新川　隆 2013「陶磁器からみた石見銀山周辺地域 - 仁摩町出土資料を中心に -」『世界遺産　石見銀山遺跡の調査研究』3、島根県教育委員会・大田市教育委員会、1-15

No.	遺跡名						
1	松林寺遺跡	17	清石遺跡	33	薮田遺跡	49	横屋前遺跡
2	庵寺石塔群	18	白石遺跡	34	大井手遺跡	50	白石上屋敷遺跡
3	古屋敷遺跡	19	千人塚古墳	35	番所遺跡	51	高浜遺跡
4	大国地頭所遺跡	20	楡ノ木谷横穴群	36	大寺遺跡	52	石見城跡
5	庵寺遺跡	21	楡ノ木遺跡	37	明神古墳	53	大国城跡
6	庵寺古墳群	22	安養寺古墳群	38	墓原遺跡	54	天垣内城跡
7	五丁遺跡	23	飯田遺跡	39	打落し遺跡	55	半城跡
8	於才迫遺跡	24	善興寺橋遺跡	40	立平浜遺跡	56	狐城跡
9	ナメラ迫遺跡	25	仁万大橋遺跡	41	赤崎山横穴群	57	宅野城跡
10	孫四田遺跡	26	中配前遺跡	42	宝隆寺裏古墳群	58	鴨城跡
11	大月遺跡	27	川向遺跡	43	駒岩遺跡	59	虹ヶ谷城跡
12	コヲスミ遺跡	28	毘沙門塚古墳	44	坪ノ内遺跡	60	茶臼山城跡
13	ヒヨトリヶ市遺跡	29	毘沙門遺跡	45	志源寺遺跡	61	坂本窯跡
14	京円原遺跡	30	坂灘遺跡	46	古市遺跡	62	達水鉄山所跡
15	千後田遺跡	31	馬庭遺跡	47	坊迫横穴墓	63	宅野鈩跡
16	入石遺跡	32	谷迫屋横穴群	48	原田遺跡		

第２節　調査経過

松林寺遺跡は、平成 27 年度の試掘確認調査で設定した９か所のトレンチの内、東側斜面に設定した３か所のトレンチで遺構・遺物を確認したことから、本発掘調査の範囲を設定し、平成 28 年度に発掘調査を実施した。調査終了後、遺跡が斜面の上方へ広がることが予想されたため、平成 29 年４月 17 日～ 28 日に試掘確認調査を実施したところ、２か所のトレンチから遺物が出土し、遺跡が上方へ広がることが確認できた。その結果、平成 29 年度に発掘調査を実施した。

調査前は山林であった。調査面積は合計 1,250㎡である。

調査の方法　調査区の設定

調査では、重機掘削後に 10m 四方のグリッドを設定し、南北にアルファベット、東西にアラビア数字を振り、北東側を基準とした。調査区を北側へ拡張したため、中途半端な数字になっている。遺構に伴わない遺物はグリッドで取り上げた。また、調査区から北西へ約 40m 離れた部分にも調査区を設定し、この部分を２区と名付けた。２区は当初から人力で掘削した。

表土・包含層掘削と遺構検出

試掘確認調査を受け、表土の掘削にはバケットに平爪を装着したバックホーを使用し、少しずつ面的に掘り下げを行った。根株は重機で倒せるものは倒し、大きな根株は大穴が空かないよう人力で撤去した。遺物包含層の掘削はスコップやジョレンを用いて人力で掘り下げ、出土する遺物の粗密に応じて適宜草削りや移植ゴテ等を使用した。

遺構掘削

遺構の掘削には草削りや移植ゴテを使用した。掘削に当たっては土層観察用の畦を設定するか半截して、土層を観察しながら掘り下げた。土層については必要に応じて写真撮影を行い、図面を作成した。遺構から出土した遺物については適宜出土状況を記録した後、取り上げた。

記録の作成

遺構の平面図は遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面図は「遺構くん」のほかオートレベルを用いて測量を行った。また、必要に応じて手測りで平面図や断面図を作成した。遺構の写真は 35㎜デジタルカメラで撮影し、必要に応じて６×７判フィルムカメラ（モノクロネガ、カラーポジフィルム）により撮影した。

整理等作業

報告書作成は DTP 方式を採用し、トレースや図の加工などは Adobe 社製 Illustrator CS5.1、Photoshop CS5.1 を用いた。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影した後、Photoshop CS5.1 を用いて調整した。原稿編集作業は Adobe 社製 InDesign CS5.5 を用いて行った。

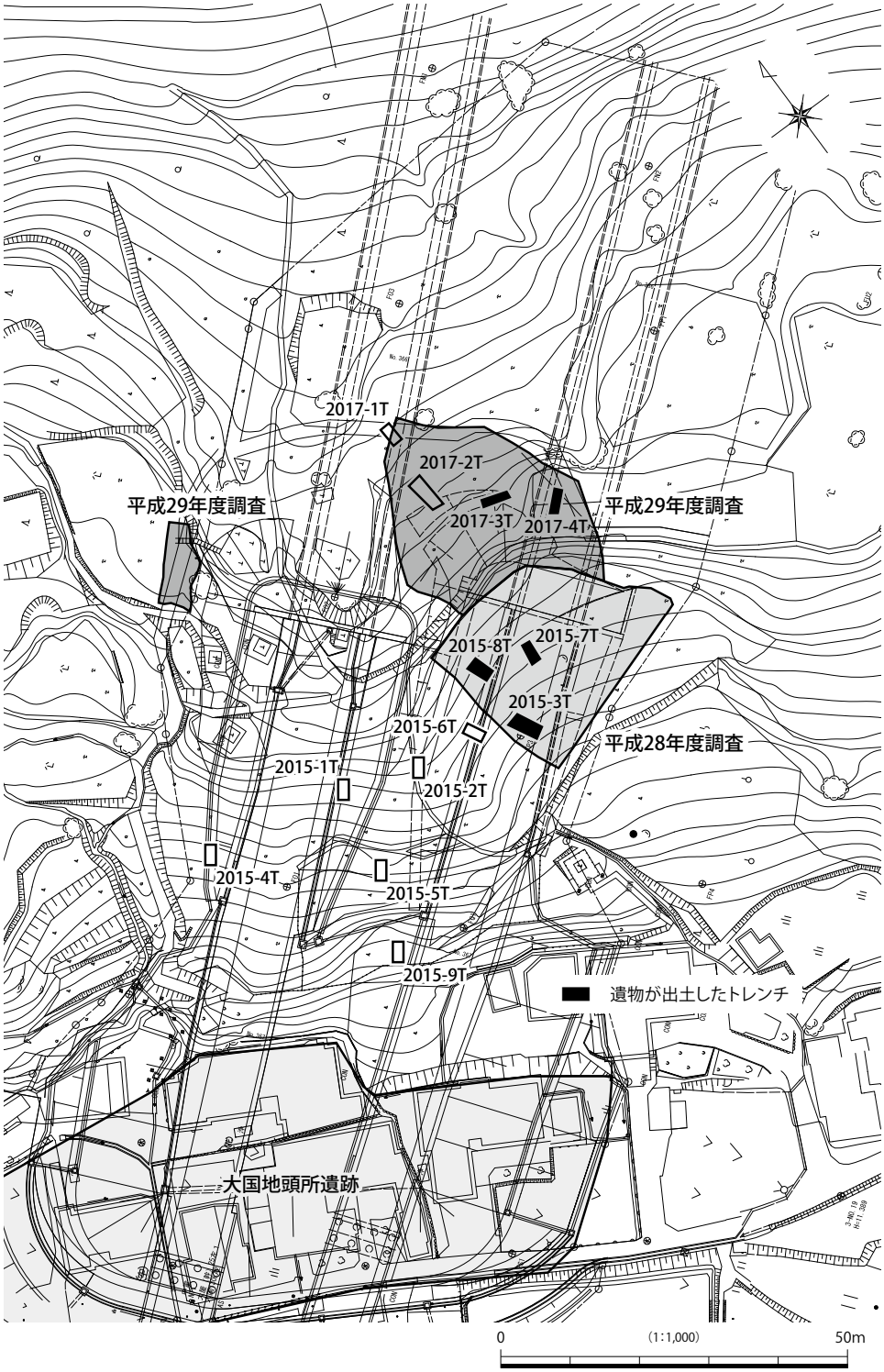
平成 28 年度の発掘調査は９月６日から開始した。10 月 28 日には田中義昭氏（元島根県文化財保護審議委員）に調査指導を受けた。11 月 12 日に現地説明会を実施した。好天に恵まれ、約 70 名の参加者があった。その後調査を進め、11 月 25 日に調査を終了した。

平成 29 年度の調査は９月１日から重機による表土掘削を始め、９月６日から作業員による人力の掘削を開始した。平成 28 年度調査区の上方を１区、西側の部分を２区とした。１区は前年度よりも傾斜が急で、滑りやすい場所であった。遺物の出土はあったものの、遺構の数は想定よりも少

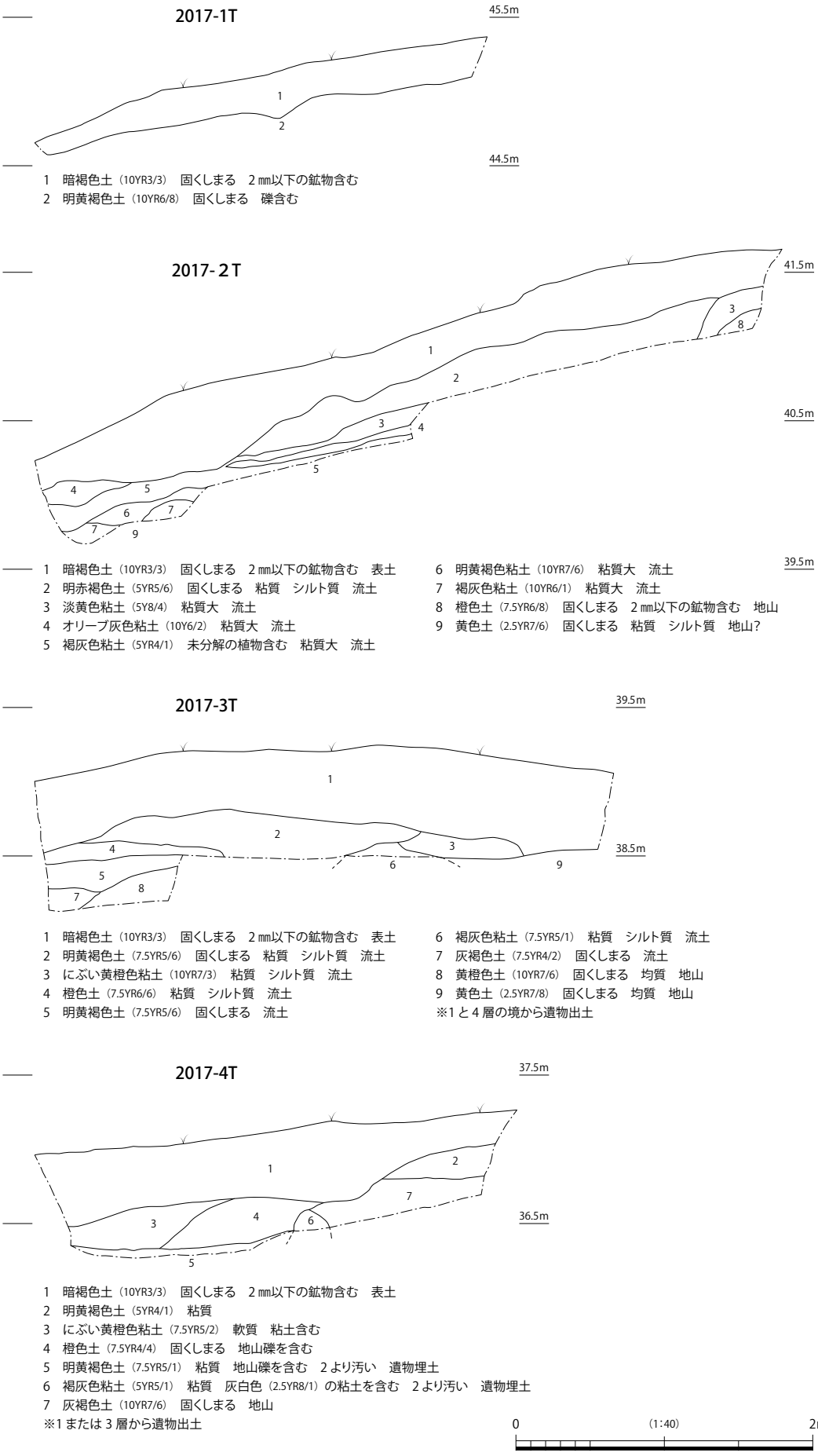
なかった。10 月 30 日には高田健一氏（鳥取大学地域学部准教授）による調査指導を受けた。その後、11 月 17 日にラジコンヘリによる写真撮影を実施し、測量を行い、11 月 27 日に発掘調査を終了した。

《平成 28（2016）年度》
9 月 6 日　人力掘削開始
9 月 14 日　段状遺構 2 検出
9 月 27 日　段状遺構 2 の下方に段状遺構 1 を確認
10 月 13 日　土器埋設遺構検出
10 月 21 日　鳥取県中部地震、被害なし
10 月 27 日　土器溜まり検出
10 月 28 日　田中義昭氏による調査指導会
11 月 12 日　現地説明会（約 70 名）
11 月 24 日　清掃、ラジコンヘリによる撮影
11 月 25 日　測量を行い、発掘調査を終了する
《平成 29（2017）年度》
［1 区］
9 月 6 日　調査開始
10 月 5 日　土坑検出
10 月 30 日　高田健一氏による調査指導会
11 月 2 日　谷状地形の続きを確認
11 月 17 日　ラジコンヘリによる空中写真撮影
11 月 19 日　大国まちづくりセンター文化祭にパネルと土器を展示
11 月 24 日　測量
11 月 27 日　完掘写真撮影、調査終了
［2 区］
9 月 6 日　調査開始、以後断続的に調査
9 月 12 日　石列検出
10 月 25 日　土層図作成
11 月 15 日　石列の測量
11 月 17 日　完掘写真撮影、調査終了

平成 29 年 2 月　武末純一氏（福岡大学法文学部教授）による調査指導
平成 29 年 7 月　田畑直彦氏（山口大学埋蔵文化財資料館）による調査指導



第 32 図　松林寺遺跡トレンチ配置図



1　暗褐色土（10YR3/3）　固くしまる　２㎜以下の鉱物含む
2　明黄褐色土（10YR6/8）　固くしまる　礫含む

1　暗褐色土（10YR3/3）　固くしまる　２㎜以下の鉱物含む　表土
2　明赤褐色土（5YR5/6）　固くしまる　粘質　シルト質　流土
3　淡黄色粘土（5Y8/4）　粘質大　流土
4　オリーブ灰色粘土（10Y6/2）　粘質大　流土
5　褐灰色粘土（5YR4/1）　未分解の植物含む　粘質大　流土
6　明黄褐色粘土（10YR7/6）　粘質大　流土
7　褐灰色粘土（10YR6/1）　粘質大　流土
8　橙色土（7.5YR6/8）　固くしまる　２㎜以下の鉱物含む　地山
9　黄色土（2.5YR7/6）　固くしまる　粘質　シルト質　地山?

1　暗褐色土（10YR3/3）　固くしまる　２㎜以下の鉱物含む　表土
2　明黄褐色土（7.5YR5/6）　固くしまる　粘質　シルト質　流土
3　にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）　粘質　シルト質　流土
4　橙色土（7.5YR6/6）　粘質　シルト質　流土
5　明黄褐色土（7.5YR5/6）　固くしまる　流土
6　褐灰色粘土（7.5YR5/1）　粘質　シルト質　流土
7　灰褐色土（7.5YR4/2）　固くしまる　流土
8　黄橙色土（10YR7/6）　固くしまる　均質　地山
9　黄色土（2.5YR7/8）　固くしまる　均質　地山
※1と４層の境から遺物出土

1　暗褐色土（10YR3/3）　固くしまる　２㎜以下の鉱物含む　表土
2　明黄褐色土（5YR4/1）　粘質
3　にぶい黄橙色粘土（7.5YR5/2）　軟質　粘土含む
4　橙色土（7.5YR4/4）　固くしまる　地山礫を含む
5　明黄褐色土（7.5YR5/1）　粘質　地山礫を含む　２より汚い　遺物埋土
6　褐灰色粘土（5YR5/1）　粘質　灰白色（2.5YR8/1）の粘土を含む　２より汚い　遺物埋土
7　灰褐色土（10YR7/6）　固くしまる　地山
※1または３層から遺物出土

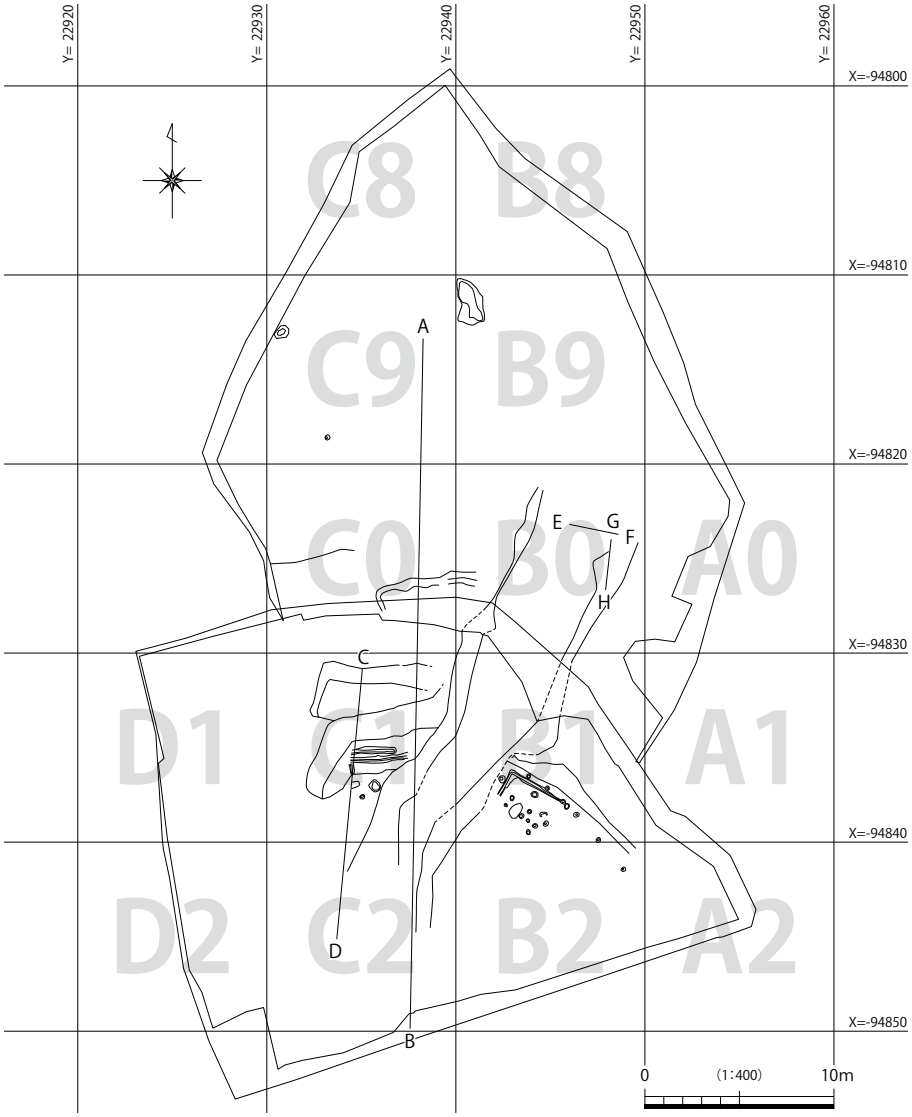
第 33 図　松林寺遺跡トレンチ土層図

第 3 節　調査成果

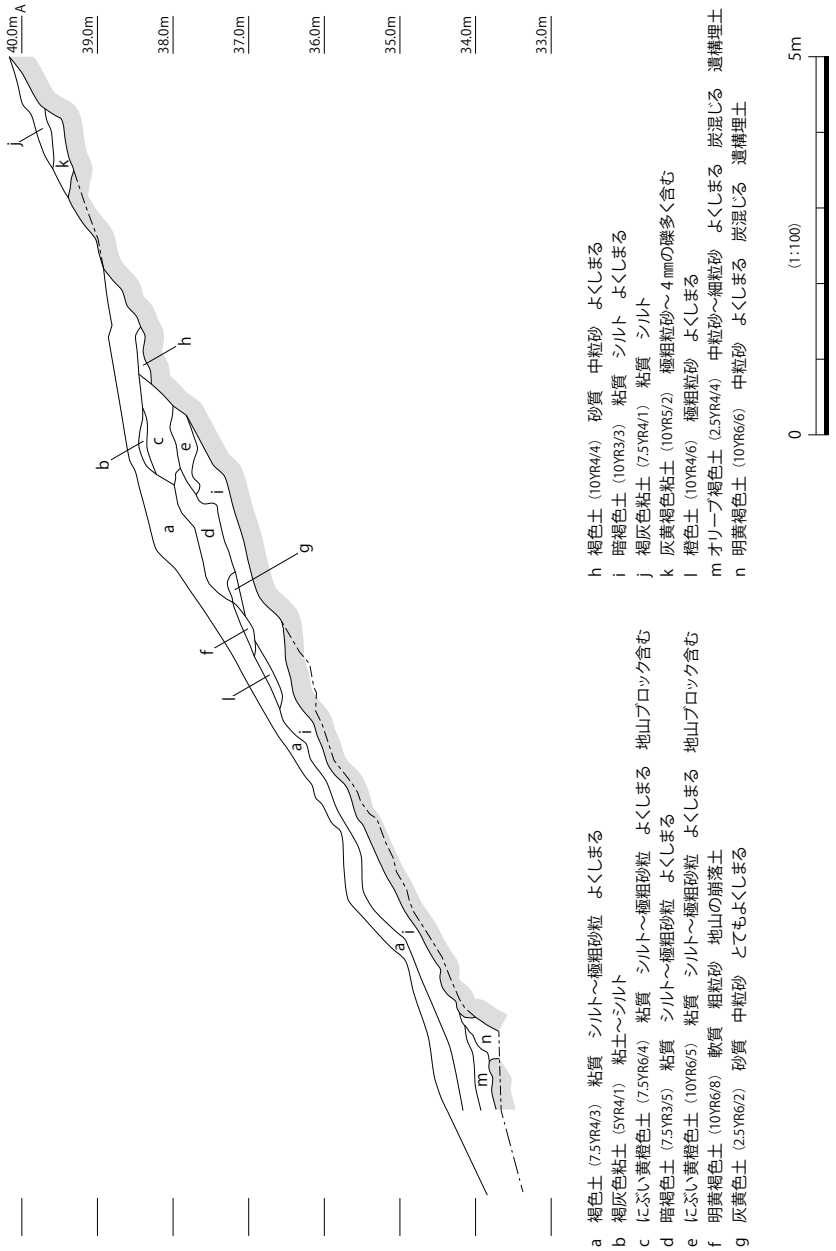
1．層序（第 35、36 図）

松林寺遺跡は斜面に位置していることから、土層は傾斜して堆積していた。最大で 1m 以上堆積している部分があった。第 35 図と第 36 図は調査年度が異なるため、統一した土色をつけることができなかった。標高 34m より上方では、堆積土は褐色土と暗褐色土の二層に大別できる。標高 38m 付近では堆積が複雑であったが、遺構は確認できなかった。標高 34m より下では、上から暗褐色土や黄褐色土、褐色土、黒褐色土が堆積していた。上位では黄褐色や褐色などやや明るい色調であるが、下位では黒褐色土のような暗い色調に変わる。拳大から人頭大の角礫を多く含む。暗褐色土や黄褐色土は水を含むと滑りやすく、B8 グリッドには地すべりと考えられる跡があった。

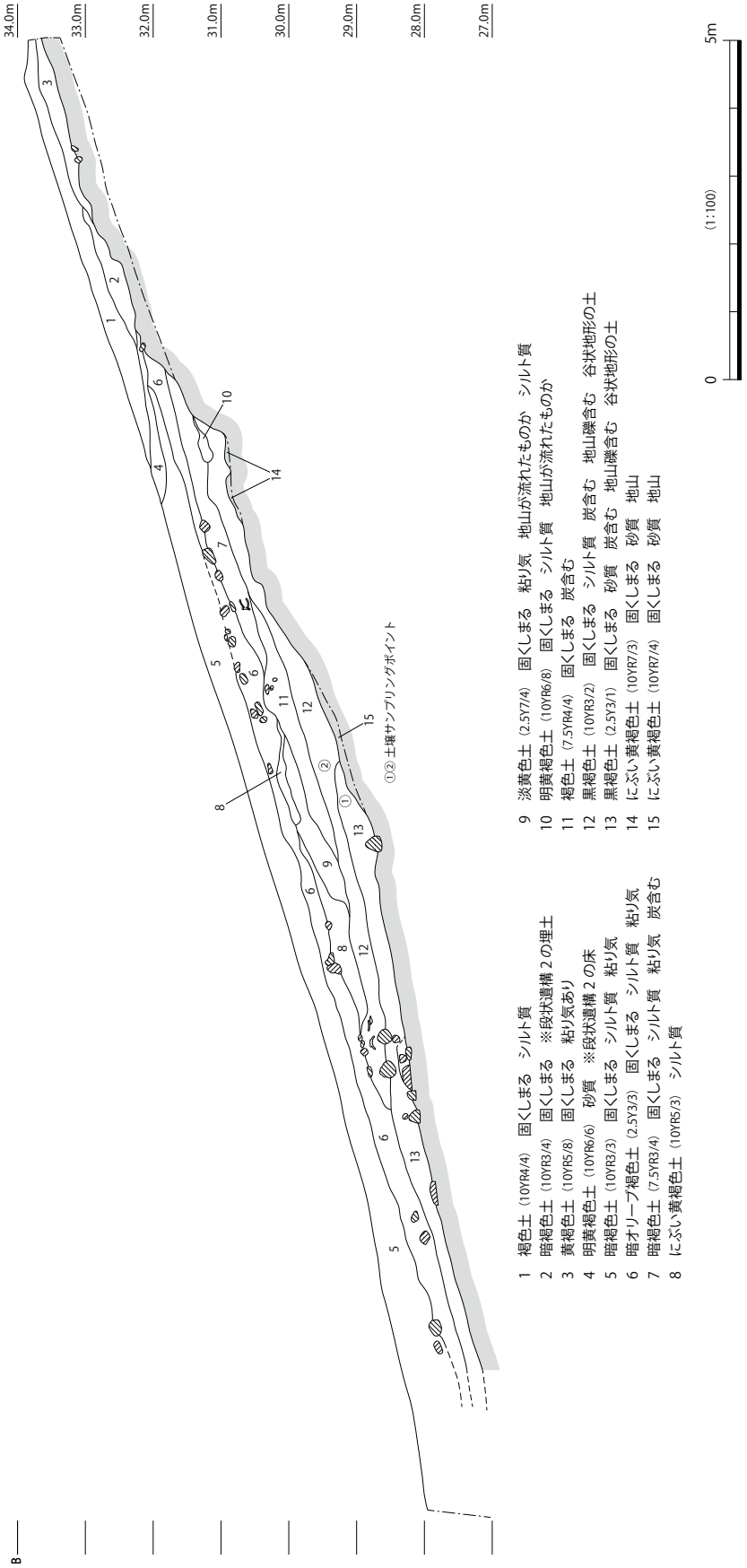
断面の観察や土層図では層を細分できたが、掘削時に出土した土器がどの層位に対応するかは判断できなかったので、一括して「褐色土」として取り上げた。また、第 35 図の 1 層と第 36 図の a 層、35 図の 5 層と 36 図の i 層が対応する可能性がある。第 37 図は段状遺構 1 と 2 の土層である。第 36 図とは対応していない部分が多いが、上位に黄褐色土、下位に黒褐色土などの暗い色調



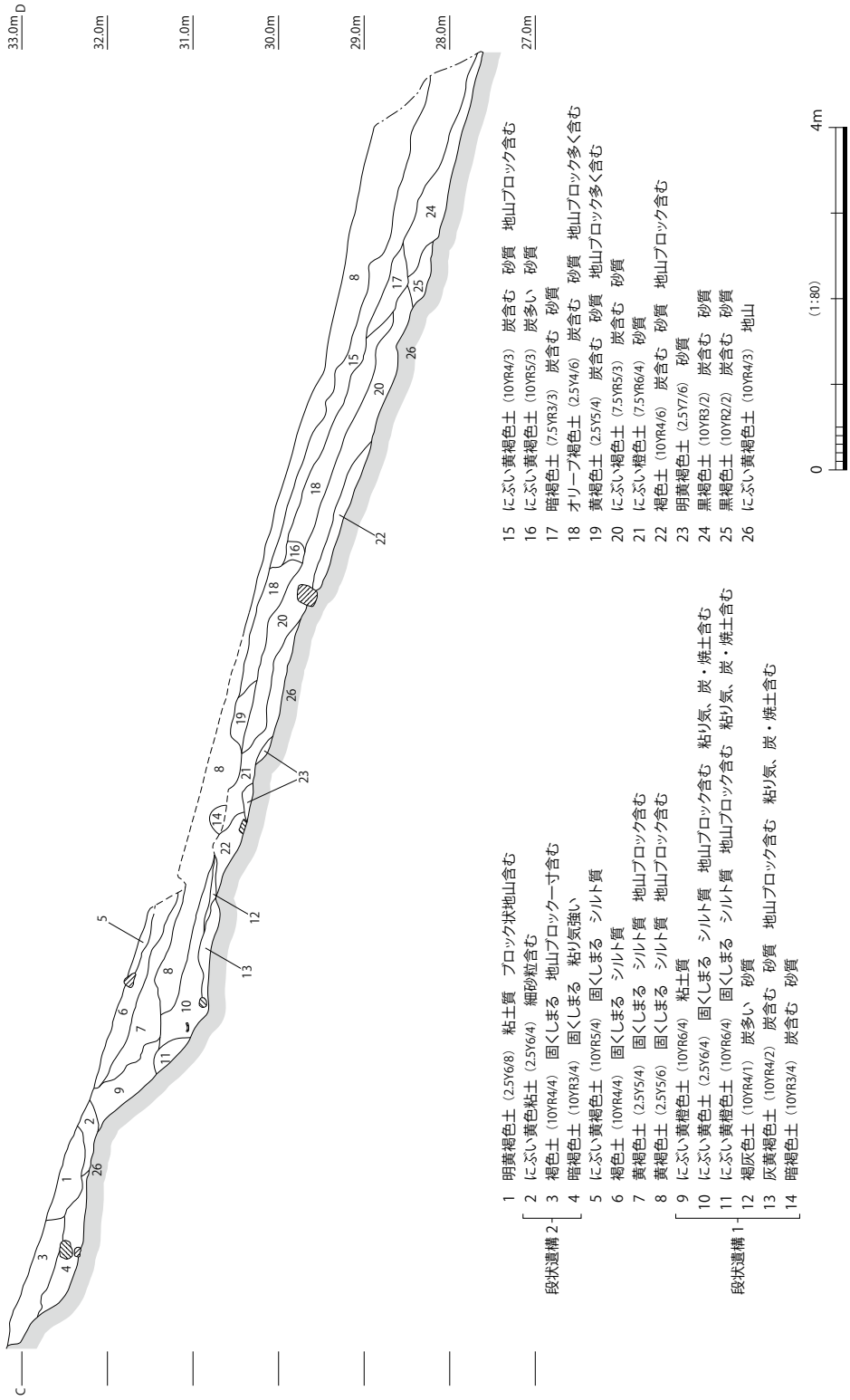
第 34 図　松林寺遺跡全体図



第 35 図　松林寺遺跡南北土層図 1



第 36 図　松林寺遺跡南北土層図 2



第 37 図　松林寺遺跡段状遺構 1、2 土層図

の土層が堆積している点は共通する。

谷状地形

B0、B1、C1、C2 グリッドでは谷状の地形を確認した。この部分は窪地になっていたが、溝のように明瞭な上場下場を確認できなったので、この部分を「谷状地形」として包含層と区別した。B0 グリッドでは、大きな岩があり、崩落の恐れがあるためその部分を残して調査を進めた。谷状地形の上部はやや湿気が多い程度で特に変化はなかった。

谷状地形の中は上層に乾燥した褐色系の土が堆積していたが、中位以下には礫混じりの粘土が堆積していた（第 38 図）。この粘土は粘性が強く、晴れた日でも常に水が染み出てきた。粘土は B1 グリッドの上方では青灰色であり、それより下位では暗褐色土や灰オリーブ褐色土が堆積していた。この部分は普段は乾いているが、降雨時には水が流れた。

谷状地形の幅は上場で 5 ～ 7m である。C2 グリッドの下方の部分では浅くなり、高低差がなくなる。出土した土器には弥生土器と土師器があり、弥生土器のほうが土師器よりも多く出土した。段状遺構 1 を切っているが、最も新しい土器の差はほとんど無かった。土器は調査区外の上方から流れてきたものがあると考えられる。

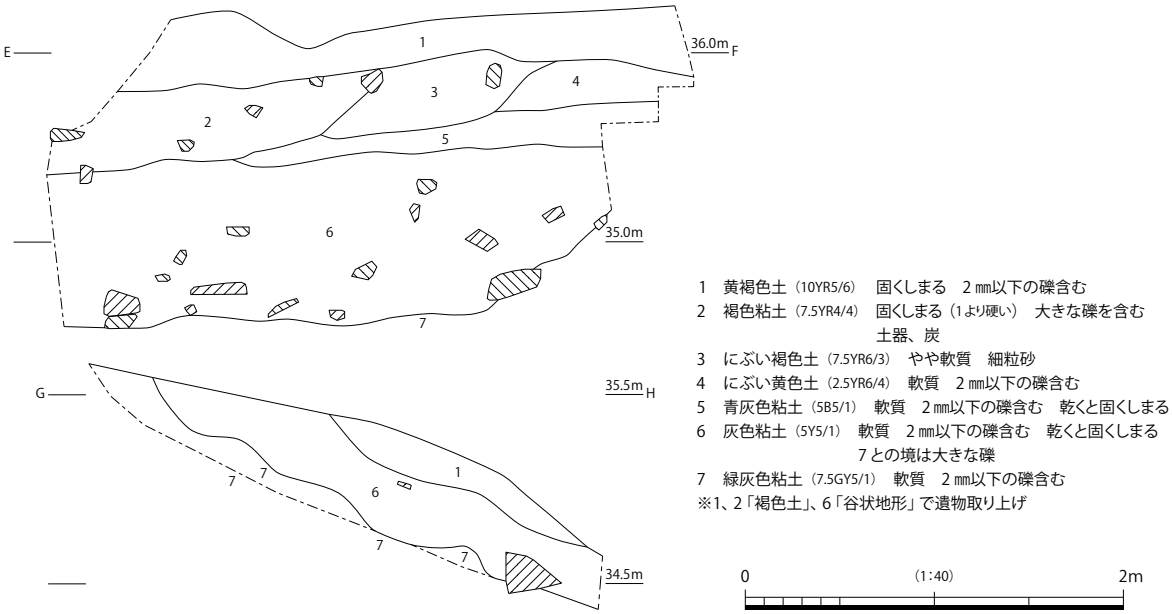
なお、谷状地形の下方には地すべり計が設置してあるため、その部分を残して調査を行った。

2. 検出遺構

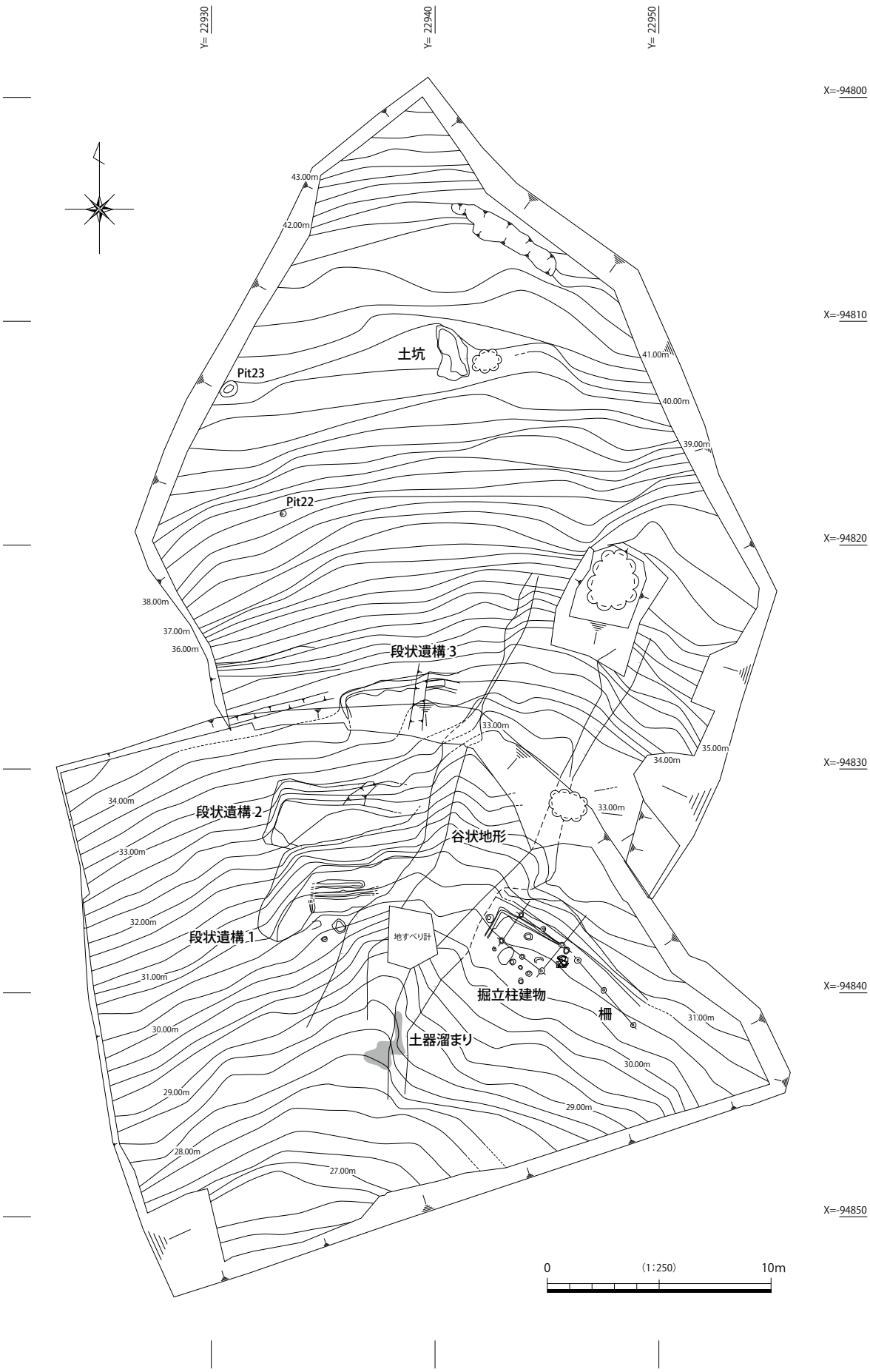
松林寺遺跡の調査では、1 区で掘立柱建物 1、柵 1、段状遺構 3、土坑 1、土器埋設遺構 1 を確認した。調査範囲の標高は 27 ～ 43m であるが、遺構は標高 30 ～ 34m の範囲に多く、土坑のみ標高 40.5m に位置していた。

掘立柱建物（第 40、41 図）

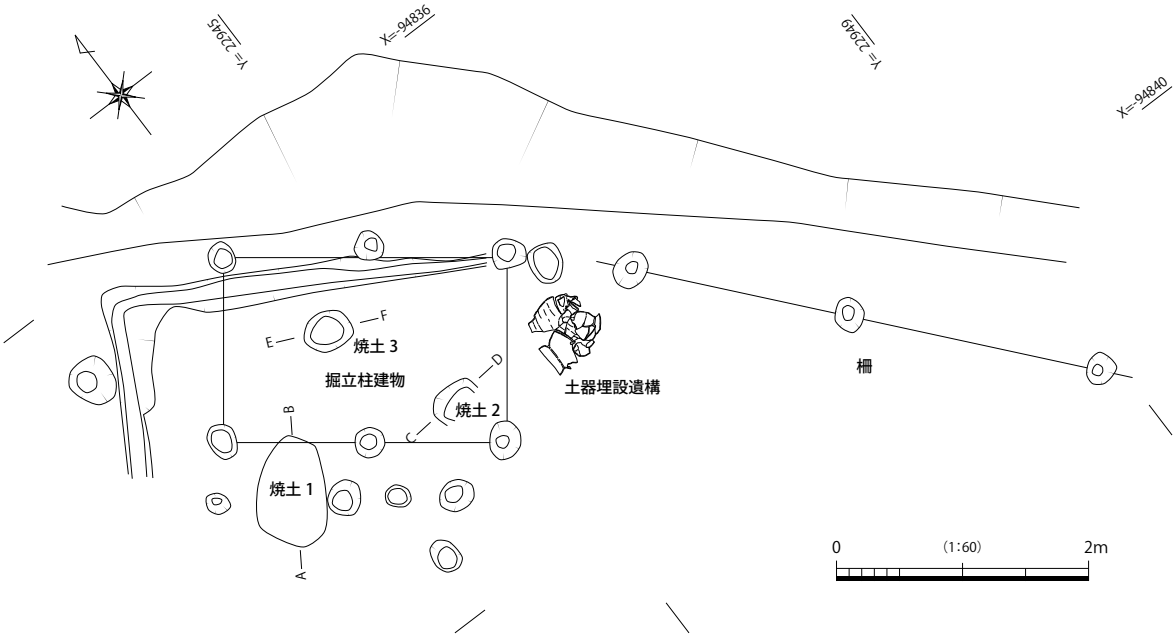
B1 グリッドに位置する。1 間× 2 間の掘立柱建物である。規模は 2.2 × 1.5m である。柱穴の埋め土はにぶい黄褐色土 1 層である。山側は斜面をカットしていることから、建物の軒の出が短かい、または平屋根の可能性がある。柱穴から遺物は出土しなかった。



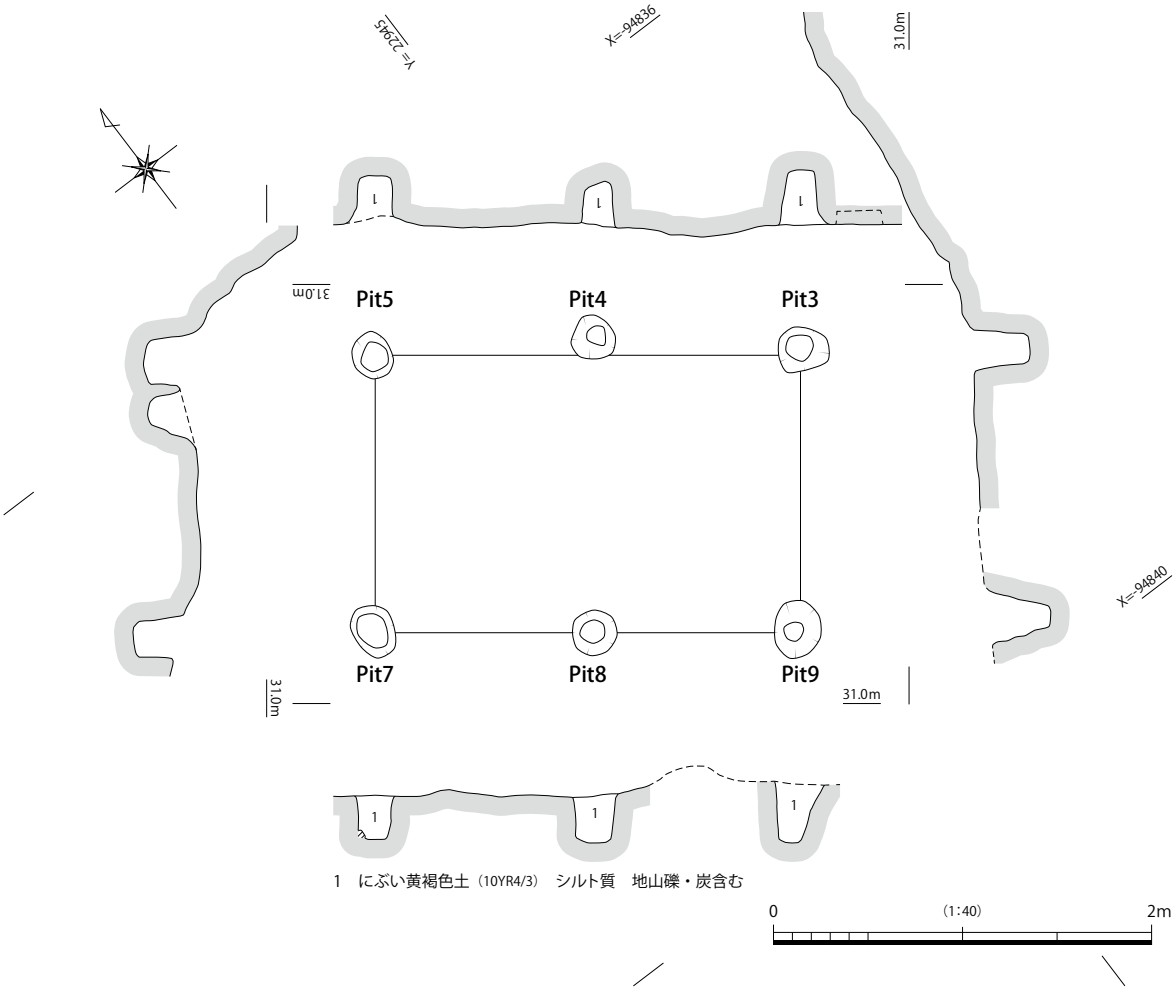
第 38 図　松林寺遺跡谷状地形土層図



第 39 図　松林寺遺跡遺構配置図



第 40 図　松林寺遺跡掘立柱建物、柵平面図



1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　シルト質　地山礫・炭含む

第 41 図　松林寺遺跡掘立柱建物実測図

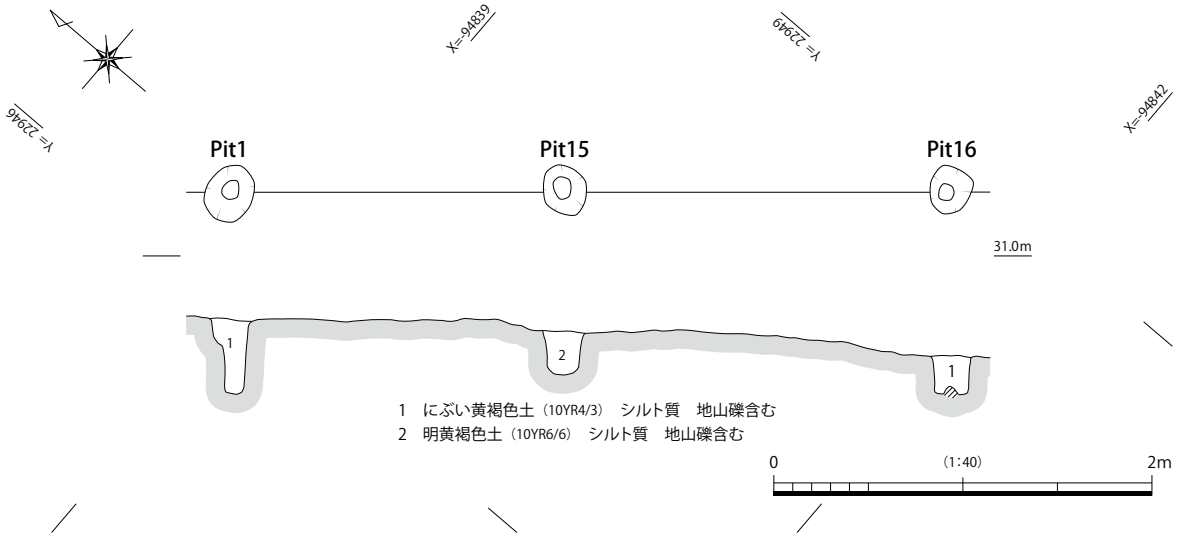
建物の中に２か所、南側に１か所の焼土面を確認した（第 40、43 図）。焼土の平面形は楕円形で、長軸で 40 ～ 90㎝、短軸で 30 ～ 55㎝の規模である。焼土はいずれも焼けてよくしまっていた。遺物は出土しなかった。

柱穴を検出し清掃した際に山側に溝があることが分かった。この溝は掘立柱建物に先行する。北側と西側のみ確認することができた。東側は SB06 の柱穴で切られており、これ以上は延びない。L 字に折れ曲がる。地山によく似た土が堆積しており、清掃中に掘りあがってしまったので、土層図を作成することができなかった。遺物が出土しなかったが、SB06 に先行することから、弥生時代後期中葉～後葉の可能性がある。

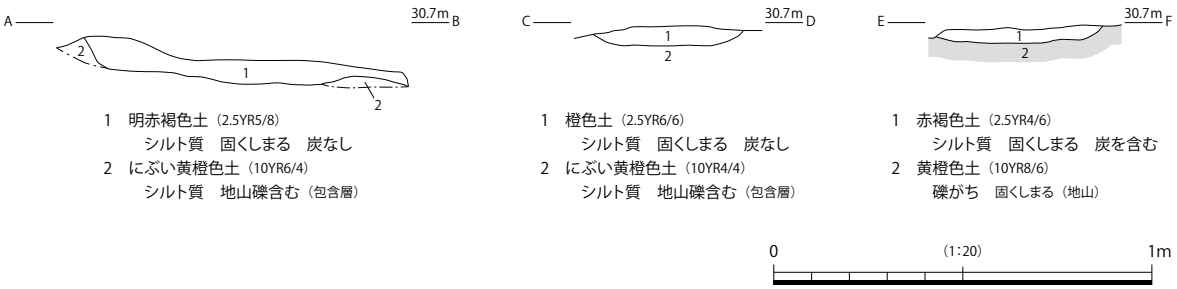
また、後述する土器埋設遺構はこの建物のすぐ東側に位置するが、土器埋設遺構の検出面が高く、建物の機能時に土器埋設遺構が存在した可能性は低いと考えられる。掘立柱建物跡から遺物は出土しなかった。土器埋設遺構に先行することから、弥生時代後期後葉～後期末と考えられる。

柵（第 42 図）

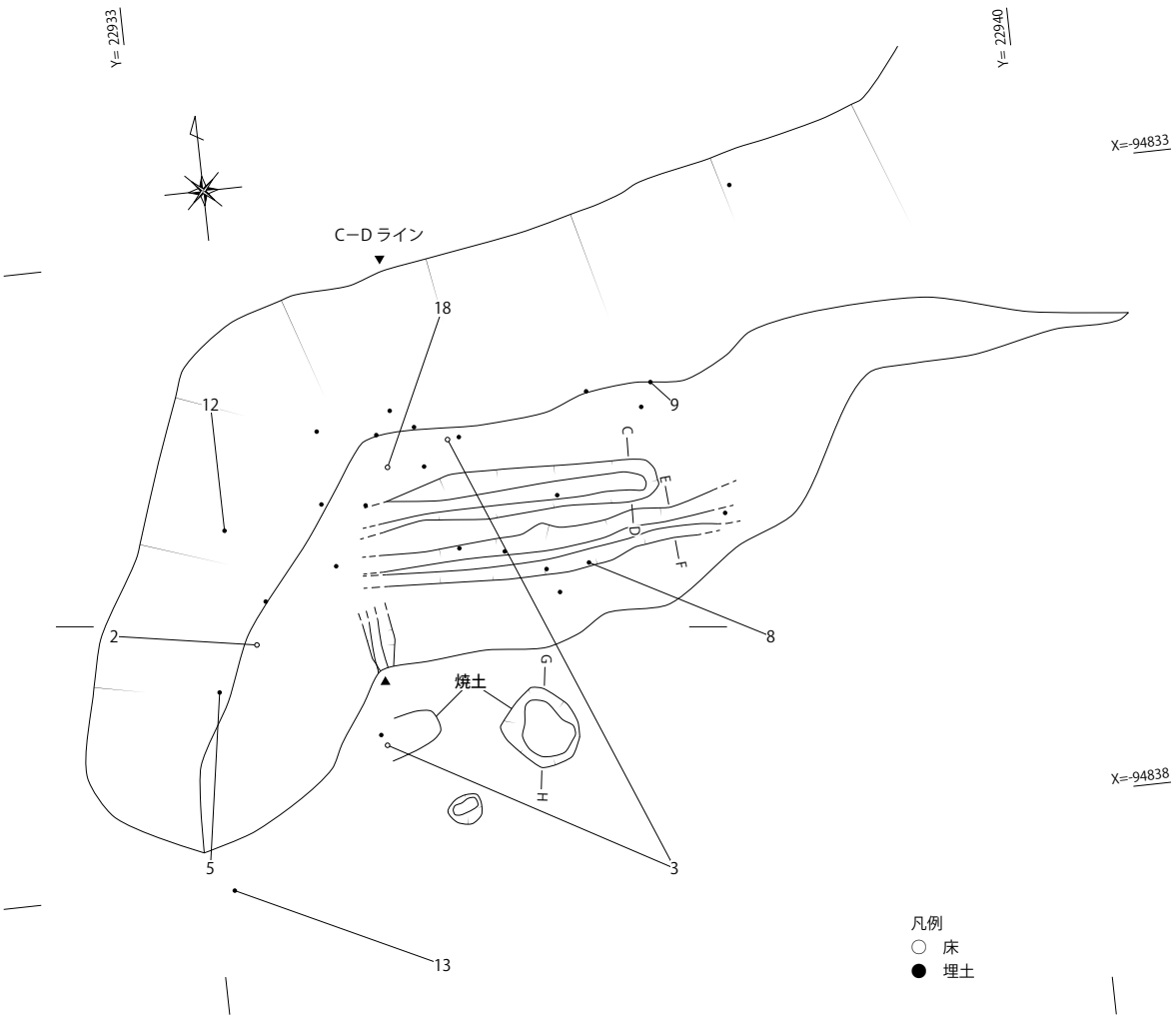
B1 から B2 グリッドにかけて位置する。掘立柱建物の東側に位置する。段の加工はこの部分まで及ぶ。２間分、3.9m の長さである。対応する柱穴が無かったので、柵と考えた。遺物が出土しなかった。掘立柱建物と同時期の遺構の可能性がある。

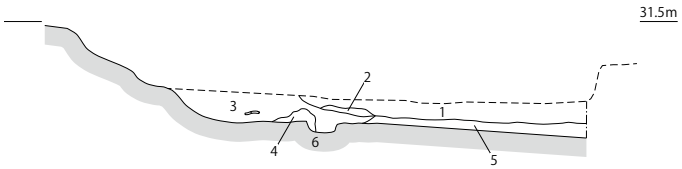


第 42 図　松林寺遺跡柵実測図



第 43 図　松林寺遺跡焼土土層図

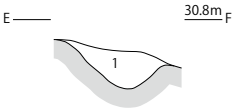




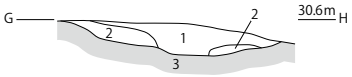
1　にぶい黄色土（2.5Y6/4）　固くしまる　シルト質　地山ブロック含む
　　粘気、炭、焼土含む（第 37 図 10 層と同じ）
2　褐灰色土（10YR4/1）　炭多い　砂質（第 37 図 12 層と同じ）
3　オリーブ褐色土（2.5Y4/4）　砂質　地山礫、炭含む
4　明黄褐色土（2.5Y6/6）　粘土質　地山礫含む
5　褐色土（7.5YR4/4）　砂質（貼床）
6　黄褐色土（10YR8/8）　粘土質（地山）

0　（1:60）　3m

1　灰褐色土（7.5YR4/2）
　　砂質　固くしまる　炭含む



1　灰褐色土（7.5YR4/2）
　　砂質　固くしまる　炭含む



1　褐灰色土（7.5YR5/1）　シルト質　固くしまる
2　にぶい赤褐色土（2.5YR4/1）　シルト質　固くしまる
3　灰褐色土（7.5YR5/2）　シルト質　粘り気あり

0　（1:20）　1m

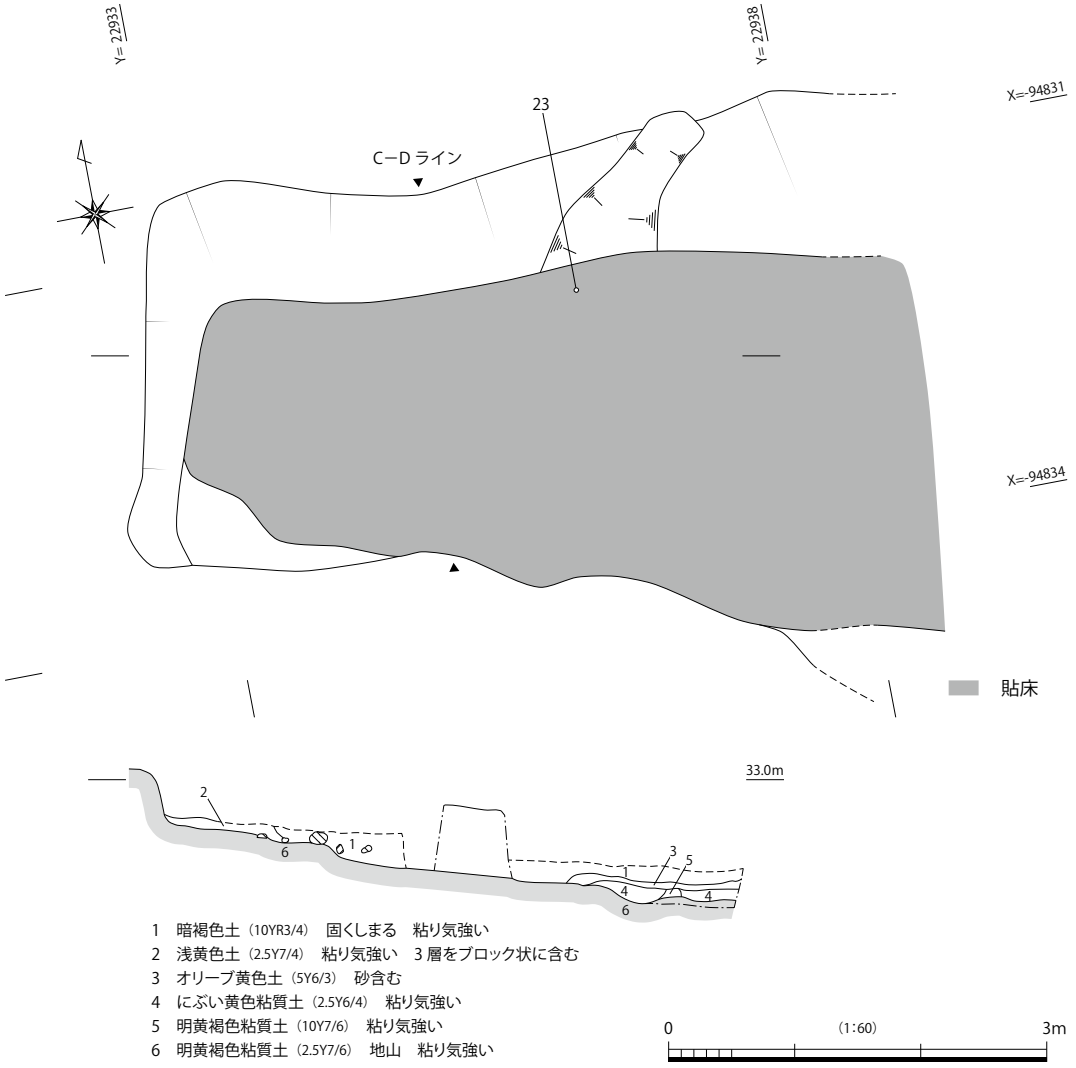
第 44 図　松林寺遺跡段状遺構 1 実測図

段状遺構１（第 44 図）

C1 グリッドに位置する。斜面を段状に加工する。土層の切り合いから段状遺構２に先行する（第 37 図）。遺構の平面形は谷状地形に削平されており現状では不整形であるが、台形であった可能性がある。規模は上場で 7.1 × 5.4m、床面で 6.0 × 3.6m である。深さは最大で 1.5m と深い。床面には斜面に並行する溝２条、直交する溝１条があるほか、やや下方にピット 1、焼土２がある。埋土は地山ブロックを含むにぶい黄色土やオリーブ褐色土であり、東側には貼床に褐色土を用いている。貼床は遺構の東側にあったが、面的に確認できなかった。床面の溝は長さ２～ 3m、幅は上場で約 30㎝、断面形は浅い U 字形である。防湿のための溝の可能性がある。床面には溝しか認められなかったことから、段状遺構と考えられる。床面や埋土から弥生土器や土師器が出土した。床面の遺物にも弥生土器（1 ～ 3）と土師器（4）があることから、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉まで使用されたと考えられる。

段状遺構２（第 45 図）

C1 グリッドに位置する。斜面を段状に加工する。段状遺構１を切り、後出する。遺構の平面形は長方形である。規模は上場で 6.5 × 4.4m、床面で 6.0 × 3.0m である。深さは最大で 70㎝であ



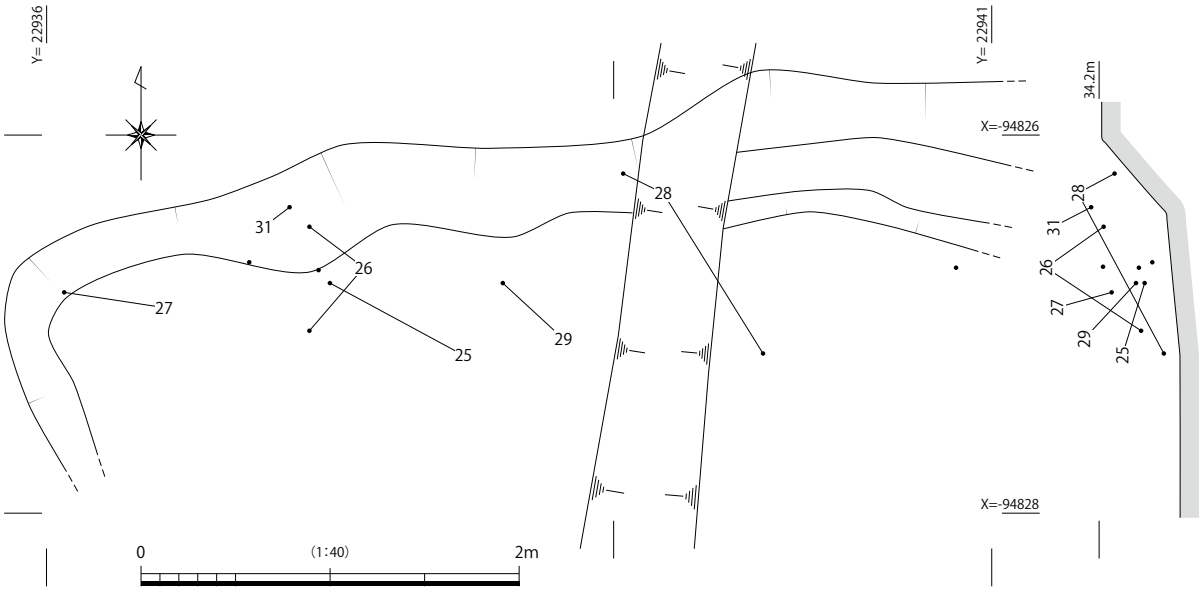
第 45 図　松林寺遺跡段状遺構２実測図

る。床面には貼床があったのみで柱穴など他の遺構を確認できなかったことから、段状遺構と考えられる。埋土は固くしまった暗褐色土である。貼床はオリーブ黄色土やにぶい黄色の粘質土である。貼床は床面ほぼ全面に広がっていた。東側が低く傾斜していることから貼床を設けたと考えられるが、それでもまだ東側が低い。貼床は段状遺構 1 を埋めている。

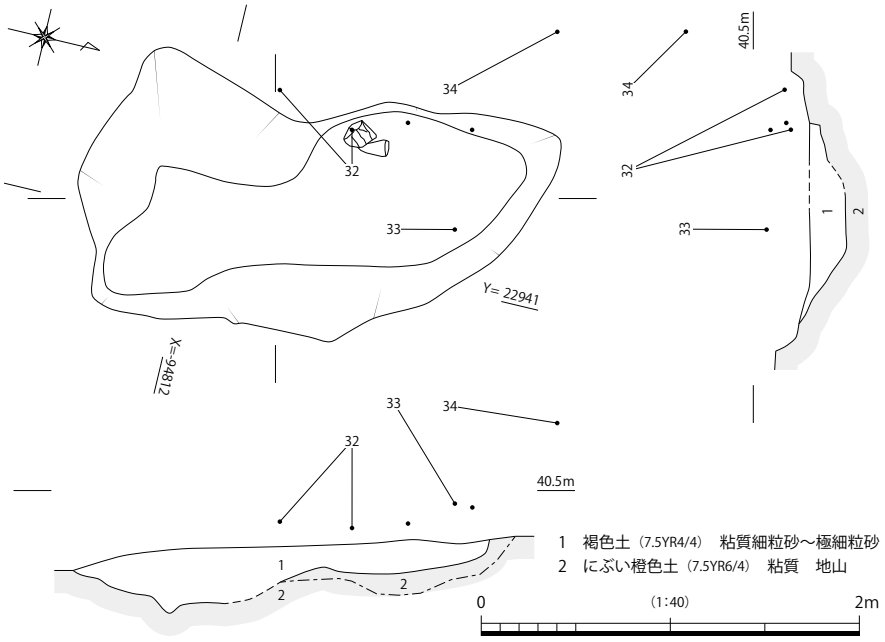
貼床にはりついたかたちで台石（23）が出土したほか、土師器片が埋土中から出土した（19 ～ 22）。これらの土器の時期から、古墳時代前期前葉～中葉と考えられる。

段状遺構 3（第 46 図）

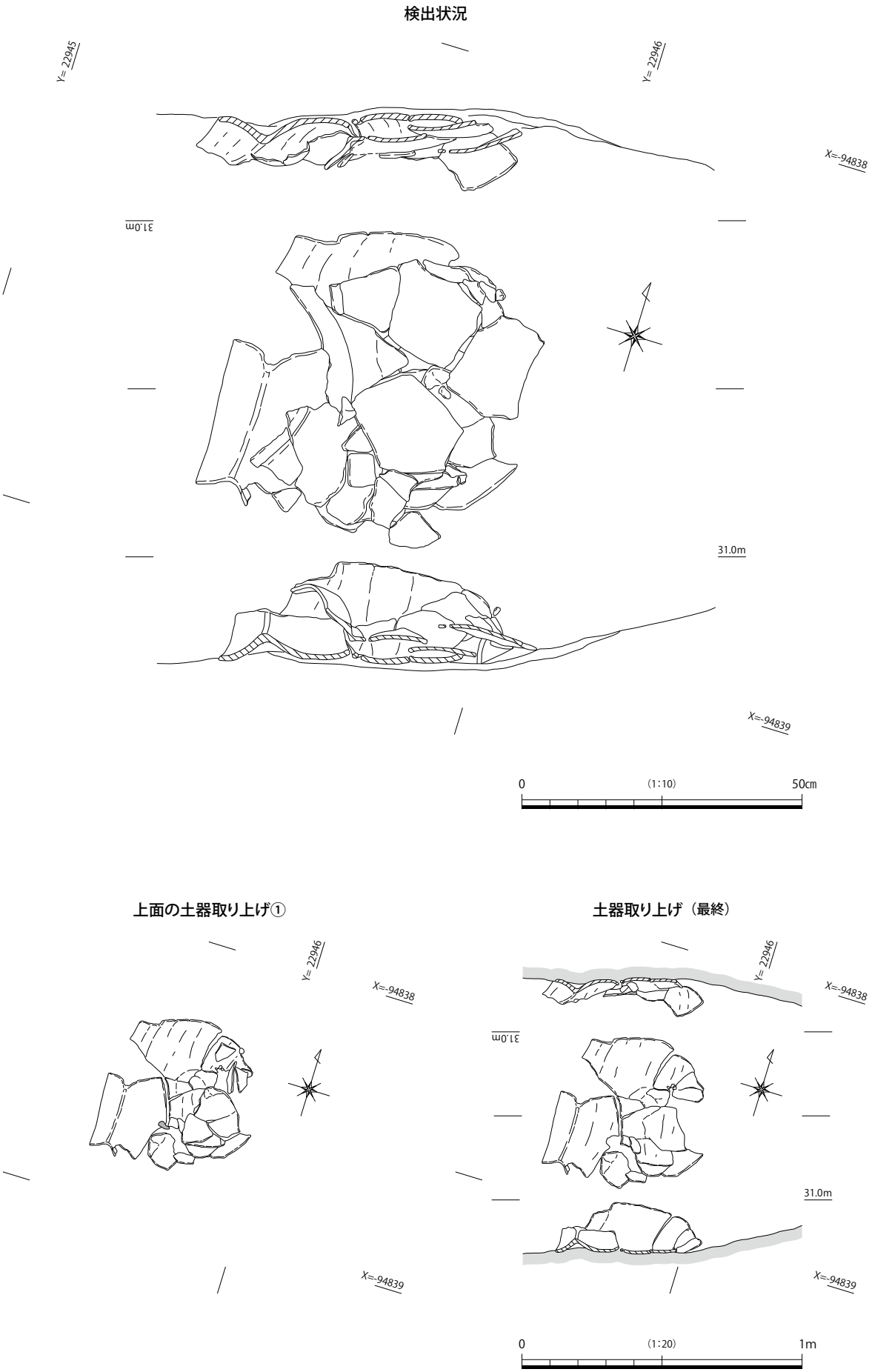
B0 から C0 グリッドにかけて位置する。斜面を段状に加工する。ちょうど H28 年度と H29 年



第 46 図　松林寺遺跡段状遺構 3 実測図



第 47 図　松林寺遺跡土坑実測図



第 48 図　松林寺遺跡土器埋設遺構実測図

度の調査区の端に位置していたため遺構であるとの認識が不十分で、南北の土層図の畦と断ち割りを遺構の中央に入れていたため、遺構の一部しか確認できなかった。規模は上場で 5.6m 以上×1.0m 以上、深さは約 0.4m である。遺構掘削中に出土した土器には弥生土器や土師器がある（25～31）。これらの土器から、遺構の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期中葉と考えられる。

土坑（第 47 図）

B9 グリッドに位置する。斜面の傾斜が緩くなった部分があり、その部分の土色の違う部分を精査したところで確認した。遺構の長軸は斜面に直行する。平面形は不整形な楕円形である。遺構のすぐ東側に大きな石があり、その大石に規制された可能性がある。規模は 2.5 × 1.5m である。深さは最大で約 0.3m である。遺構の上面やや西側で石を 2 個確認した。底面はやや凹凸がある。埋土は粘質の褐色土 1 層であった。土坑の上面から弥生土器や土師器の破片が出土した（32～34）。遺構の時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉である。

土器埋設遺構（第 48 図）

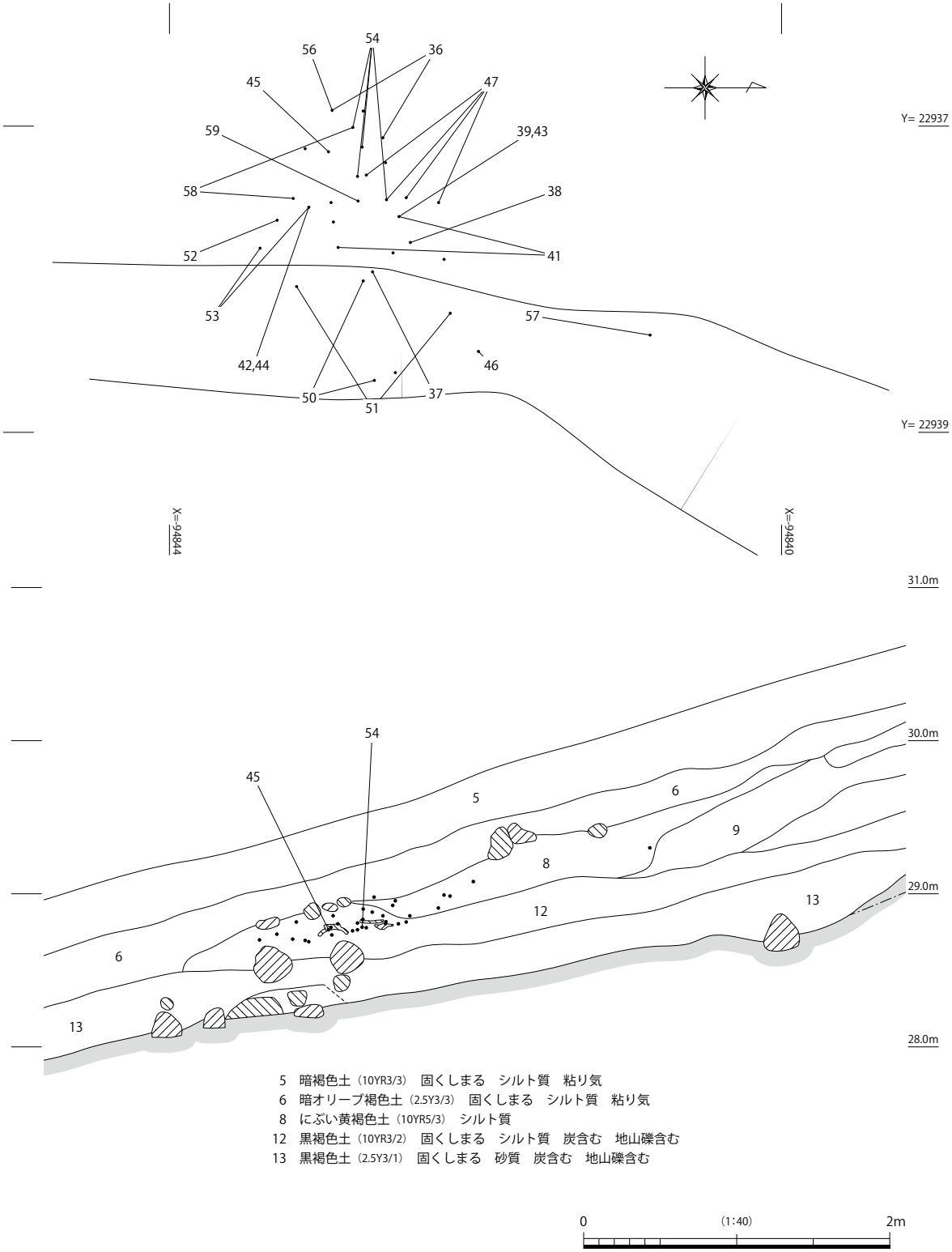
B1 グリッドに位置する。調査区中央やや東寄りの緩斜面を段状に加工して、掘立柱建物や柵と同じ平坦面に位置する。土器埋設遺構の調査時には掘立柱建物の柱穴は確認できず、掘立柱建物より浅いところで検出したので、掘立柱建物に後出する。浅い楕円形に地面を掘り、口縁を西にして、横位に大形の甕を据えていた。土器の範囲は 60 × 50㎝である。掘り込みの深さは 10㎝以下であることから、土坑を掘り土器を埋めたのではなく、横位に大形の甕を設置したと考えられる。24 の特徴から、古墳時代前期前葉と考えられる。

土器溜まり（第 49 図）

C2 グリッドに位置する。褐色土を掘削中に土器が集中して出土したので、土器の広がりを確認し、その部分を土器溜まりとして取り上げた。南北の土層図ではにぶい黄褐色土から黒褐色土に相当する。谷状地形の最下部に位置する。およそ南北 1.5m、東西 2m の範囲に広がる。土器には同じ層位に弥生土器と土師器があり（35～62）、完形に復元できるものは少なく、離れた場所から出土した土器が接合関係にある個体があることから、斜面の上位、例えば段状遺構 1 や 2 から複数回投棄されて累積した結果と考えられる。土器に伴い炭、炭化種子が出土した。炭化種子はトチノミであった（第 5 章第 2 節参照）。時期は弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉と考えられる。

土器の出土状況（第 50～52 図）

第 50 図は谷状地形内の土器、第 51 図は遺跡全体の「褐色土」中の土器、第 52 図は C9、C0 グリッドの土器出土状況である。遺跡の上方では少なく、B0、C0 グリッドより下方で多く出土した。C9、C0 グリッドでは土器が比較的集中して出土したが、地山直上だけではなく包含層中からも出土した。焼土や炭が周囲よりもやや多かったが、遺構を確認することはできなかった。台付装飾壺（172、175）が出土している。土器の数量と重量は第 13 表に示した。

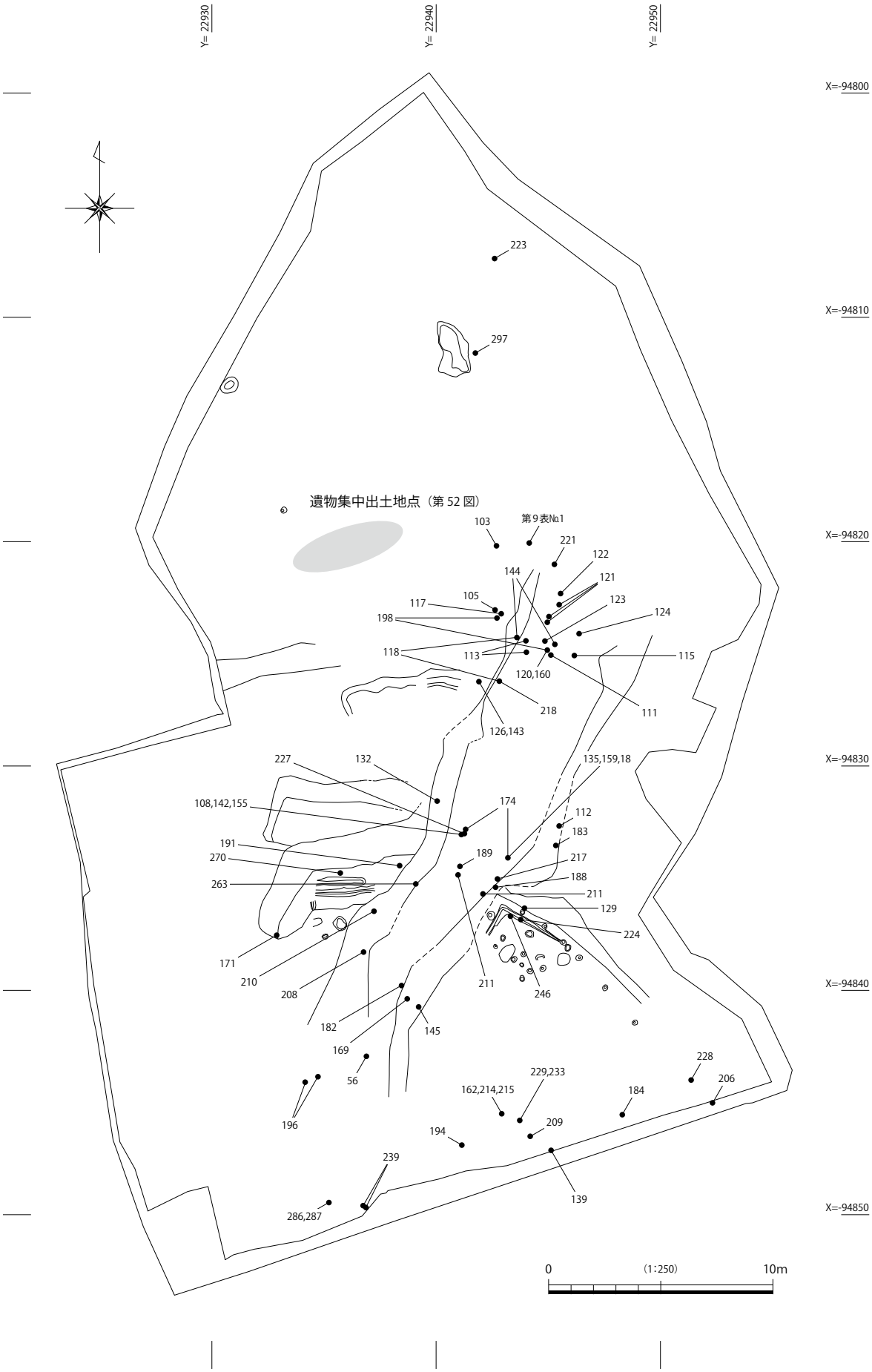


5　暗褐色土（10YR3/3）　固くしまる　シルト質　粘り気
6　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）　固くしまる　シルト質　粘り気
8　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　シルト質
12　黒褐色土（10YR3/2）　固くしまる　シルト質　炭含む　地山礫含む
13　黒褐色土（2.5Y3/1）　固くしまる　砂質　炭含む　地山礫含む

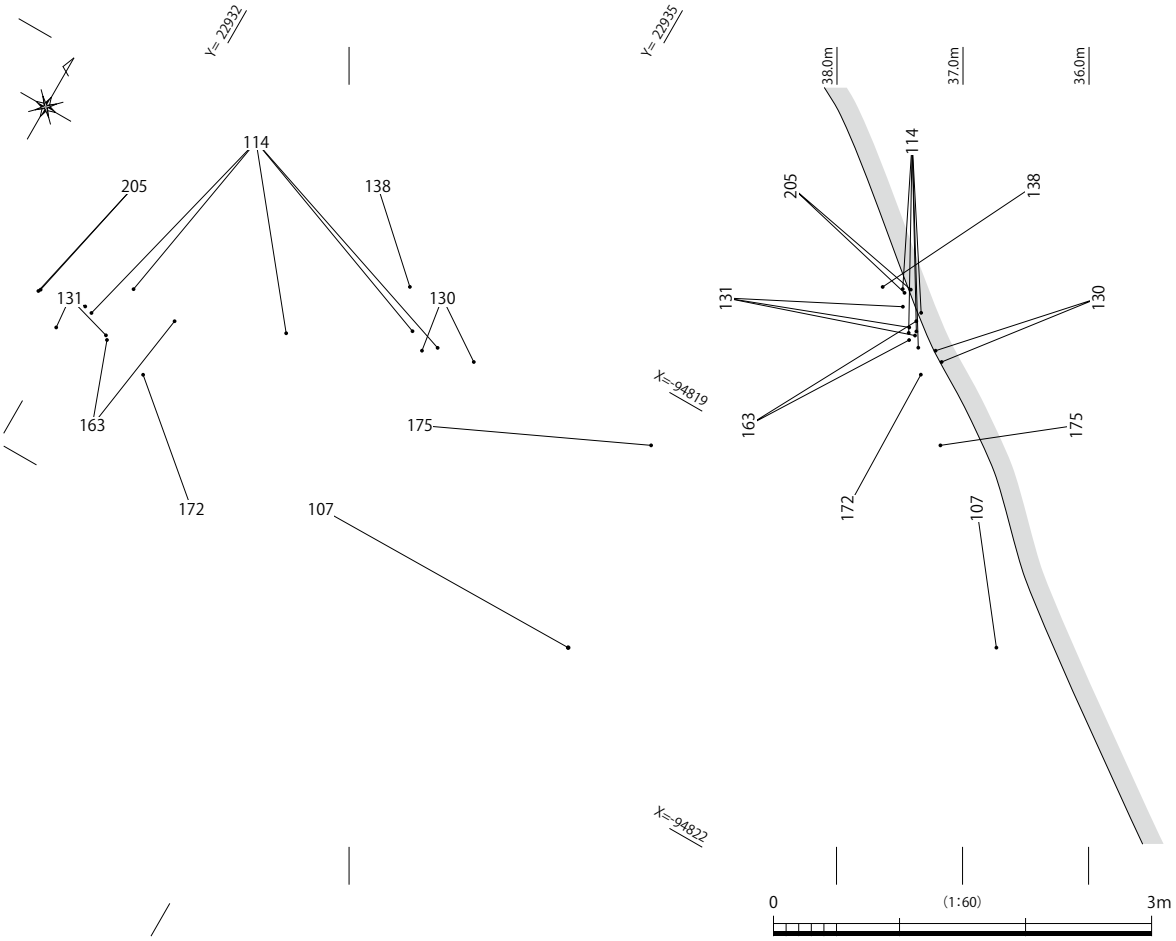
0　（1:40）　2m

第 49 図　松林寺遺跡土器溜まり実測図

第 50 図　松林寺遺跡谷状地形土器出土状況図



第 51 図　松林寺遺跡土器出土状況図



第 52 図　松林寺遺跡 C9C0 土器出土状況

写真 5　作業風景

３．２区（第 53 図）

調査地は世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』のバッファーゾーンの範囲内であり、石見銀山遺跡が繁栄した時期の遺構・遺物の存在が想定されたことから、調査を実施した。

１区から約 40m 離れた丘陵中程の平坦面に調査区を設定した。調査前から石製の階段が露出しており、江戸時代もしくはそれより新しい時期の遺構の存在を想定した。調査区は長さ約 12m、幅３～ 5m である。調査の結果、石列を確認した。また、階段を清掃した。なお、図示していないが調査区の東側には水たまりがあり、滞水していることや泥が深いことから調査を行わなかった。

調査区の北東側の壁の土層では、調査区の北側では表土の褐灰色土（1 層）が薄く堆積しており、すぐに地山である黄褐色土を確認した（第 54 図）。調査前は平坦であったが、断ち割りをしたところ、南西側では地山が傾斜しており、地山ブロックを含む粘質の土が堆積していた。地山の上のにぶい黄褐色土（7 層）には、拳大の礫を多数含んでいた。表土がほぼ水平に堆積していることから、4 層以下は造成土の可能性があり、調査区の南側半分ほどは造成された部分である。

石列（第 55 図）

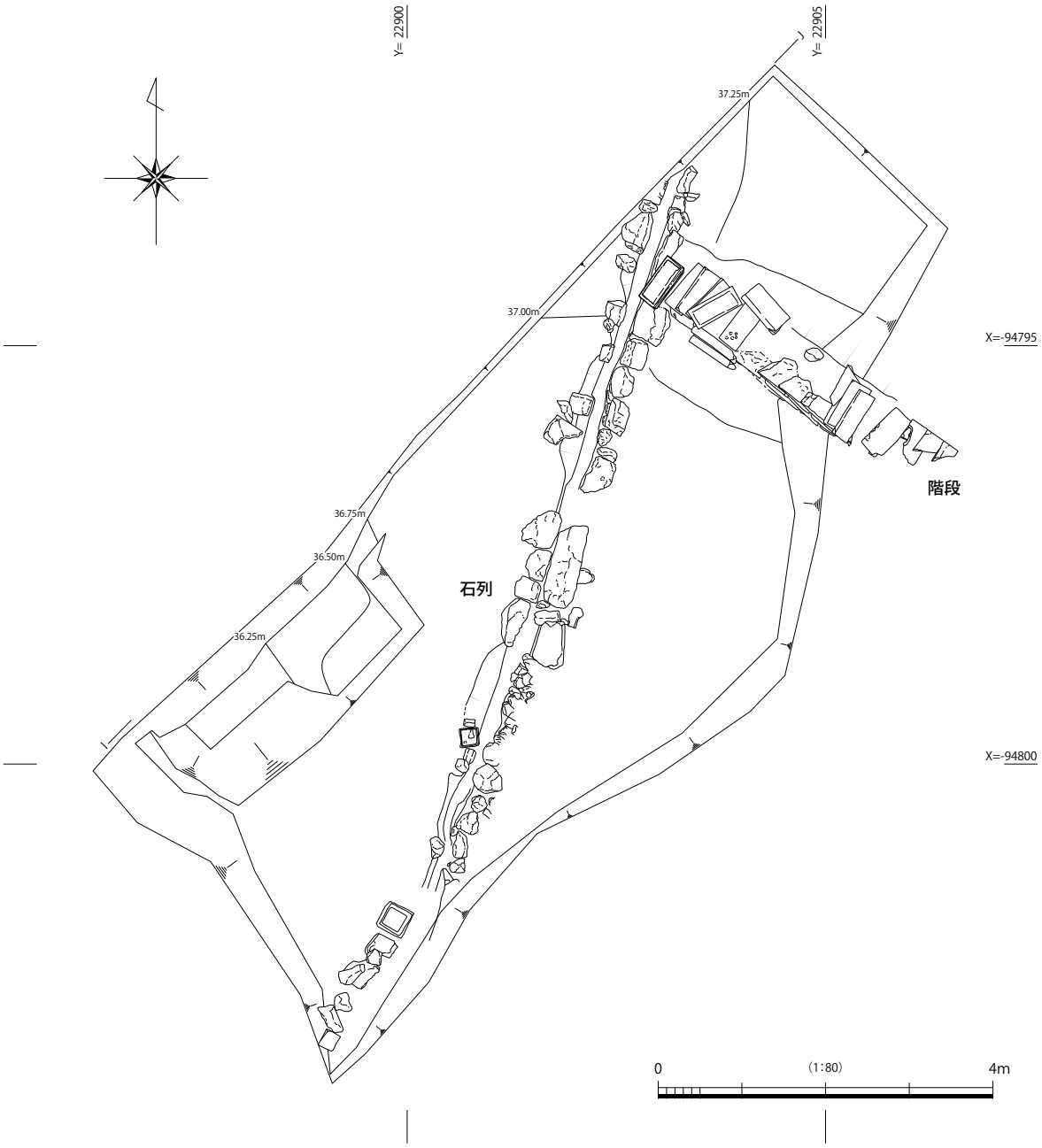
調査区の中央を北東 - 南西方向にのびる。現状で長さ 11m であり、さらに南北へ延びるようである。調査区の南側には木の根があり、溝は確認できなかったが、西側の石を確認した。幅約 20 ㎝ほどの溝の両側に拳大から人頭大の角礫を置いている。石は積み上げておらず、1 個のみ置いている。石列の石に宝篋印塔を転用したものが 2 点あった。東側の石に大きい角礫が多い。埋土は褐灰色土で、表土と区別できなかった。普段は乾いているが、降水時には水が北から流れたので、排水用と考えられる。埋土から土器が出土しなかったので、時期は不明であるが、宝篋印塔（303）を石列に転用していること。埋土が表土と同じであったことから、江戸時代以降の可能性がある。

階段（第 56 図）

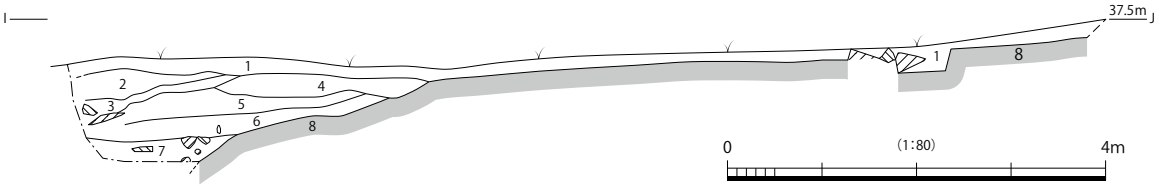
調査区の東側に位置する高まりへ続く階段である。調査範囲にかかった約 4m 部分を清掃した。地山を削り出した上に踏み石を直接置いているが、南側は長方形の石を最大で 6 段積み、踏み石を置く部分を平たんにしている。階段の中程は踏み石が落ちて原位置を保っていないが、上の部分と下の部分は原位置を保っているものが多い。合計 15 ～ 20 段存在したと考えられる。踏み石は長さ約 60㎝、幅約 30㎝、厚さ約 10㎝である。表面は平滑に仕上げているが、裏面は中をくりぬくように加工したままである。階段の上には後述する江戸時代の墓地があったことから、階段の時期は江戸時代以降と考えられる。

墓地（第 57 図）

１区と２区の間の高まりの部分には江戸時代から明治時代の墓地があった。墓地の移転に際して、平成 26 年度に調査を行い、墓石の内容を記録した。墓石の内容は第 6 表に示した。約 30 基余りの墓石は寛延 4（1751）年のものを最古とし、明治 20 年代まで築かれた。

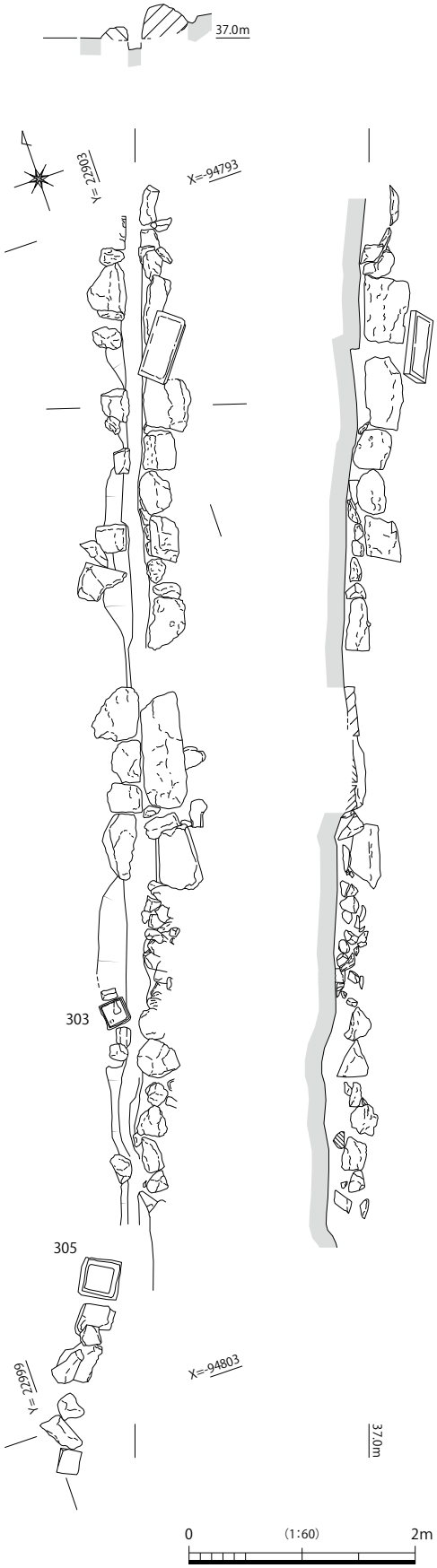


第 53 図　松林寺遺跡 2 区全体図

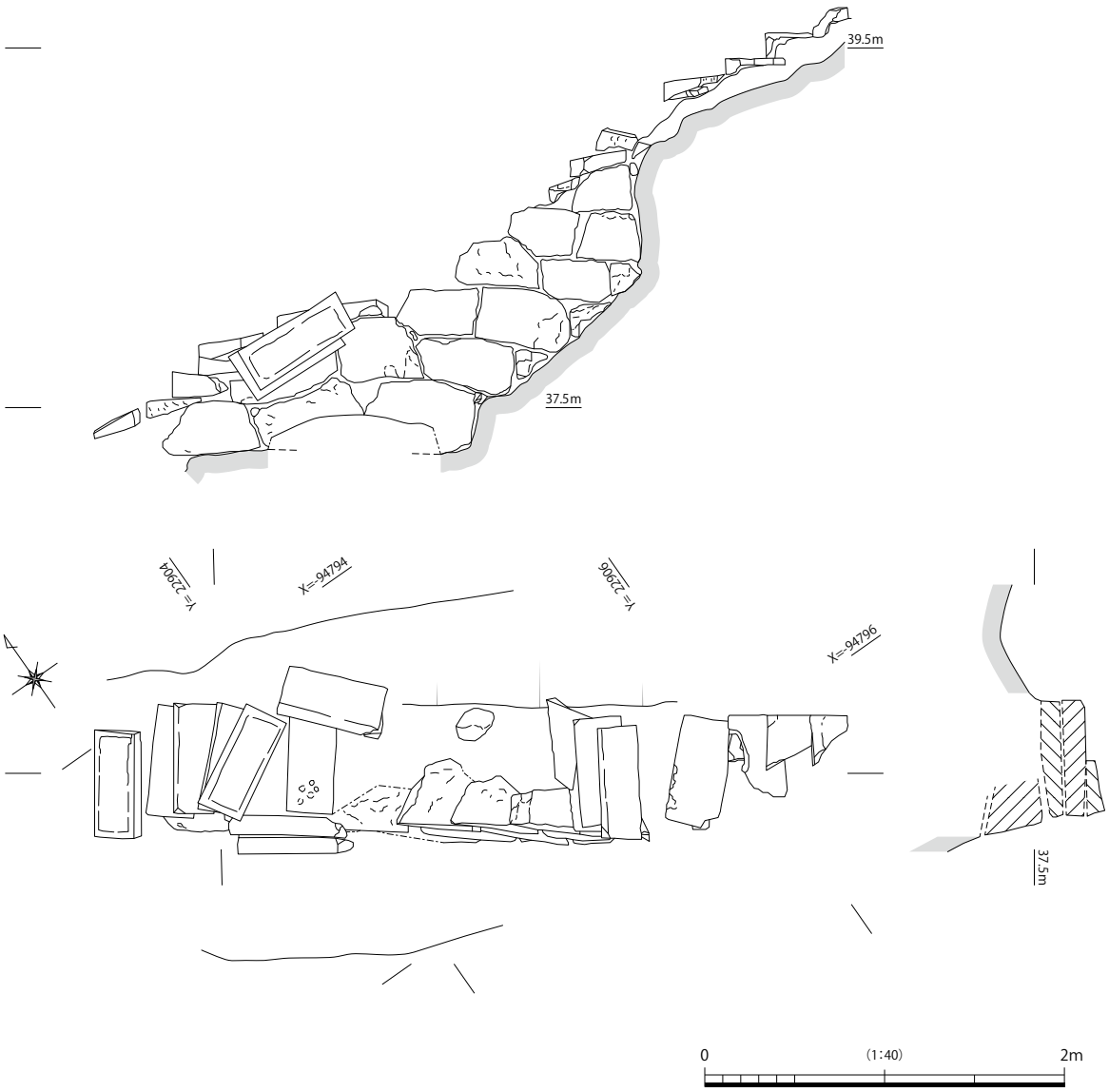


1　褐灰色土（10YR5/1）　粘質　細粒砂～中粒砂　表土
2　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　粘質　細粒砂～中粒砂
3　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　粘質　細粒砂～中粒砂
4　明黄褐灰色土（10YR6/6）　粘質　中粒砂　地山ブロック含む
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　粘質　中粒砂
6　灰黄褐色土（10YR5/2）　粘質　中粒砂　地山ブロック含む
7　にぶい黄橙色土（10YR4/3）　粘質　細粒砂　ボロボロくずれる
8　黄橙色土（10YR8/8）　粘質　固くしまる　地山

第 54 図　松林寺遺跡 2 区西壁



第 55 図　松林寺遺跡 2 区石列



第 56 図　松林寺遺跡 2 区階段

写真 6　調査指導風景 1

第 57 図　松林寺遺跡石造物平面図

写真 7　調査指導風景 2

第 6 表　松林寺遺跡墓石一覧表

墓石等番号	種別	西暦	高さ（cm）	最大幅（cm）	備考
A-1	地蔵	―		22.0	台座のみ
A-2	突頂方柱	1848-1854	80.4	21.2	
A-3	突頂方柱	―	88.8	22.0	
A-4	円頂方柱	―	112.2	23.7	
A-5	灯籠		84.1	34.1	台座のみ
A-6	灯籠				
A-6-2	一石宝篋印塔				
A-7	地蔵	―		24.0	
A-8	円頂方形	1859 1883	106.8	27.5	
A-9	円頂方柱（形）	1820	111.2	27.2	
A-10	墓石（無縫塔）	1751	17.0	32.8	
A-11	墓石（無縫塔）	1766	147.3	29.5	
A-12	円頂方形	―	74.7	21.5	
A-13	笠付方形	―		24.4	
A-14	基礎			18.5	
A-15	笠付方形	1807 1838		52.0	
A-16	円頂方柱	1887-1896	101.2	24.0	
A-17	墓石	―	94.6	23.0	
A-18	墓石	―	83.0	18.0	
A-19	墓石	―			
B-1	円頂方形	1820	94.5	23.5	
B-2	円頂方柱	1807	85.1	22.8	
C-1	祠		89.1	52.5	
C-1-2	笠付方形				
D-1		1862	67.7	25.2	
D-2	円頂方柱	1838			
E-1	円頂方柱	1798 1806		23.2	
E-2	墓石（無縫塔）	―		20.8	
F-1	灯籠	―			破片 4
F-2	灯籠	―			破片 4
F-3	相輪	―		18.9	
G-1	墓石	―			
H-1	地蔵	―			
I-1	墓石	1843			
I-2	墓石	1838			
I-3	墓石	1775			
I-4	墓石	―			

4．出土遺物

松林寺遺跡から出土した土器を基準で分類し、注記が可能なものの数量と重量を計測した。その結果は第 13 表に掲載した。出土土器の中で最も多いのは弥生土器と古墳時代前期の土師器である。このうち、出土量の多い弥生土器の甕の分類を行い、その指標を明示する。分類は甕の各部位の特徴や文様の変遷に着目して行うべきであるが、肩部より上位しか遺存していない資料が多いので、口縁部形態に着目し以下のように分類する。

• 口縁部の形態（第 58 図）

Ⅰ：口縁部が内傾または直立する。

Ⅱ：口縁部が外反する。

• 口縁部の長さ（相対的なもの）

Ａ：短い

Ｂ：長い

• 口縁部下端の稜の突出の程度

ａ：口縁部下端の稜の突出が弱い

ｂ：口縁部下端の稜が強く突出

• 口縁部の文様の有無

１：有文（櫛描、貝殻）

２：施文後ナデ消し

３：無文（ヨコナデ）

以上に分類し、「甕 IAa1 類」「甕 IIBb2 類」のように表記する。

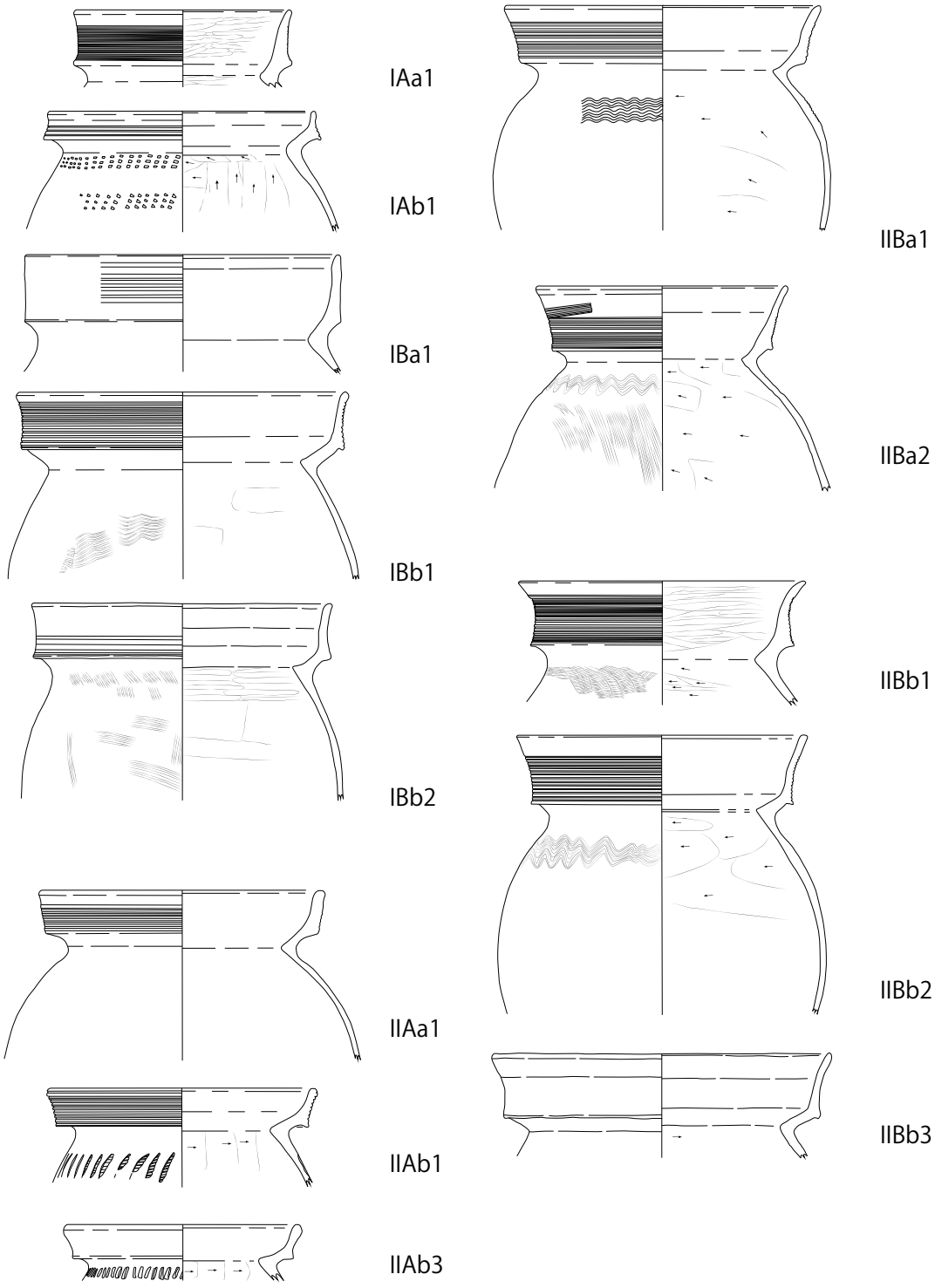
直線文について、原体を確認できたものは「貝殻直線文」のように呼称したが、そうでないものについては「直線文」「波状文」のように原体を特定していない。

弥生土器、古墳時代前期の土師器の編年においては、土器の要素が共通することから、（松本 1992）（鹿島町教育委員会編 1992）（松山 2015）の出雲地域の編年を用いる。

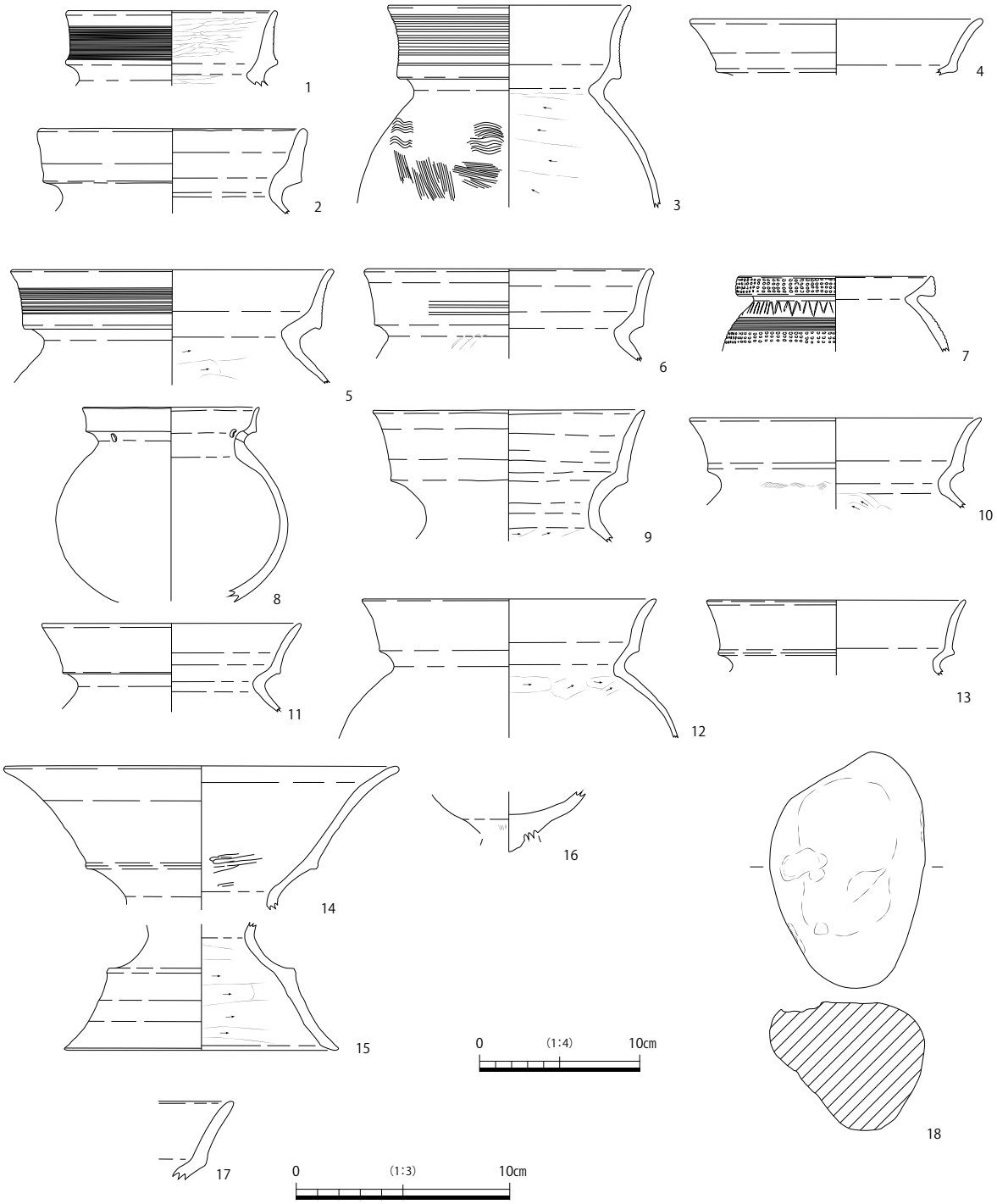
松林寺遺跡の弥生土器は、胎土に 1 ～ 2㎜の鉱物を含むものがほとんどであるが、土師器の胎土は鉱物を含まず、砂質であるものがほとんどであった。このことから、破片であっても弥生土器と土師器を区別することができた。なお、松林寺遺跡の土器は丘陵部に位置しているためか、摩滅しているものが多く、焼成が軟質のものが多い。

段状遺構 1（第 59 図 1 ～ 18）　1 ～ 4 は床面で出土した。1 は口縁が直立し、外面には直線文がある。口縁部下の稜はあまり突出しない。2 は口縁部が厚い。摩滅のため文様の有無は不明である。3 は口縁部が外反する。4 は土師器の甕である。口縁部下の稜の突出は鈍く、口縁端部は丸い。

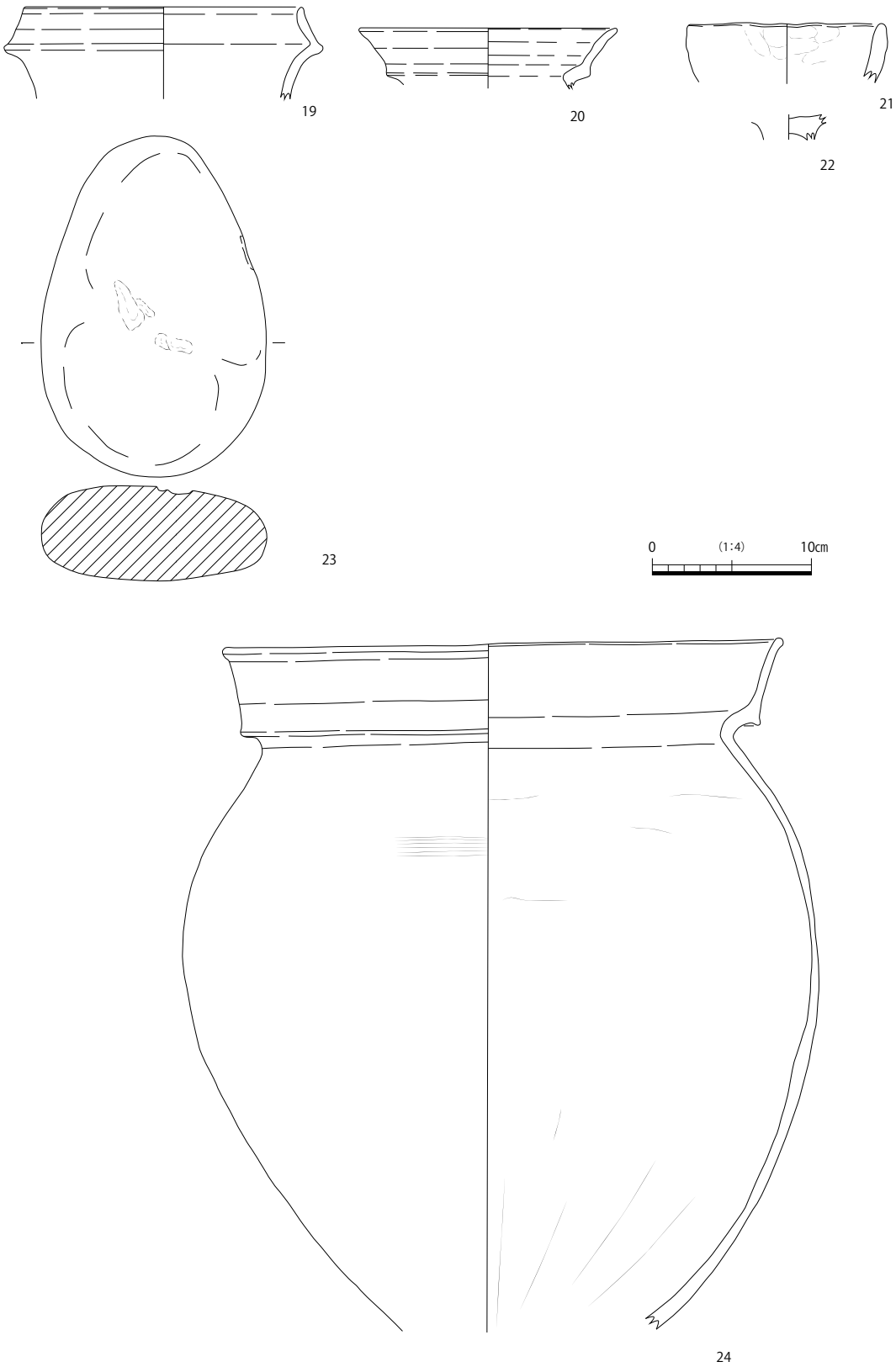
5 ～ 17 は埋土から出土した。5、6 は摩滅しており本来は口縁部全面に直線文があったと考えられる。7、8 は鉢である。7 は口縁部外面に列点文、胴部に上から「ハ」字状の列点文、直線文、口縁部と同じような列点文がある。8 は球形の胴部から口縁部が短く立ち上がる。口縁部内面には蓋用の孔が向かい合わせに 2 つ 1 対で開いている。内外の調整や口縁部の文様の有無は摩滅により不明である。9 ～ 17 は土師器である。9 は壺である。口縁部が一周する。厚手で、口縁端部は外反する。口縁部下の稜はつまみ出す。10 ～ 13 は口縁端部が丸く、口縁部下の稜の突出は鈍い。



第 58 図　松林寺遺跡甕分類図



第 59 図　松林寺遺跡段状遺構 1 遺物実測図



第 60 図　松林寺遺跡段状遺構 2、土器埋設遺構遺物実測図

14、15 は鼓形器台である。14 に比べて 15 は台部径が細い。16 は古墳時代中期以降の高坏である。坏部の底の粘土が丸く突出する。

18 は床面から出土した石器である。縦長の円礫で、打痕があることから敲石と考えられる。

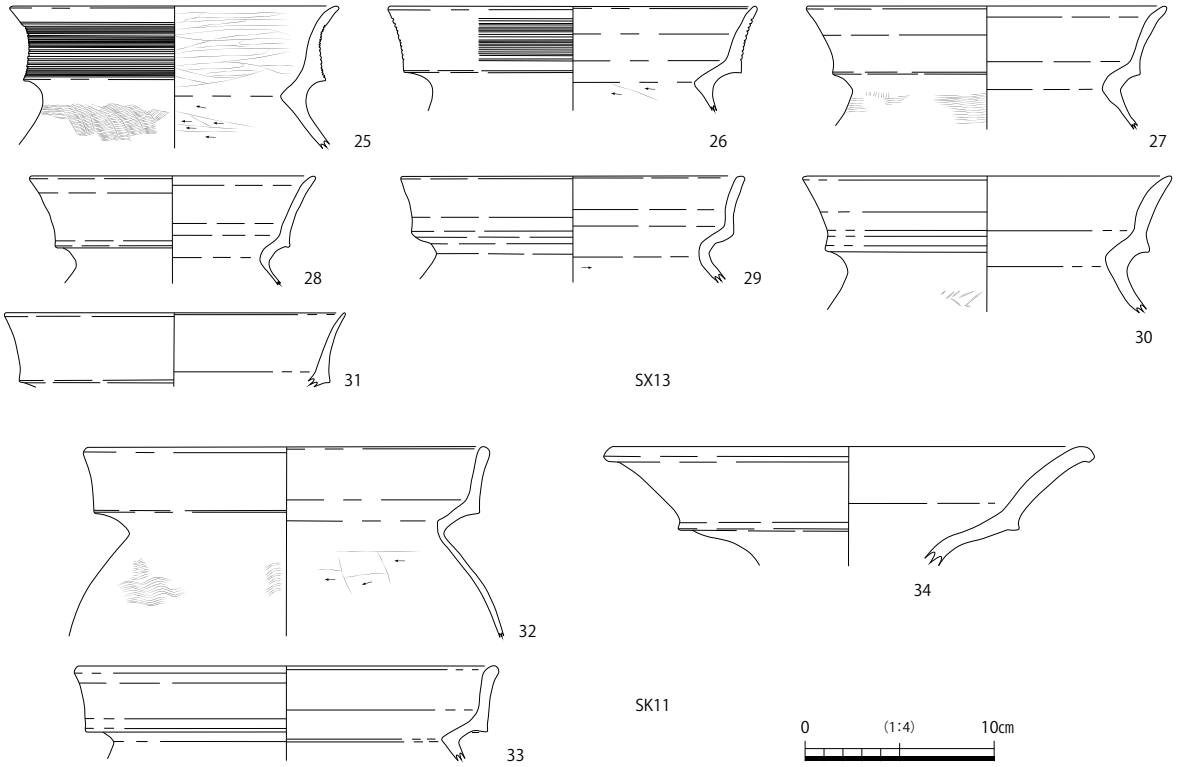
1 ～ 3 は草田 3 期、4 は草田 5 ～ 6 期、5、6 は草田 3 期、7、8 は草田 2 期までさかのぼる可能性がある。10 ～ 13、15 は草田 4 ～ 5 期、14、17 は草田 5 期、16 は小谷 4 式以降と考えられる。

段状遺構 2（第 60 図 19 ～ 23）　土器は床面から胴部片がわずかに出土し、埋土からは土師器が多く出土した。図示した土器はすべて土師器である。19 は口縁部が内傾する。20 の口縁部の稜は鈍い。21 は厚手の鉢に復元した。23 は貼床から出土した。使用痕があり、大きさから台石と考えられる。

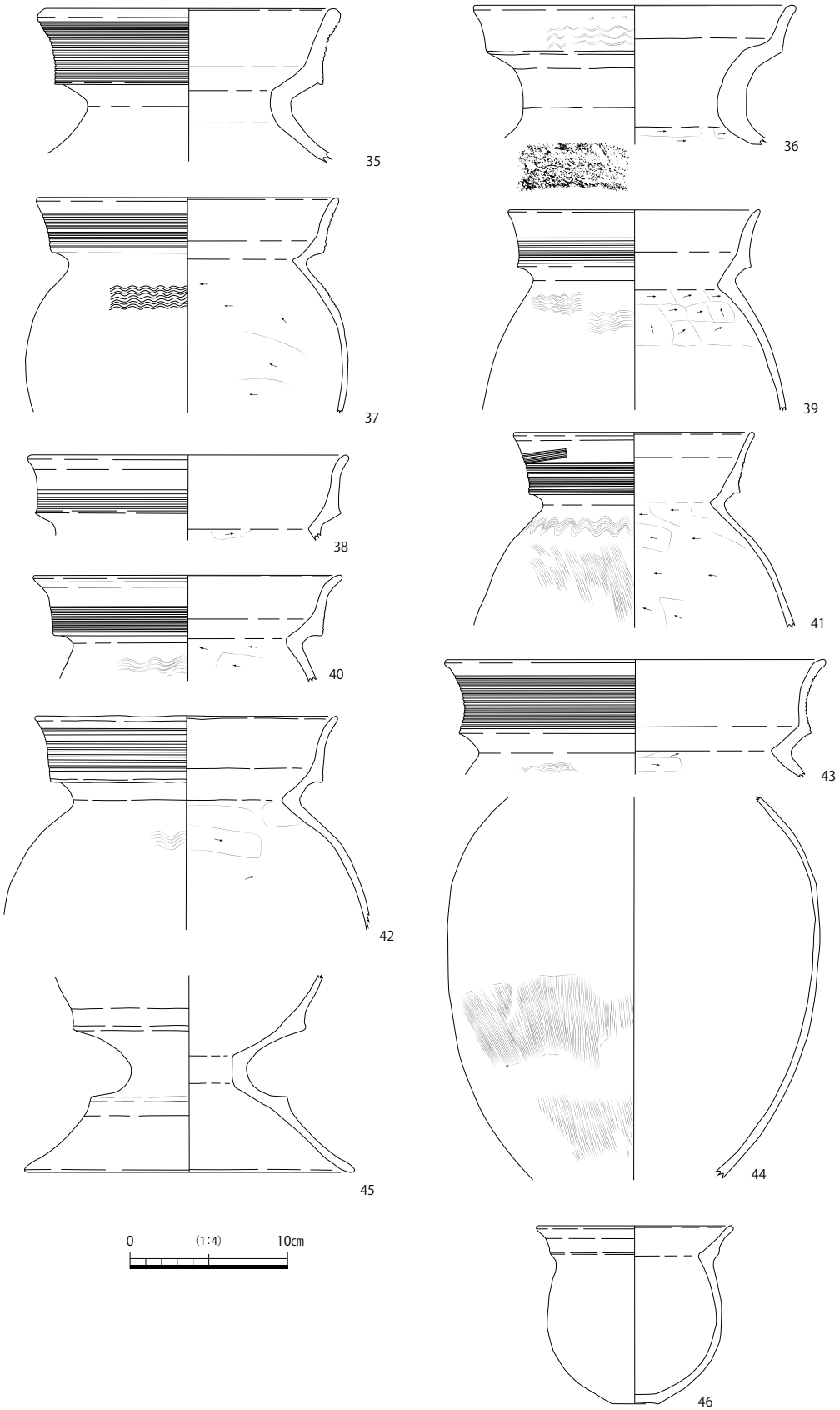
19 は草田 5 ～ 6 期、20 は草田 5 期と考えられる。

土器埋設遺構（第 60 図 24）　大型の土師器の甕である。ほぼ完形であるが、底部を欠く。摩滅しているが、肩部のヨコハケが確認できる。口縁部の稜は下方へ突出する。胴部に煤が薄く付着していることから、日用品を使用したと考えられる。口縁端部が肥厚しないことから、草田 5 期と考えられる。

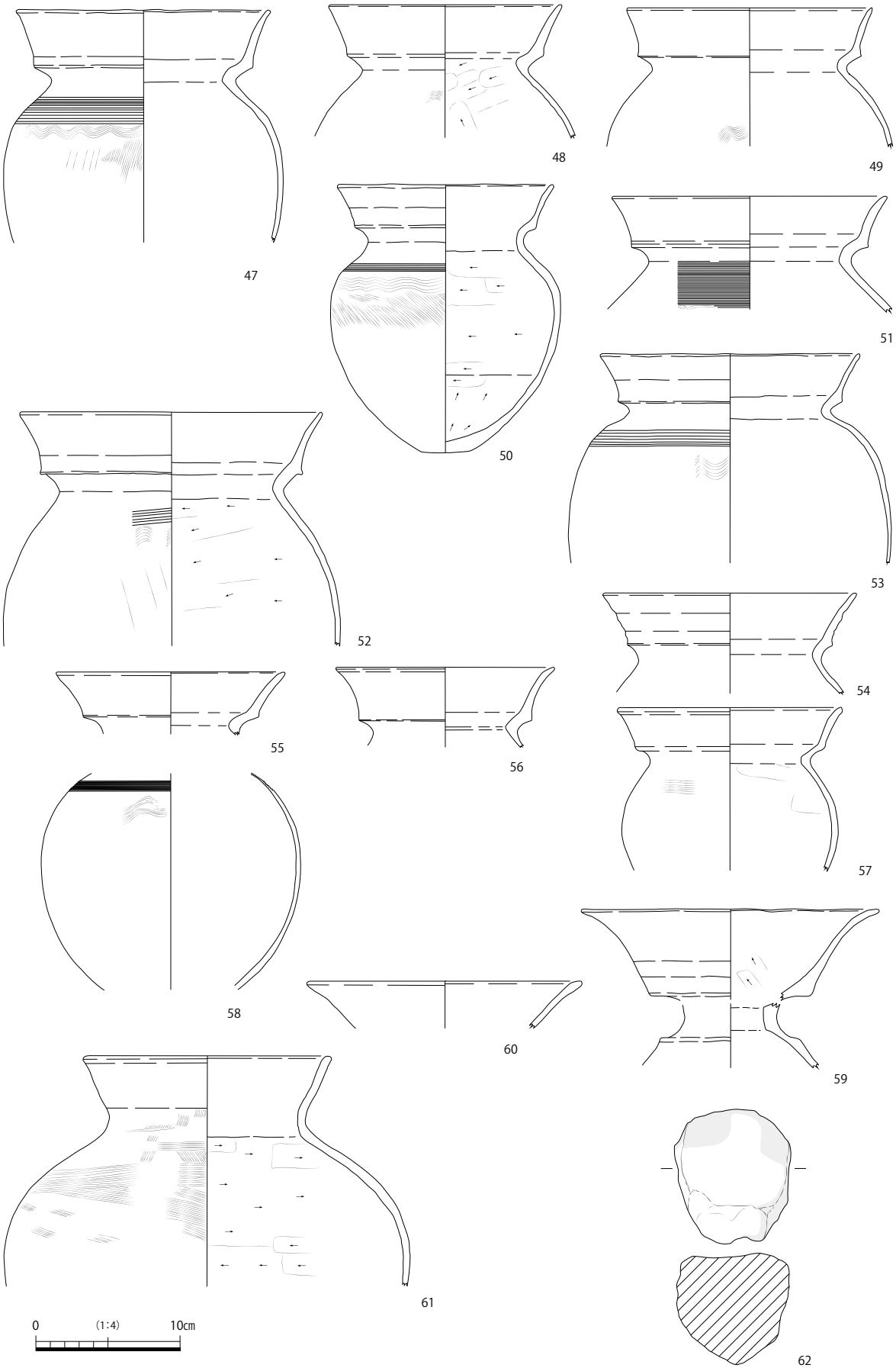
段状遺構 3（第 61 図 25 ～ 31）　25、26 は弥生土器である。25 は口縁部が大きく外反する。口縁部下の稜は鋭く突出する。肩部には貝殻文を押し引き風に施す。26 は口縁部が摩滅しているが、10 条の直線文が確認できる。27 ～ 31 は土師器である。27、28 は口縁端部がやや尖り気味で、口縁部下の稜が鋭い。29 は口縁端部が丸く、稜がやや鈍くなっており、やや時期が下ると考えられる。30 は口縁部が厚くなっていることから、さらに時期が下ると考えられる。



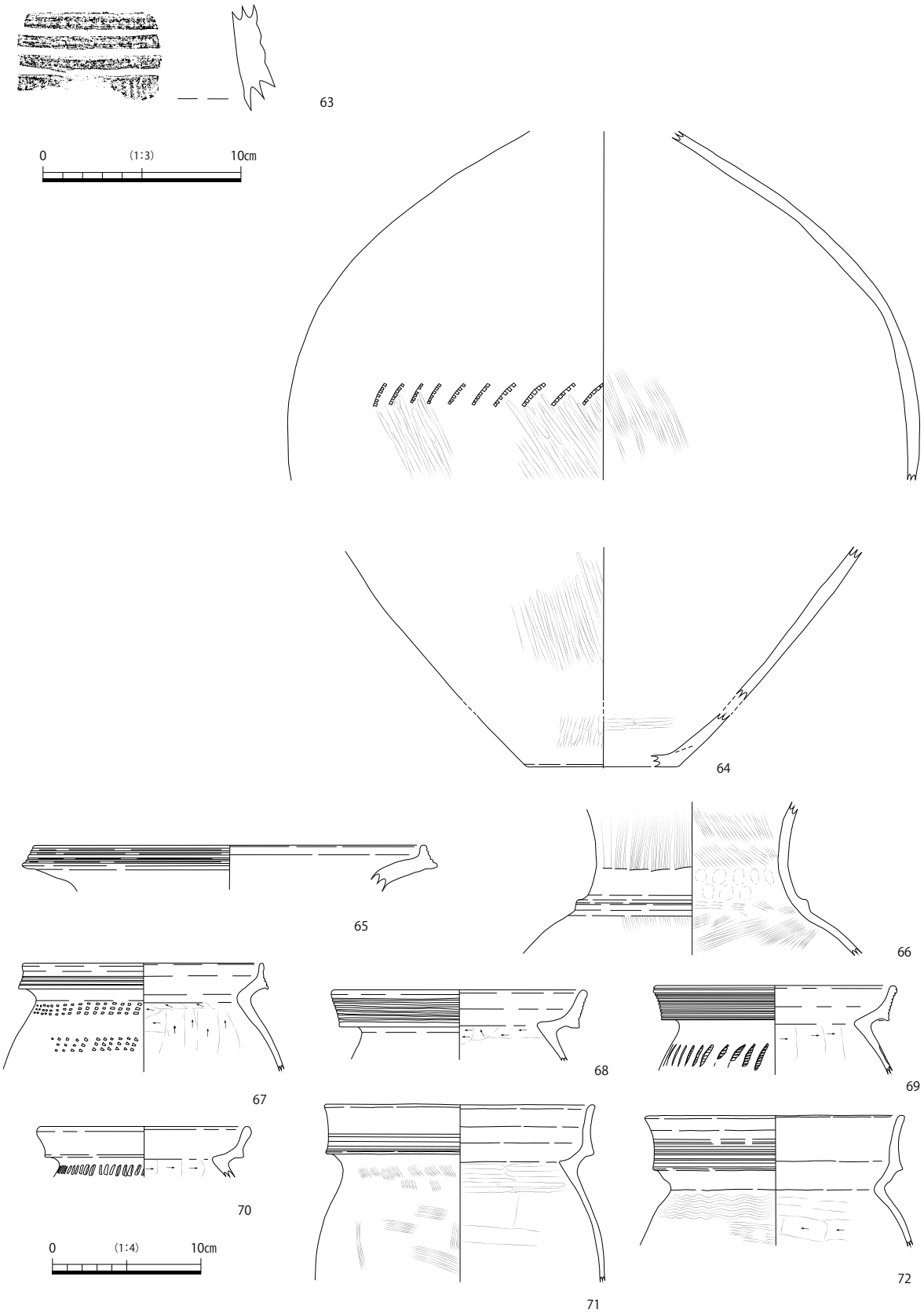
第 61 図　松林寺遺跡段状遺構 3、土坑土器実測図



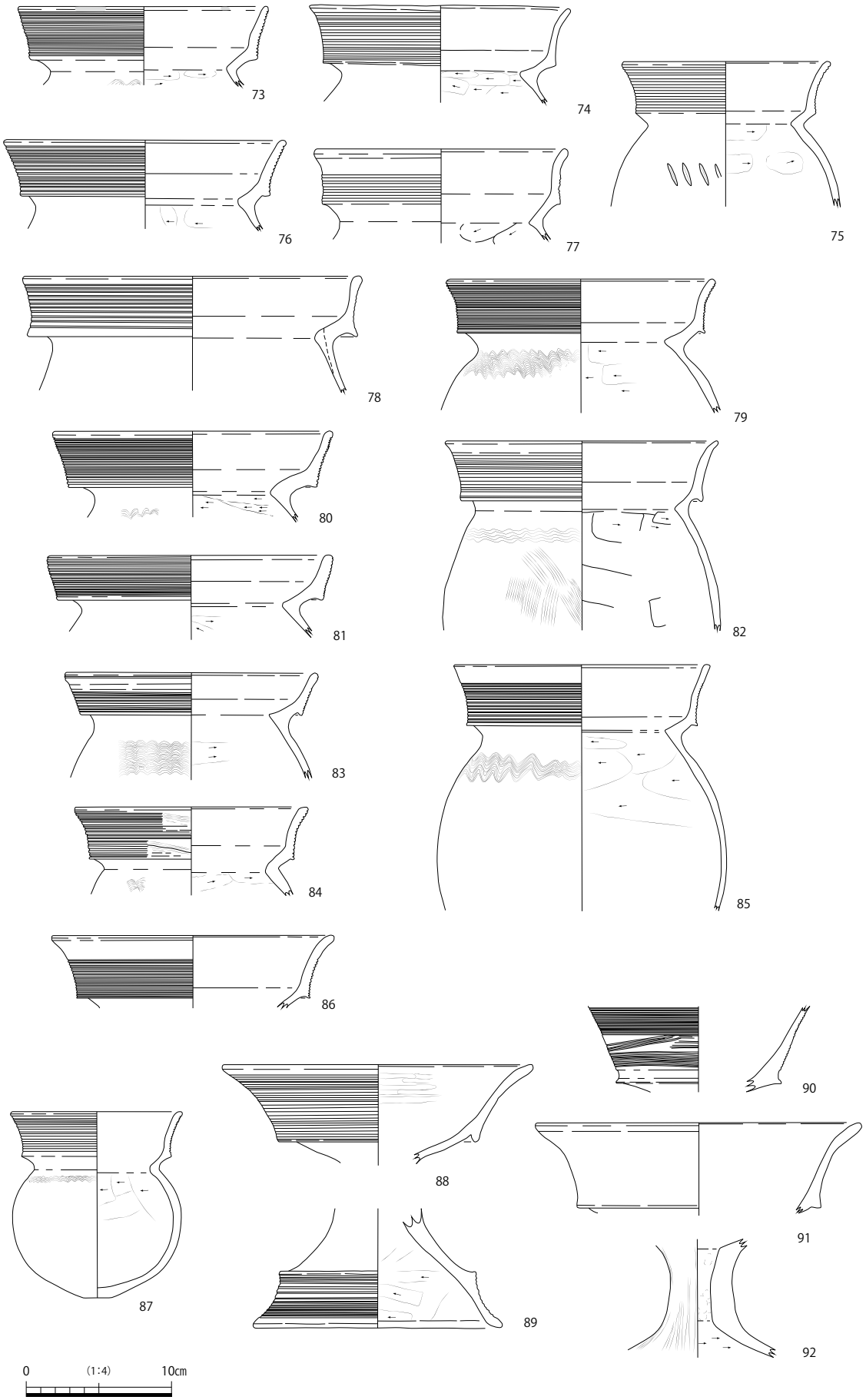
第 62 図　松林寺遺跡土器溜まり遺物実測図 1



第 63 図　松林寺遺跡土器溜まり遺物実測図 2



第 64 図　松林寺遺跡谷状地形遺物実測図 1



第 65 図　松林寺遺跡谷状地形遺物実測図 2

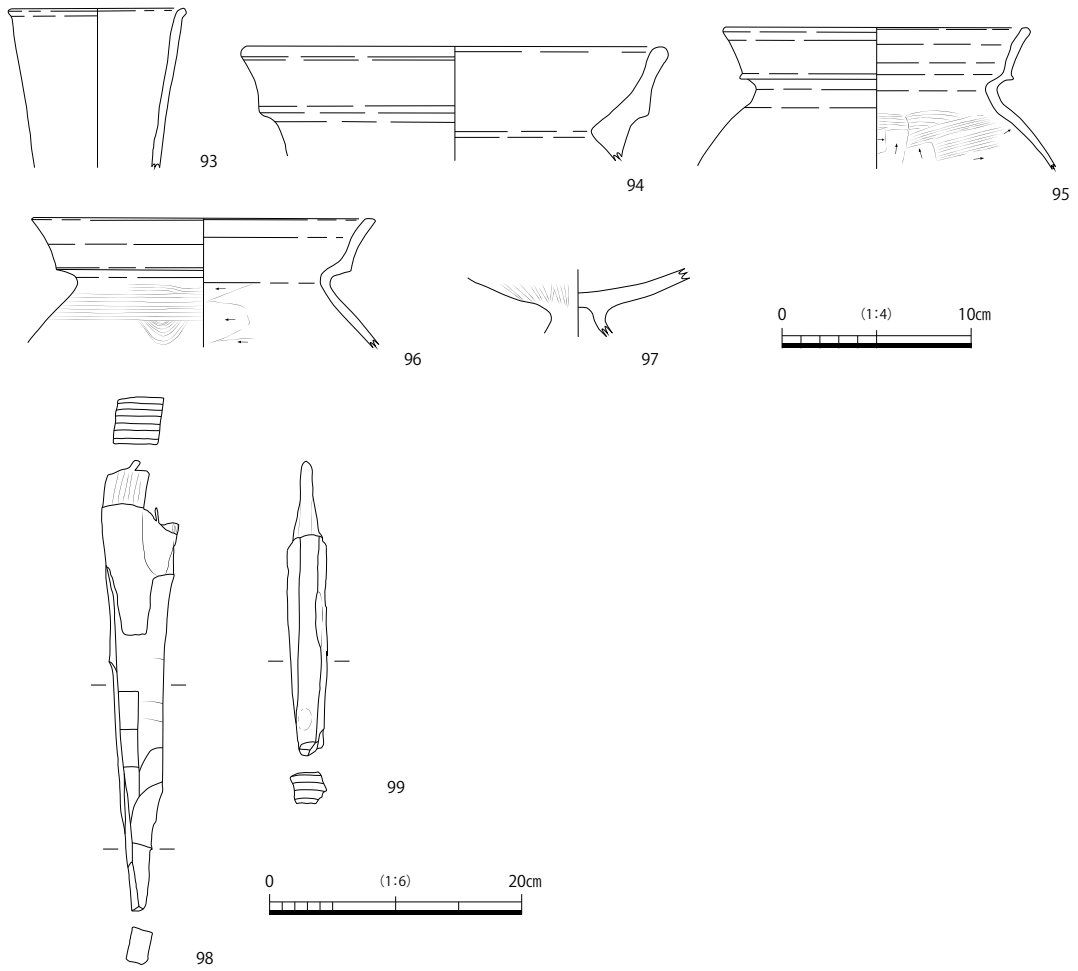
25、26 は草田 3 期、27、28 は草田 5 期、29、30 は小谷 3 式以降と考えられる。

土坑（第 61 図 32 ～ 34）　32、33 は弥生土器である。摩滅しているが口縁部外面に直線文があった可能性がある。口縁部はあまり外反しない。34 は土師器の壺である。口縁部が大きく外反し、端部は下方へ垂れる。

32、33 は草田 3 ～ 4 期、34 は小谷 3 ～ 4 式と考えられる。

土器溜まり（第 62 図 35 ～第 63 図 62）　35 ～ 46 は弥生土器である。35 の口縁部の貝殻直線文は、直線文 1 本の幅が広く、断面は U 字である。36 は頸部が厚い。口縁部は摩滅しているが、二段程度の波状文がある。外来系土器と考えられる。37 ～ 41 は口縁部下の稜の突出がやや弱い。38 の口縁部の上半分は摩滅のためナデ消しの有無は不明である。39 ～ 41 は直線文の後にナデ消しをする。39 の直線文 1 本の幅は狭く、断面は U 字である。40 の口縁部上半はナデにより強く屈曲する。41 の直線文 1 本の幅は狭いことから、原体は貝殻でないと考えられる。胴部は被熱により変質する。口縁部が薄いが、胎土の特徴から弥生土器とした。42、43 は口縁部が強く屈曲して長く、口縁部下の稜が突出する。42 の貝殻直線文の断面は逆台形で、線同士の幅は広い。43 も線同士の幅は広いが、直線文は狭く細い。44 は胴部で、摩滅しているが内面はヘラケズリと考えられる。45 は摩滅しているが、胎土から弥生土器と判断した。46 は複合口縁の鉢で、稜は鈍い。これらの土器は、35、37、38、42、43 は草田 3 期、39 ～ 41、45 は草田 3 ～ 4 期と考えられる。

47 ～ 61 は土師器である。47 ～ 49 の口縁部下の稜は鈍く、口縁部の先端が尖り気味である。



第 66 図　松林寺遺跡谷状地形遺物実測図 3

50 はやや小型ではあるが全形がわかる。底部内面に指頭圧痕は見られない。口縁部外面にはヨコナデによる凹みがある。稜の突出は鈍い。胴部下半はやや厚くなる。胴部最大径付近と口縁部に煤が付着する。52 の口縁部下の稜は下方へつまみ出す。53 はやや肩の張った器形である。54 は口縁部にヨコナデによる凹みがある。56 は口縁部が大きく外反する。57 は小型の甕である。口縁部がやや厚く、端部は丸く外へ屈曲する。口縁部下の稜は段状である。58 は球形の胴部である。59、60 は鼓形器台である。59 は図上で復元した。61 は肩が張り、口縁部は直線的で厚い。胴部のヨコハケの単位は細い。47 ～ 49 は草田 4 期の可能性がある。50、51 は草田 4 ～ 5 期、52 ～ 56 は草田 5 期、57 は草田 6 期、61 は小谷 3 ～ 4 式と考えられる。

62 は角礫で、被熱痕のある石である。

谷状地形（第 64 図 63 ～第 66 図 99）　63 ～ 92 は弥生土器である。63 は壺の頸部で、3 条の凹線文がある。器壁が厚く、大型の壺になる。64 は比較的広い範囲から出土した。胴部上半と底部付近の破片を同一個体と判断した。胴部最大径付近に列点文があり、外面はヘラミガキである。63、64 は弥生時代中期にさかのぼる土器である。65 は頸部から強く屈曲し、口縁端部は内側上方へ立ち上がる。後期前半の壺と考えられる。66 は頸部から胴部上半の個体である。頸部と胴部の境に突帯がある。突帯の稜は鋭い。内外のハケは粗く、山陰の弥生土器のハケとは大きく異なる。ヘラケズリが確認できないことも特徴の一つである。北部九州の下大隈式と考えられる。67 ～ 86 は甕である。その内 67 ～ 70 は口縁部が相対的に短いものである。67 は口縁部が内傾して立ち上がる。肩部に二列の列点文がある。68 の口縁部の貝殻直線文は若干上下する。70 は小型の甕で、口縁部は厚くヨコナデである。71、72 は口縁部が直立する。口縁部外面は直線文を一部ナデ消す。口縁部下の稜は水平に突出する。71 は頸部内面の稜が鋭く突出し、ヨコヘラミガキ調整である。73 ～ 77 は口縁部が相対的に長く、口縁部下の稜の突出が弱いものである。73 の直線文は線の断面が逆台形で幅が細く、線同士の幅も狭いが、74、75 は線同士の幅は広い。77 は摩滅により、口縁部外面の文様は不鮮明である。78 ～ 86 は口縁部下の稜が強く突出するものである。79、80 の口縁部には貝殻直線文がある。79 の原体は約 1㎝程度である。82 は口縁部に 17 条の直線文があり、やや多い。直線文の幅は狭く、断面は U 字である。83 ～ 86 は口縁部の直線文を一部ナデ消す。83 は口縁部の上方をナデ消す。84 は上から見て時計回りに施文している。

87 は鉢である。図上で復元した。口縁部の直線文は 17 条と多いが、肩部の波状文は 3 条である。

88 ～ 91 は鼓形器台である。88 は 90 に比べて受部が短いが、貝殻直線文は 28 条と多い。89 は金気が付着して文様が不鮮明であるが、88 よりも直線文の幅が広く、台部が短い。90 の直線文は何度も文様をつけており、上下している。91 は受部の長さは 88 とあまり変わらないが、摩滅により文様の有無が不明である。92 は筒部が厚いことから古い特徴を指摘できる。90 と 92 は赤彩の痕がある。

67 は草田 2 期よりさかのぼる可能性がある。68 ～ 70、89、92 は草田 2 期、73 ～ 82、87、88、90、91 は草田 3 期、71、72、83 ～ 86 はナデ消しがあることから草田 3 期後半と考えられる。

93 ～ 97 は土師器である。93 は長頸の壺である。胎土から土師器と判断した。外側へ開き気味の口縁部であり、口縁端部はわずかに外方へ折れる。94 は口縁部が厚く、頸部内面に稜が残っていることから弥生土器の特徴を強く残すが、胎土から土師器と判断した。95 は口縁端部が丸く、口縁部下の稜はつまみだすように突出する。肩部内面にはハケ状の工具の痕がある。96 は口縁部

が厚く、口縁部下の稜は突出しない。口縁端部に面がある。95 に比べて後出する。97 は低脚坏である。口縁を欠くが、口縁が大きく開くものである。

94 は草田 4 期、95 は草田 6 期、96 は小谷 3 式、97 は草田 5 ～ 6 期と考えられる。

98、99 は木製品である。98 は杭である。先端のみ残存していた。分割材で、方形に加工し、四方向から平坦に加工する。なお、他の杭は残りが悪く、取り上げた際に細片になってしまった。99 は谷状地形から出土した施設材・器具材である。一端は劣化している。五方向から加工する。98、99 ともに肉眼観察で針葉樹と判断した。

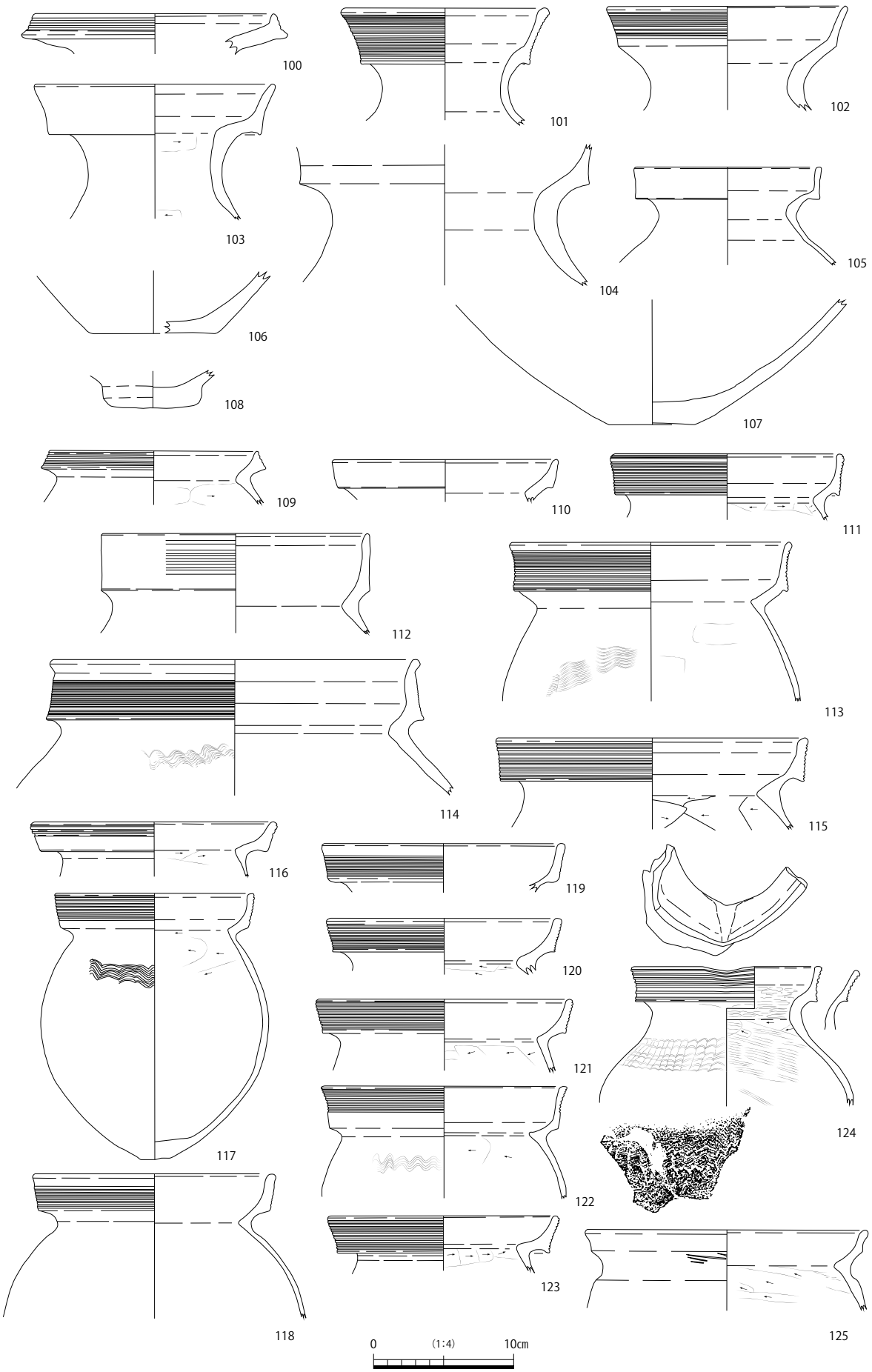
遺構に伴わない遺物（第 67 図 100 ～第 78 図 299）　ここでは遺構には伴わない遺物のうち、弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を最初に挙げる。

100 ～ 193 は弥生土器である。100 ～ 108 は壺である。100 は口縁端部が内側上方へ立ち上がる。第 64 図 65 に似る。101、102 は口縁部に直線文がある。103、104 は摩滅しているが、本来は直線文があったと考えられる。105 は口縁部が直立する。体部が薄く、胎土も細かく土師器に似る。106、107 は底部である。106 は胎土が細かい。108 は底部が突出する。

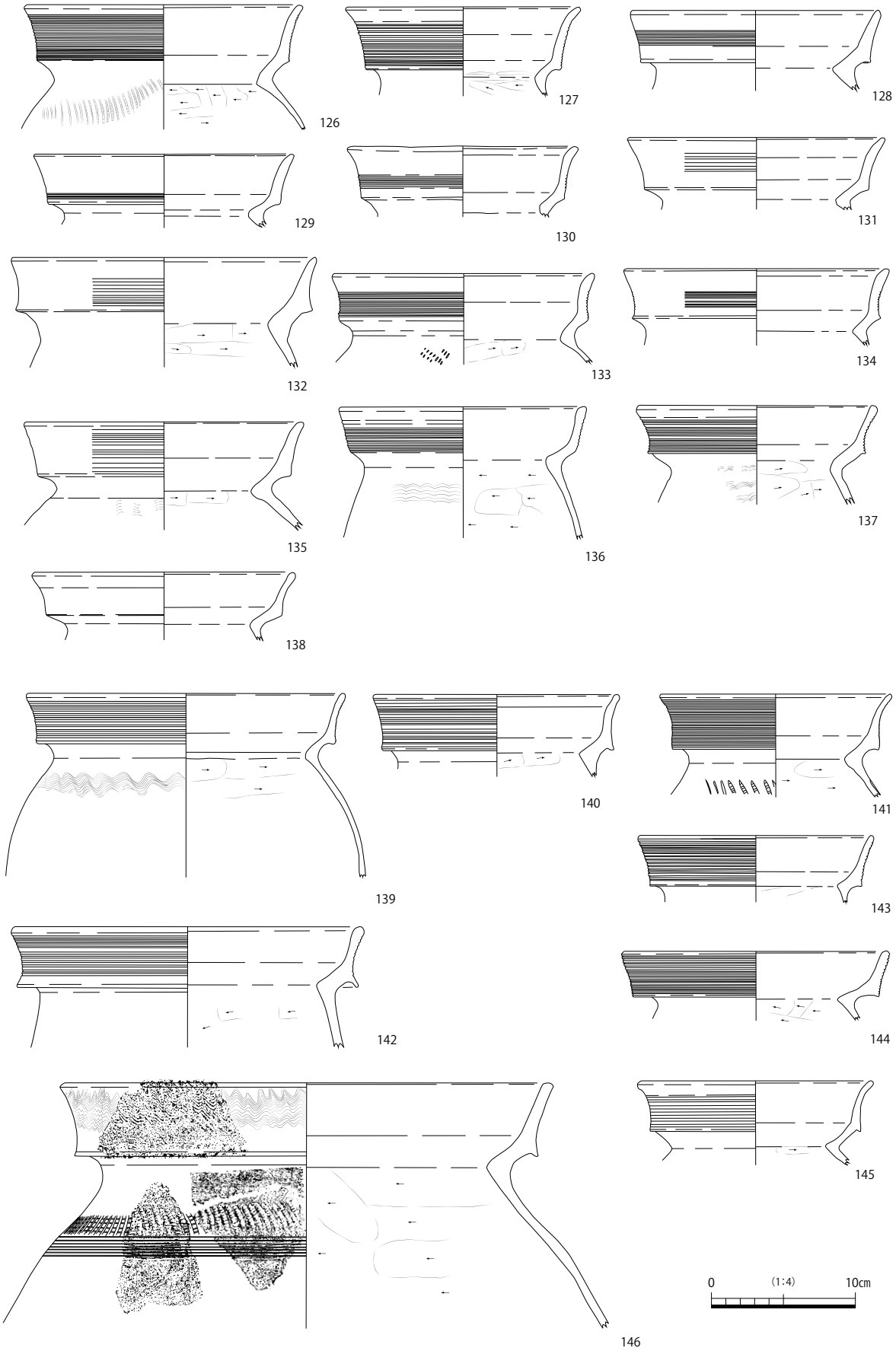
100 は後期前半、101 ～ 104 は草田 3 期、105 は草田 3 期後半と考えられる。

109 ～ 166 は甕である。109 は口縁部が内傾する。頸部内面に稜がある。110 ～ 115 は口縁が直立する。112 は摩滅しており、現状で 12 条の直線文が確認できる。口縁端部が肥厚する。113 は口縁部が下方にも伸びる。114 は同一個体が散らばって出土した（第 52 図）。口縁端部が外側へ折れるように屈曲する。115 の貝殻直線文は 1㎝あたり 3 条である。

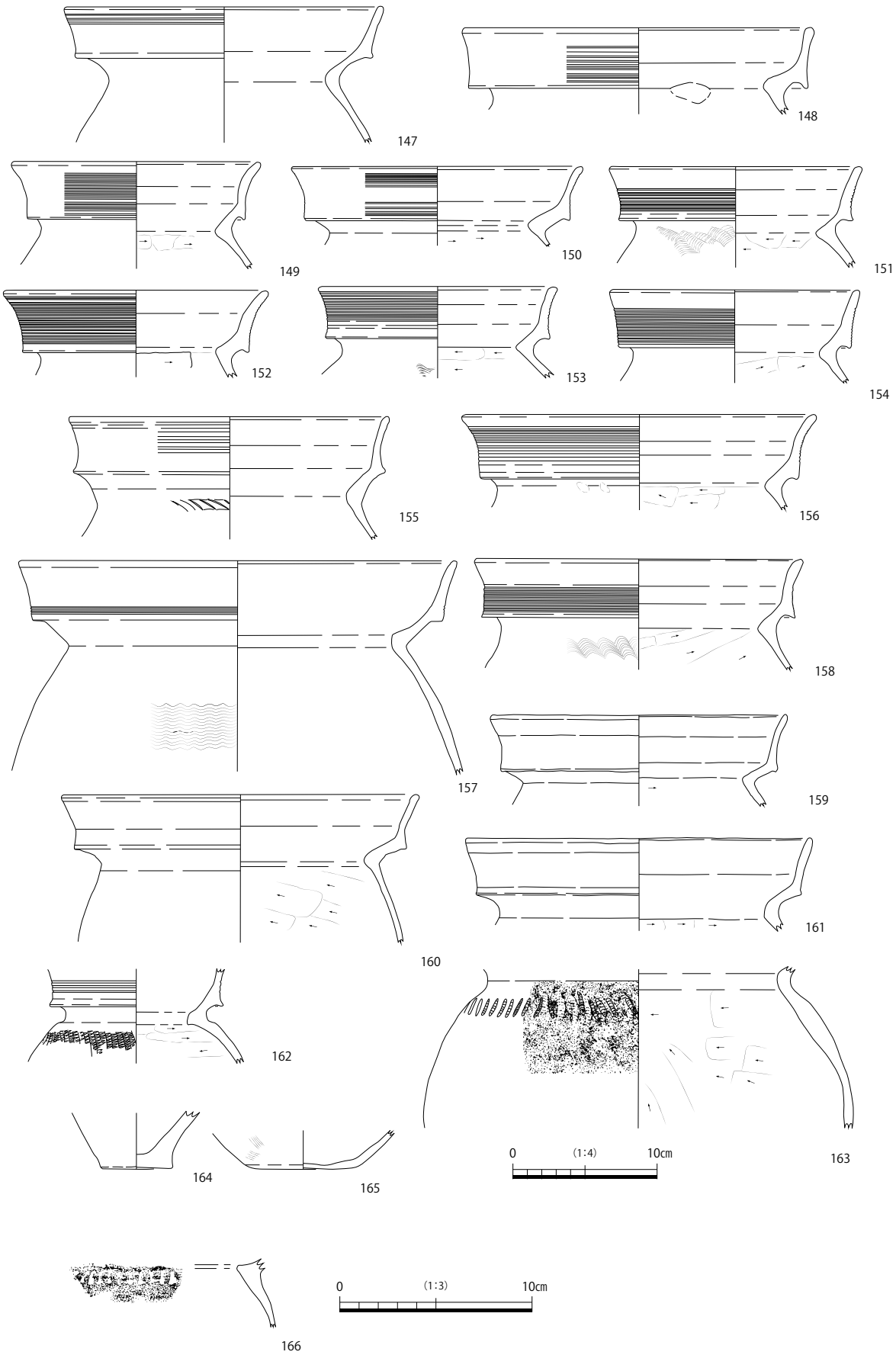
116 ～ 122 は口縁部下の稜の突出が弱いものである。116 は摩滅により口縁部下半分は不明で、3 条の凹線文が残る。117 は図上で完形に復元した。胴部は球状で、不安定な平底である。120、121 は直線文の一部をナデ消す。122 は摩滅により口縁部下半分は不明で、ナデ消しの有無は不明である。124 は口縁部の一部を曲げて注口状にしている。上から見て方形を意識しているのかもしれない。頸部内面はヘラミガキ、胴部内面をヘラケズリではなく貝殻により調整しており、ハケメのように見える。125 は口縁部が短く、外面はナデである。肩部に稜がある。126 ～ 138 は口縁部が相対的に長く、口縁部下の稜の突出が弱いものである。126 の肩部の貝殻列点文は、列点文の位置が乱れている。127 の口縁端部はつまんで折り曲げるように外反する。頸部内面はヨコヘラミガキがある。128 ～ 135 は口縁部が摩滅しており、直線文が一部しか残っていない。137 の頸部には肩部の波状文の工具が当たった痕がある。138 は摩滅のため文様の有無は不明である。139 ～ 162 は口縁部下の稜が強く突出するものである。139 ～ 141 は直線文の条数が多い。139 の直線文は 1㎝あたり 7 条と狭く、線の幅と線同士の間隔は同じ程度である。141 も直線文の幅が狭い。142 は肩部の張らない器形で、口縁端部が肥厚する。143、144 は貝殻直線文で、1㎝あたり 5 条程度である。145 は口縁端部が強く屈曲する。146 は大型の甕である。口縁部の上半に貝殻波状文があり、肩部には貝殻列点文の下に貝殻直線文がある。147 ～ 150、155、157 は口縁部が摩滅しており、直線文が一部しか残っていない。151 は頸部に近いところに二列の波状文がある。152 の直線文は細いがはっきりしており、原体は貝殻でないと考えられる。154 の口縁部内面は薄く煤がついたように変色している。155 は口縁端部のすぐ下が凹線上に凹む。157 はやや大型の甕で、頸部が強く屈曲する。158 は直線文の後、口縁部の中程をナデ消すようにヨコナデがある。肩部の波状文は強く施されたようで、痕がはっきり残っている。159 ～ 161



第 67 図　松林寺遺跡弥生土器実測図 1



第 68 図　松林寺遺跡弥生土器実測図 2



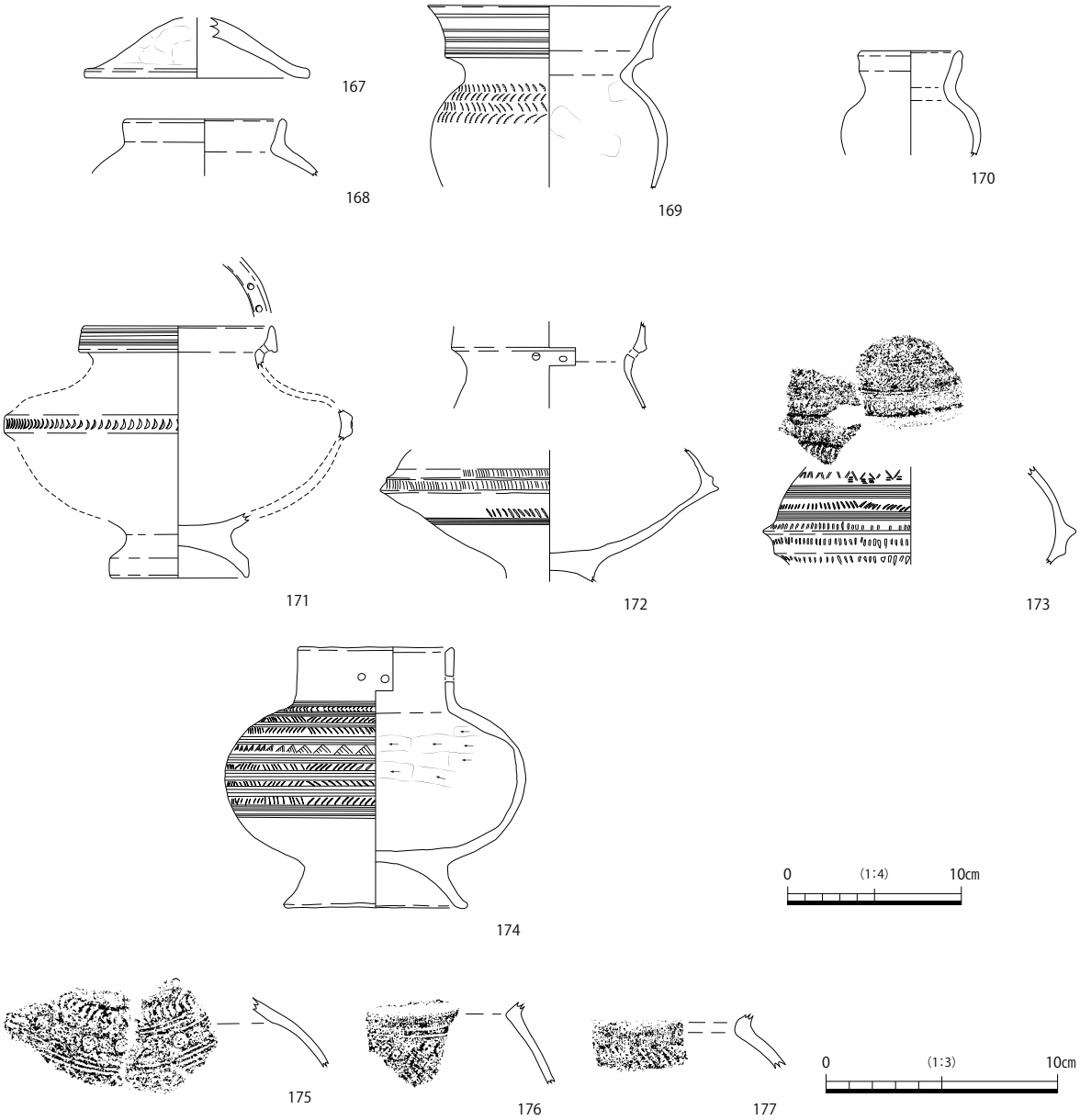
第 69 図　松林寺遺跡弥生土器実測図 3

は口縁部外面が無文である。159、160 は摩滅しており文様は確認できなかった。161 は胎土が砂質で、弥生土器に多い灰白色ではなく土師器に多い黄橙色であり、土師器に近い特徴がある。

162 は口縁部上半を欠く小型の甕である。口縁部下の稜は強く突出する。163 は甕の胴部上半である。厚手で肩部に貝殻列点文がある。164 は平底で、被熱の痕がある。165 は突出気味の平底である。指頭圧痕は確認できなかった。166 は頸部に列点文があり、内面の稜ははっきりしている。

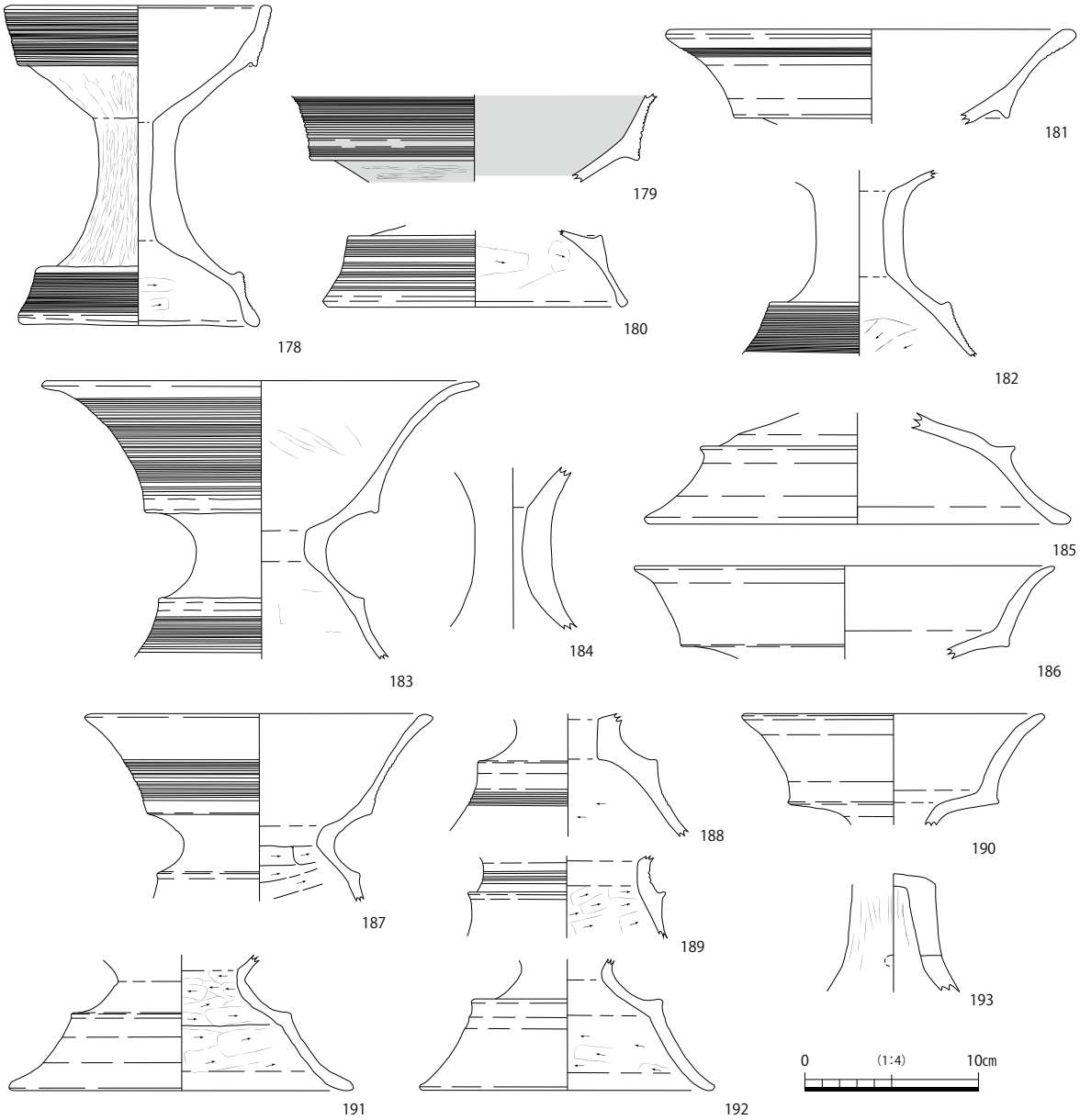
109、110、116 は 草 田 1 期、117 ～ 125 は 草 田 2 期、111 ～ 115、126 ～ 145、147 ～ 157 は草田 3 期、146、158 ～ 162 は草田 3 期後半、166 は後期前半代である。

167 は蓋である。煤が付着していないこと、外面の調整がヘラミガキであることから、壺や鉢の蓋と考えられる。168 は短頸の鉢、169 の肩部には貝殻により二列の羽状文がある。摩滅しており、口縁部の直線文の原体が羽状文と同じかどうかは判断できなかった。口縁部下の稜の突出は

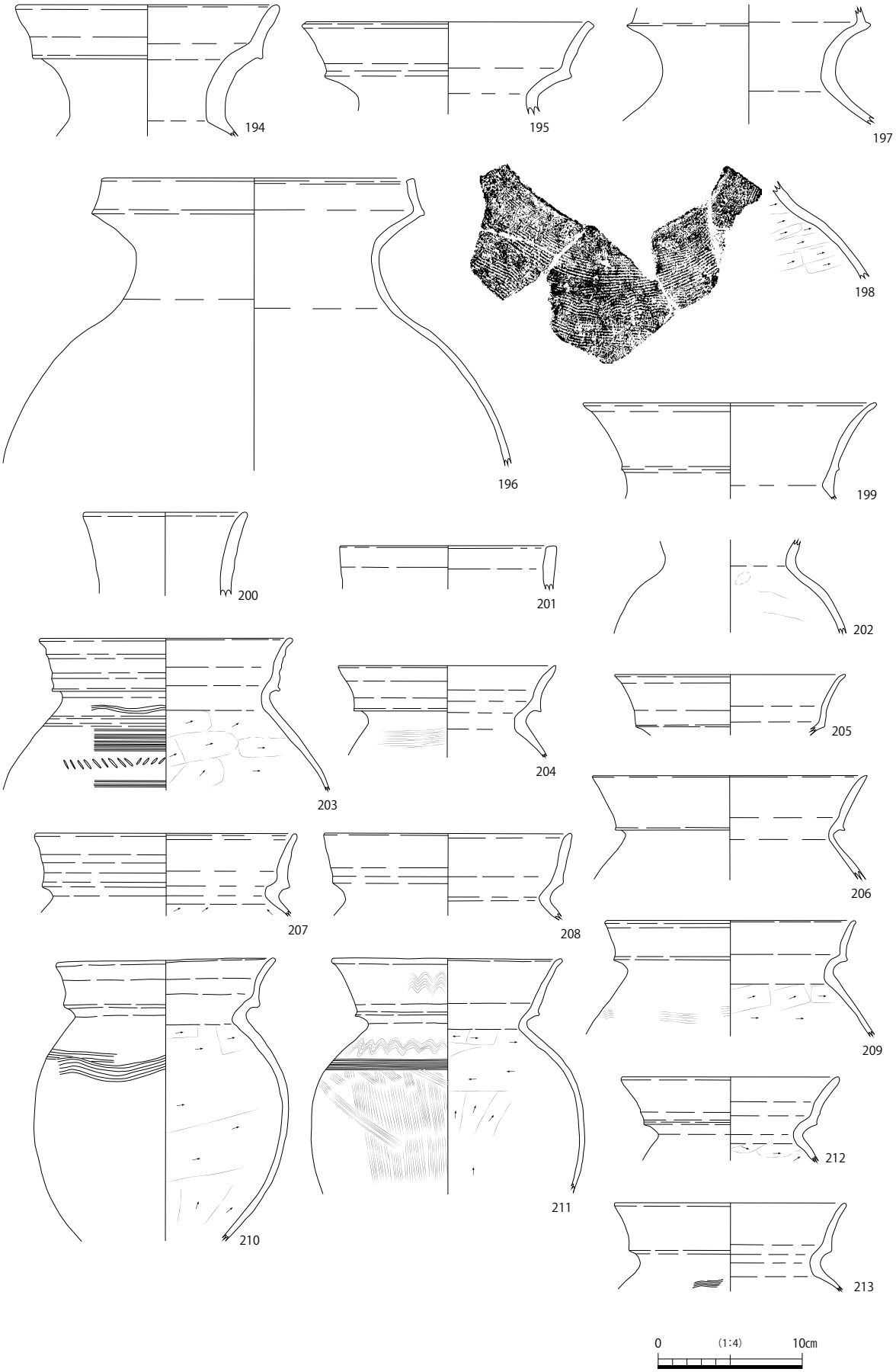


第 70 図　松林寺遺跡弥生土器実測図 4

弱い。胴部最大径より下に薄く煤が付着している。170 は小型の鉢である。171 ～ 175 は台付装飾壺である。171 は出土時に胴部から下が残っていたが、取り上げ時に細片になってしまった。胴部の突帯の上には逆 C 字の刺突文がある。台部には直線文があったと考えられるが、摩滅している。172 は胴部下半が残っていた。摩滅のため、頸部はもっと屈曲する可能性がある。胴部の M 字状の突帯は、下のほうが突出する。突帯の上には爪状の刺突文があり、突帯の下にはそれより太い列点文と直線文がある。173 も摩滅が著しいが赤彩の跡が残る。胴部上半から下へ、鋸歯文、直線文、列点文、直線文があり、突帯の上にも列点文がある。突帯の上のほうが突出する。174 は口縁部が直立する。張り出した胴部外面の全面に綾杉文や向かい合わせの列点文、鋸歯文を施文する。胴部内面や台部外面には金気が厚く付着し、土圧により歪んでいる。175 は破片ではあるが、胴部上半から下へ列点文、直線文、同心円のスタンプ文、直線文、鋸歯文がある。176、177 は肩部に貝殻羽状文がある。



第 71 図　松林寺遺跡弥生土器実測図 5



第 72 図　松林寺遺跡土師器実測図 1

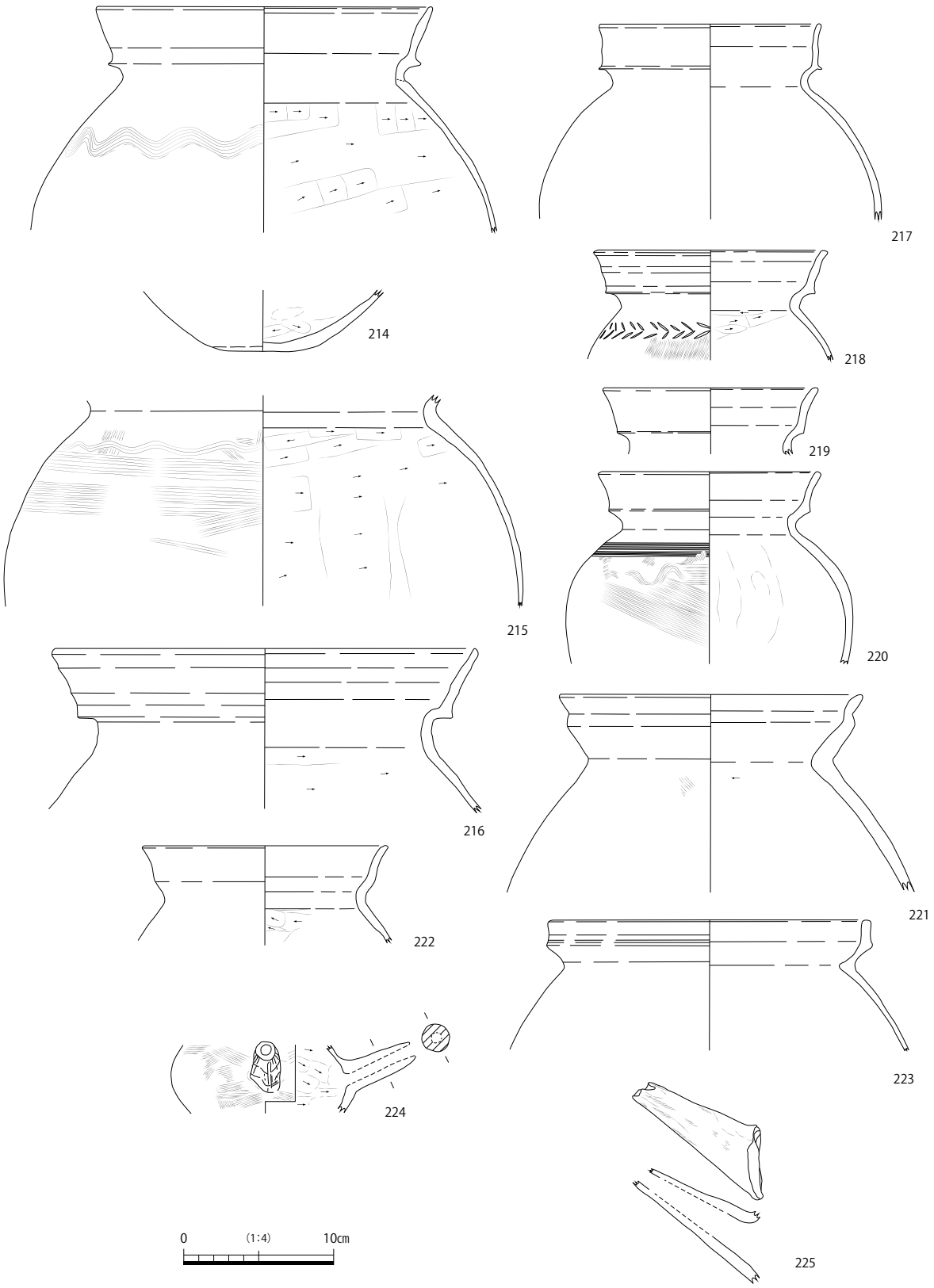
なお、松林寺遺跡の下方に位置する大国地頭所遺跡では２点の台付装飾壺が出土しており、松林寺遺跡と合わせて７点の台付装飾壺が出土していることになる。

178 ～ 192 は鼓形器台である。178 は筒部が長く細い。筒部の上位に稜があり、そこから直線的に受部へ至る。受部と台部の外面に櫛描直線文がある。179 には赤彩が残る。180 の台部から筒部へのびる部分は薄い。181 は摩滅により口縁部に近い部分しか直線文を確認できない。内面は黒く変色している部分がある。182 は筒部が細く長い。183 は受部が大きく開き、筒部は 178 や 182 に比べて太く短い。直線文の原体幅は約 1.2㎝ /7 条である。口縁端部と台部上の稜の部分のナデ調整をしているため、直線文が一部ナデ消される。184 は筒部である。内面に剥離痕を確認できなかったことから器台と判断した。185 は台部が大きく開き、台部上の稜が強く突出する。高坏形器台の可能性がある。186 は受部である。摩滅が著しい。187、188 は当初は台部全面に直線文があったと考えられる。187 は受部の一部が被熱により変色している。直線文は水平ではないようだ。189 は筒部に沈線があるようだ。191、192 は灰白色で胎土はきめ細かく、土師器に似る。192 は台部外面のヨコナデがよく残っている。193 は高坏である。円形の透かし孔が四方向にあると考えられる。頂部は粘土で充填されている。外面は丁寧なヘラミガキである。この他に高坏と考えられる破片はほとんど無い。

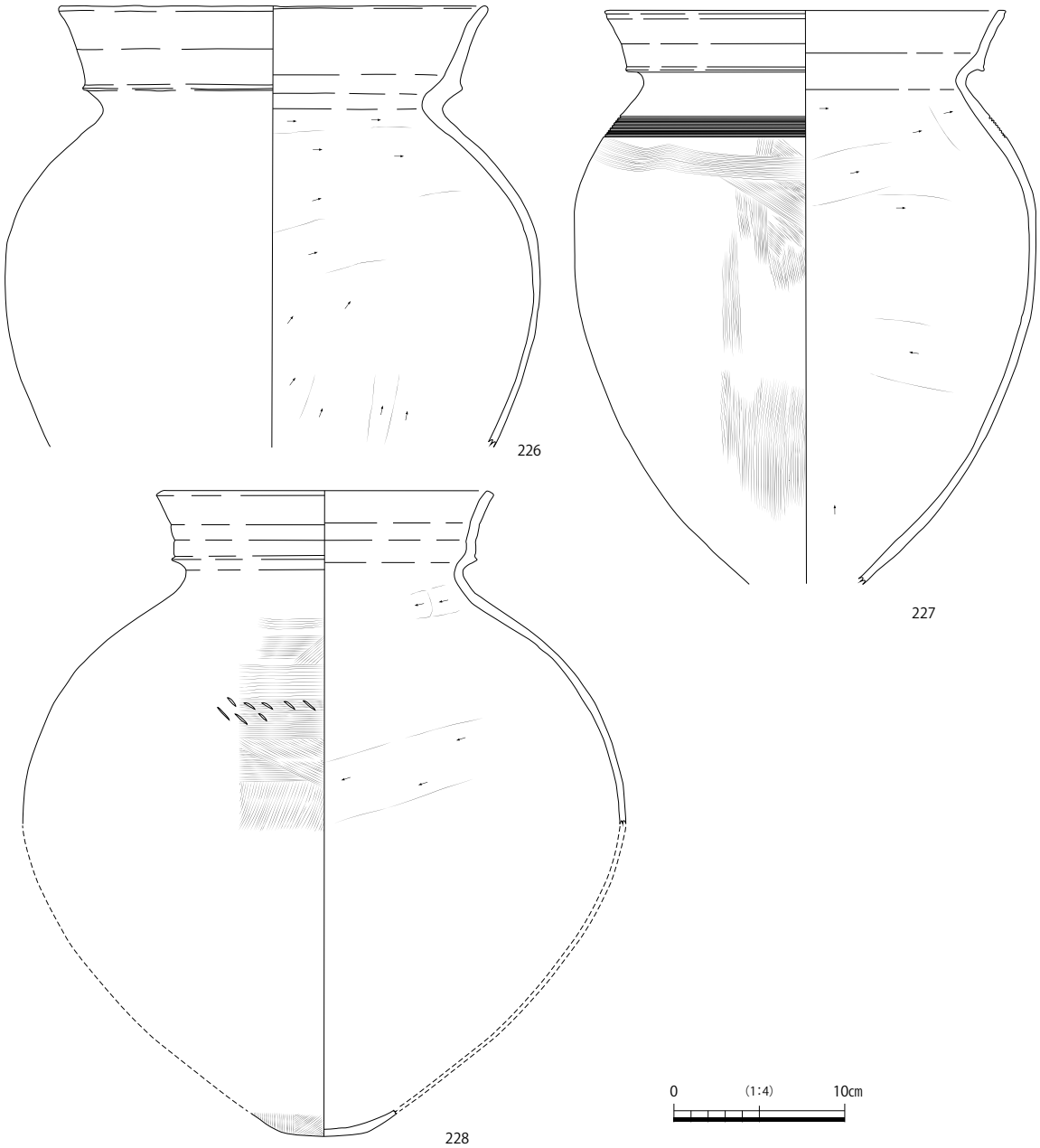
178 ～ 180 は草田２期、182、187、188 は草田３期、183、190 ～ 192 は草田３期後半、184、193 は後期前半代と考えられる。

194 ～ 242、244 ～ 261 は古墳時代前期の土師器である。194 ～ 202 は壺である。194 は口縁部や頸部が厚く、口縁部は中程で屈曲する。口縁端部は丸く、口縁部下の稜は鋭く突出する。195 は口縁部下の稜は鈍く、口縁端部は面を持つ。196 は図上で口縁部から胴部までつなげた。口縁部は内側へ傾き、肥厚する。197 は口縁部を欠くが、内側へ傾く。198 は肩部に直線文と波状文があるが、口縁部に近い側から施文している。頸部は強くヨコナデしている。199 は口縁部下の稜は低い。200 は口縁部が開く直口の壺と考えられる。厚手である。201 は短頸の壺の可能性がある。

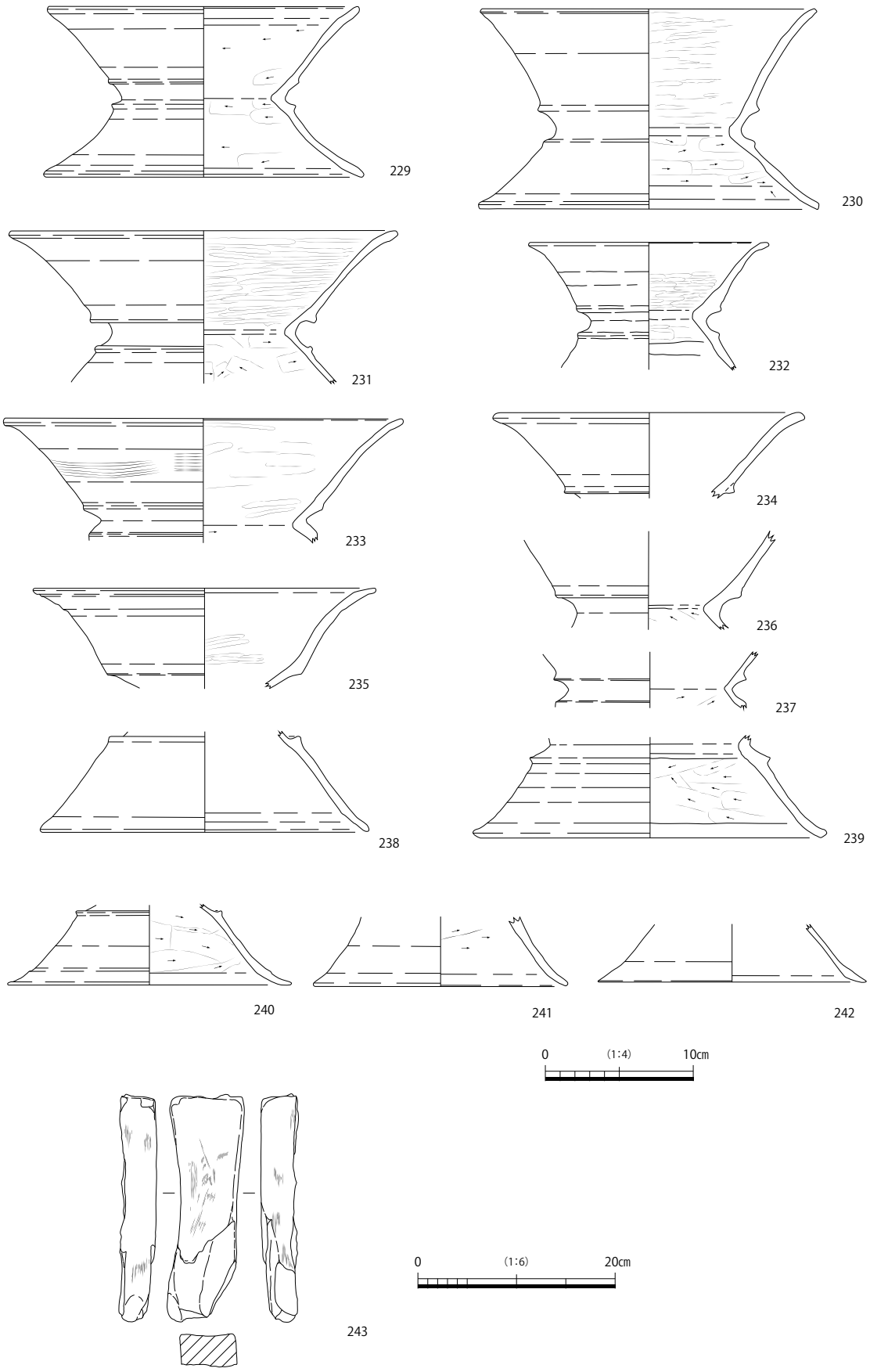
203 ～ 222 は甕である。口縁部の特徴に基づいて配列した。203 は口縁部外面のヨコナデが顕著で、ナデの単位を確認できる。口縁端部の下にもナデがあるので、口縁部が外側へ折れ曲がっているように見える。口縁部下の稜は突出するが、断面は丸い。頸部から肩部に文様があり、上から緩い波状文、直線文、向かい合わせの列点文、直線文がある。直線文や波状文の１本は幅が広い。204 の口縁端部は尖り、口縁部下の稜は鋭く突出する。205 は摩滅しているが口縁部は薄い。206 の口縁端部は尖り、口縁部下の稜は斜め下方向へ突出する。口縁部はやや長い。207、208 は口縁部が厚く、口縁部下の稜の突出は鈍い。ただ、208 は摩滅による可能性がある。209 は口縁部がやや短いが、口縁端部が丸い。210 は口縁部が外反し、胴部は卵形である。口縁端部が丸く、口縁部下の稜は斜め下方に鈍く突出する。肩部に直線文があるが、水平ではなく一部波状文風になる。上から見て時計回りに施文する。胴部最大径より下に薄く煤が付着する。211 は口縁部が直線的に外反し、胴部は球形に近い。口縁部下の稜の突出は鋭い。口縁部外面にピッチの狭い波状文があり、肩部には波状文と直線文がある。肩部から胴部最大径にかけて煤が付着する。212、213 は口縁部が大きく外反する。214 ～ 216 はやや大型の甕である。214 の口縁端部は丸く、口縁部下の稜は水平方向に鋭く突出する。底部は突出気味の平底である。胴部片もあるが、口縁部や



第 73 図　松林寺遺跡土師器実測図 2



第 74 図　松林寺遺跡土師器実測図 3



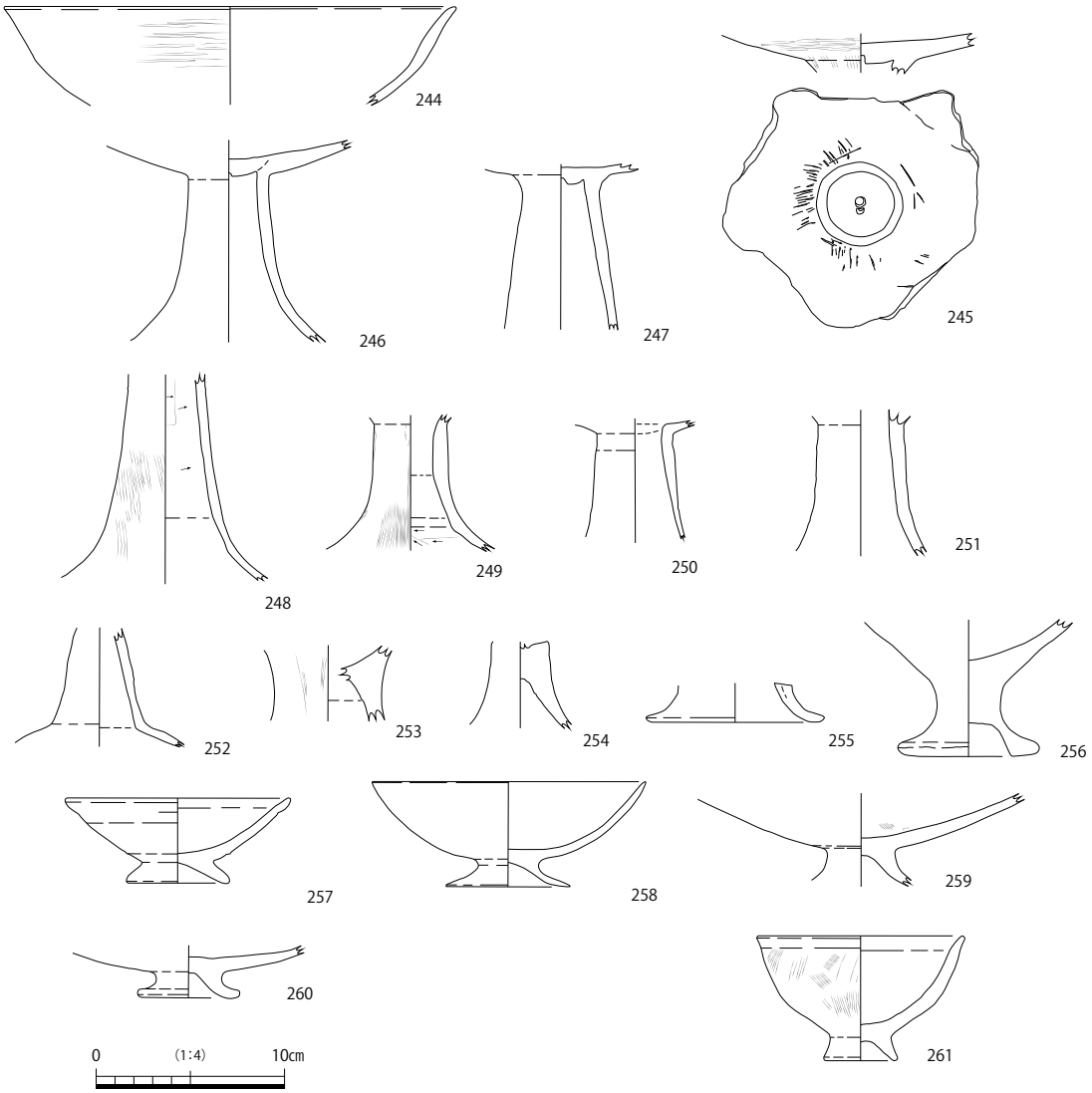
第 75 図　松林寺遺跡土師器実測図 4

底部との接点はない。215 は肩部に波状文がある。胴部の調整はヨコハケである。216 の口縁部は直線的にのびる。口縁端部はやや角張り、口縁部下の稜は鋭く突出する。217 は口縁部下の稜が水平方向へ突出する。218 は口縁端部を外方へ丸く収める。肩部にヘラ描の羽状文がある。220 は球状の胴部である。口縁端部には平坦面があり、口縁部下の稜の突出は鈍い。221 ～ 223 は古墳時代中期の甕である。221 は厚手で、頸部で強く屈曲する。短い口縁部の中程で外方へ屈曲し、退化した複合口縁である。222 は複合口縁が緩い段状である。内面の調整は丁寧なヨコナデである。223 は頸部内面の稜が鋭く突出する。口縁部は短く直立し、端部は丸い。胎土はやや粗く、弥生土器の可能性がある。

203 ～ 205 は草田 4 期、206 は草田 4 ～ 5 期、209 ～ 213 は草田 5 期、214、216 は草田 5 ～ 6 期、217、218 は草田 6 期、219 は草田 7 期、220 は小谷 3 式、221 ～ 222 は小谷 4 式以降と考えられる。

224、225 は注口土器の注口部である。224 は注口部がやや短い。胴部外面には一部煤が付着する。225 は先端を欠損するが、注口部は長い。下半分に煤が付着する。

226 ～ 228 は大型の甕である。やや胴部が張る。口縁部は直線的にのび、口縁端部は丸い。口



第 76 図　松林寺遺跡土師器実測図 5

縁部下の稜の突出は鈍い。外面の頸部から胴部にかけて金気が付着する。227 は肩部が張る。口縁部は直線的にのび、端部には面がある。肩部には直線文と緩い波状文がある。胴部外面に金気が付着する。228 は図上で口縁部から胴部まで復元した。口縁部は外反し、口縁部外面にはヨコナデの稜が残る。口縁端部に破面がある。肩部の列点文は一部二列に重なっている。底部は平底で薄く、指頭圧痕はあまり顕著ではない。

226 は大型にもかかわらず口縁端部が丸いことから草田 4 ～ 5 期、227 は草田 5 ～ 6 期、228 は草田 5 期以降と考えられる。

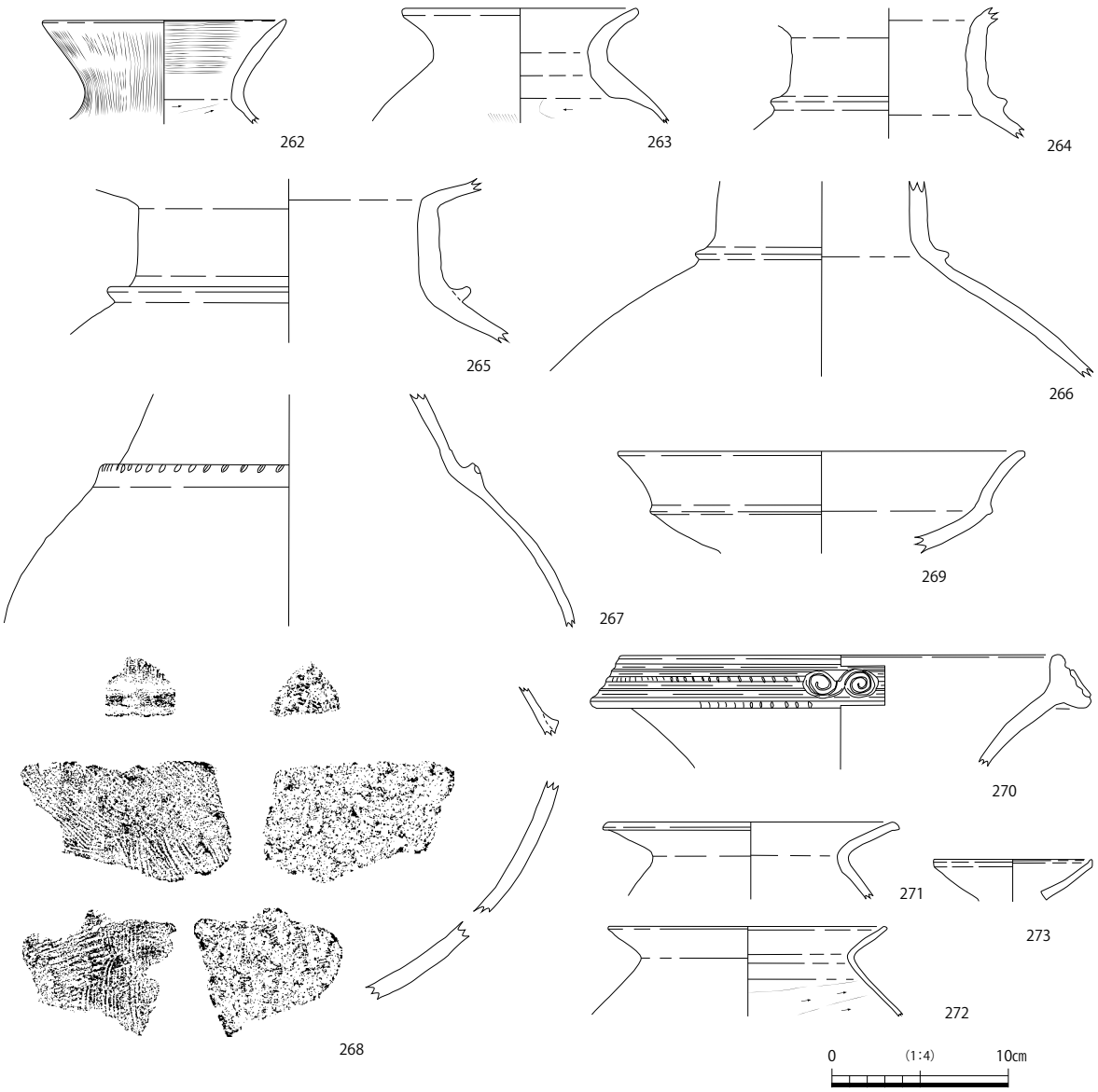
229 ～ 242 は鼓形器台である。229 は全形がわかるものである。受部は直線的にのび、台部は開く。筒部はやや短い。230 は図上で復元した。受部に比べて台部が低い。229、230 は稜の突出は鈍い。231 も図上で復元した。受部内面のヘラミガキは単位が長い。232 はやや小型である。233 は受部外面に直線文がある。234 の稜は鋭く突出する。238 ～ 242 は台部である。238 ～ 240 の台部外面の稜は鋭い。

243 は砥石である。長方形で、三面を使用した。

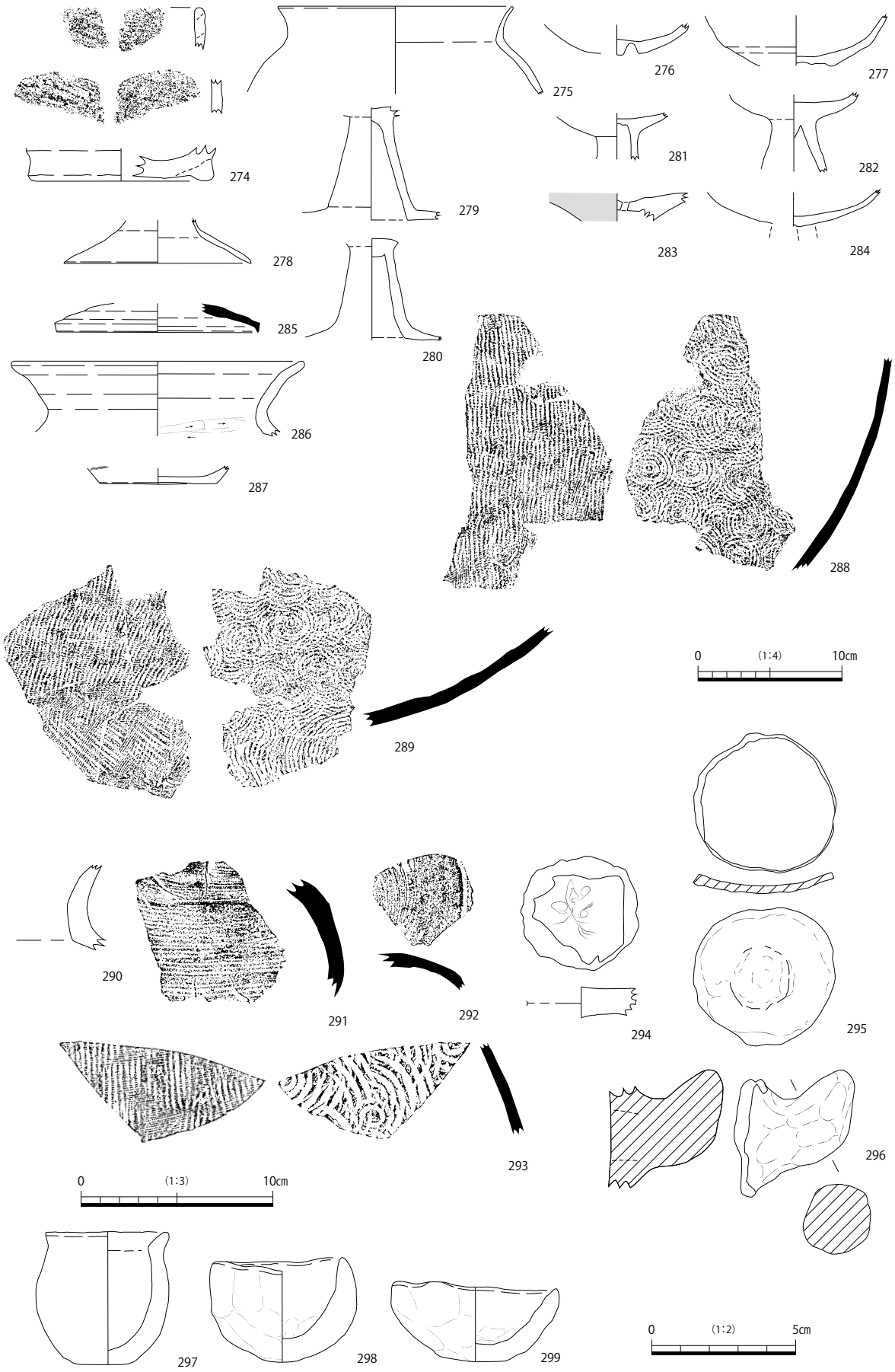
244 ～ 256 は高坏である。244 は摩滅しているが、外面の調整に細かいヨコヘラミガキがある。内面には煤が付着している。245 は坏部の内面に直径 5㎜の穴が開いている。失敗したのか二度開けている。247 にも確認できる。246 ～ 251 は脚柱部で、最も細い部分で直径約 4㎝程度である。器壁は薄く、外面の調整はハケである。252 は脚柱部の中位が膨らみ、脚部が強く屈曲する。253、254 は脚柱部が残る。253 は脚柱部が太い。254 は脚柱部の上が剥離している。255 は短い脚部が外反する。脚部の上端は剥離している。256 は中実の脚柱部から直線的な坏部へのびるようである。脚部は内側へ肥厚する。胎土は他の土師器と同様の砂質であることから土師器と判断した。257 ～ 260 は低脚坏である。257 は坏部がわずかに湾曲する。口縁部の下にナデの稜がある。257 のように小型で椀状のもの、259、260 のように大きく口縁部が開くもの、258 のようにその中間のもの、という三種類の低脚坏がそろっている。261 は椀状の坏部で、脚部が短い。鉢の可能性がある。

鼓形器台、高坏の多くは草田 5 ～ 6 期と考えられる。252 は小谷 4 式と考えられる。

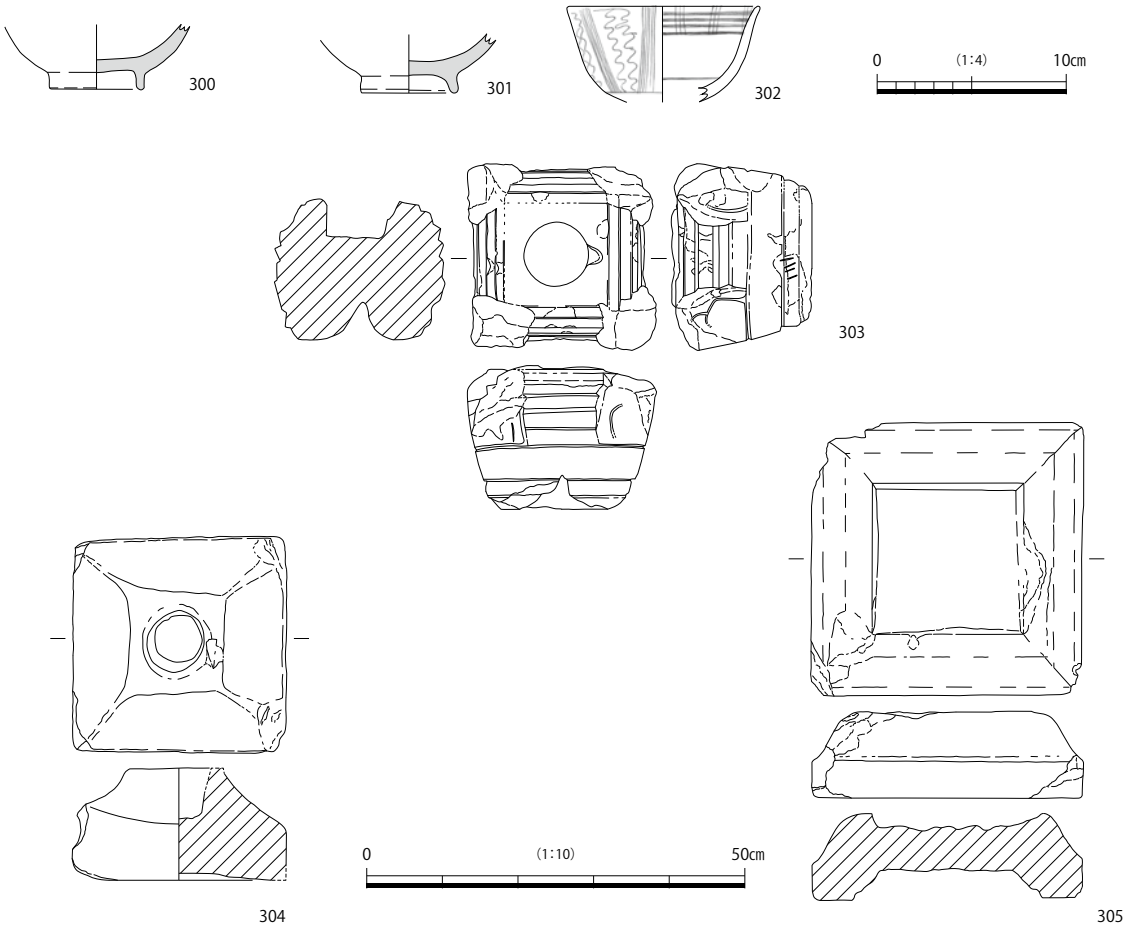
262 ～ 273 は外来系土器である。262 ～ 270 は弥生土器である。262 は短頸の壺である。内外面をハケ調整する。263 も短頸の壺である。これらは複合口縁ではないことから外来系土器と判断した。264 ～ 268 は頸部または肩部に突帯のある壺である。264、265 は頸部と胴部で大きく屈曲する。264 の突帯の断面は太く丸い。265 の口縁部内面に稜がある。肩部の突帯の上下で粘土の色が異なる。264 と 266 は色調が浅黄橙色で胎土の特徴が似る。267 は肩部に刻み目のある突帯がある。明赤褐色で胎土が他の土器と異なる。268 は破片の点数は多いが部位を特定できる破片が少ない。内外面の調整はハケだが内面の剥落が著しい。肩部に断面三角形の突帯があるが、突帯には色の異なる粘土を使っている。269 は坏部外面に稜があり、口縁部へ向けて外反する。胎土はきめ細かく砂質で、弥生土器より土師器に近い。器形の特徴に加えて弥生土器には高坏が少ないことから外来系土器と判断した。270 は胴部から直線的に口縁部へのびる。口縁部は上下に拡張し、4 条の凹線文がある。凹線文の間と口縁部下端に列点文がある。さらに口縁部には S 字状の連続渦文を描いた粘土を貼る。橙色の色調で胎土が他の土器と異なる。壺ではなく器台と考えられる。



第 77 図　松林寺遺跡外来系土器実測図



第 78 図　松林寺遺跡遺構外遺物実測図



第 79 図　松林寺遺跡 2 区遺物実測図

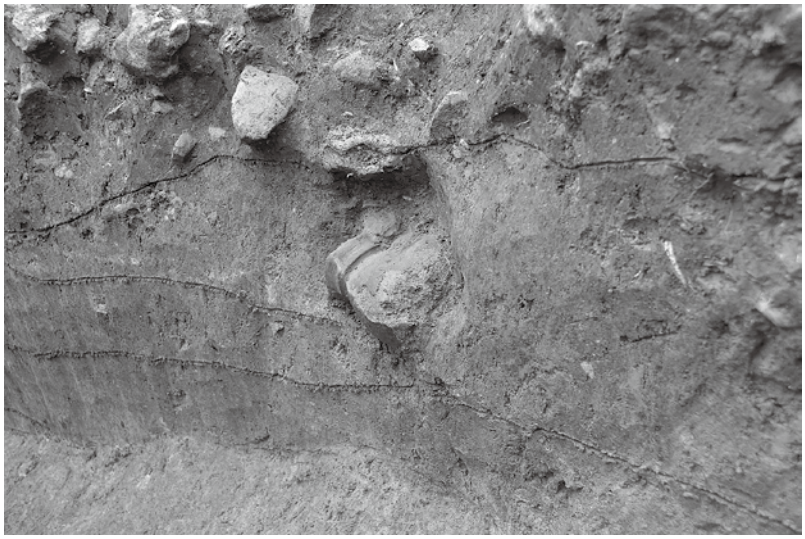


写真 8　1 区土器出土状況（210）

264 ～ 268 は北部九州系の壺である。269 は北部九州系の高坏であり、下大隈式の壺に伴うと考えられる。270 は似た特徴の土器として、出雲市西谷３号墓第１主体や第４主体の「高坏形器台」がある（出雲弥生の森博物館編 2015、72-64、96-149、150、95-152）。これらの土器は口縁部を拡張したり円形浮文を貼る、という特徴は共通するが、口縁部に列点文がある点や胴部の器形が異なる。

271 ～ 273 は土師器である。271、272 はく字口縁の甕である。271 は口縁部が直線的で、口縁端部には面があり下方へ下がる。272 も口縁部が直線的で、口縁端部はわずかに内湾する。273 は小型器台である。摩滅により内外の調整は不明であるが、口縁端部は上方へつまみ上げる。脚部との接合部が剥離している。

274 ～ 299 は遺構と関連が薄い時期の遺物を挙げる。

274 は縄文土器である。口縁部、胴部、底部の破片を掲載した。内外面の調整はナデであるが、胴部のナデは内面と外面で異なる。底部は上げ底である。275 ～ 284 は古墳時代中期～後期の土師器である。275 の口縁部はつまみだすように細くなる。276 ～ 284 は高坏である。276、277 の坏部の底には脚部との接合部がよくわかる。276 は坏部に脚部をそのまま差し込むもので、脚部の跡が残る。277 は坏部の底に剥離跡があることから、坏部と脚部を接合する際に脚部の周囲に粘土を巻き付けるように固定したと考えられる。278 は脚部の中ほどで屈曲する。279、280 は直線的な脚柱部から屈曲する。279 は脚部の頂部が坏部の底になることから、脚部の両側に坏部がつく。一方 280 は脚部の頂部は坏部との接合部になっている。282 は脚部内面の粘土が突出する。283 は坏部の底を粘土で充填しているが、その中央ではなく偏ったところに下からの孔があいている。この孔は坏部を貫通している。284 は坏部の底に穴があいている。

285 ～ 293 は奈良・平安時代の土器である。285 は須恵器の蓋である。口縁端部は下方へ折り曲げる。286 は土師器の甕である。口縁部が外反し、口縁端部はさらに屈曲する。287 は土師器の坏である。288、289 は甕である。同一個体と考えられるが接点はない。290 は図示できていないが外面の調整はタテハケである。291 の外面の調整はカキメである。292 の天井部は回転ヘラケズリである。294 は青磁碗 D 類である。周囲を打ち欠いて円盤状に成形している。294 は厚さ 5㎜前後の円盤状の土製品である。高坏の坏部が剥離したものの可能性がある。296 は甑の取っ手である。取っ手の中ほどで屈曲する。297 ～ 299 は手捏ね土器である。297 は丁寧に成形し、小型の鉢のようである。298、299 は厚手である。

２区出土遺物（第 79 図 300 ～ 305）　300 ～ 302 は陶磁器である。300、301 は肥前系陶器の呉器手碗である。畳付けは無釉である。17 世紀末～ 18 世紀前半代。302 は肥前系磁器の碗である。1850 ～ 1860 年代である。

303 ～ 305 は石造物である。303 は宝篋印塔の笠部である。隅飾は欠損する。屋根は下位に２段、上位に５段の段級を彫り出す。上位には相輪を差し込むためのほぞ穴が空く。石列に転用されていた。室町時代にさかのぼる可能性がある。304 は五輪塔の火輪である。軒の線はわずかに湾曲する。表土から出土した。305 は灯籠である。石列に転用されていた。石材は、303、304 が白色凝灰岩、305 が福光石である。

第４節　小結

１．遺跡・遺構について

松林寺遺跡の調査では、１区で弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物 1、柵 1、段状遺構 3、土坑 1、土器埋設遺構 1 を、２区で江戸時代の石列と階段を確認した。竪穴建物を確認できなかったが、これは斜面が急なうえに地すべりが起きやすい地盤であり、居住には不適当な場所であったことによると考えられる。潮川を挟んだ対岸に位置する庵寺古墳群では、弥生時代後期前葉の遺構を確認している。丘陵斜面に竪穴建物などの居住域、作業小屋や納屋などの作業場、露天の作業場や見張り台など広場的空間が分節的に配置されている可能性が指摘されており、松林寺遺跡の調査区周辺は作業場として利用されていたと考えられる。斜面下方に位置する大国地頭所遺跡では弥生時代後期後葉～古墳時代前期中葉の建物跡が確認されており、居住域は低地に位置する大国地頭所遺跡にあった可能性がある。また、谷状地形から土器が出土したことから、遺跡は標高のやや高い部分、調査区の北東側にも広がる可能性がある。

土坑がやや離れた標高 40.5m のところに位置しているが、段状遺構は段状遺構 1、2 と段状遺構 3 の上下二段程度に築かれたと想定できる。標高 29m より下位では遺構が確認できなかった。試掘調査でもこの部分では遺構が確認できなかったことから、遺構の広がりは薄いと考えられる。

遺構の継続時期を以下にまとめる。

段状遺構１　草田３（2?）期～草田 5/6 期
段状遺構２　草田５～６期
段状遺構３　草田３期～小谷３式
土器埋設遺構　草田５期
土坑　草田３期～小谷 3/4 式
土器溜まり　草田３期～小谷 3/4 式
谷状地形　弥生中期後葉～草田６期
遺構に伴わない土器　草田２期～小谷４式以降
掘立柱建物、柵（土器出土せず : 草田３期～６期 ?）

松林寺遺跡は弥生時代中期後葉から始まる。この時期から草田２期までは土器の出土量が少ないことから、遺跡周辺での活動はあまり盛んでなかったと考えられる。谷状地形から出土した土器は、元々は調査区外の上方で使用されたものと考えられ、標高 40m 以上の斜面上方にこの時期の遺構が広がっていた可能性がある。

草田３期になり、段状遺構や土坑、土器溜まりが築かれる。土器は出土していないが、掘立柱建物や柵もこの時期に築かれたと考えられる。その後、草田５期には掘立柱建物が廃棄され、土器埋設遺構が築かれる。段状遺構も上方に作り直すと考えられる。その後、小谷３～４式の時期には土坑や段状遺構がやや上方に築かれる。土器溜まりはこの段階まで続くと考えられる。その後遺構は築かれず、松林寺遺跡での活動は低調になる。古墳時代中期以降の土器が C2 グリッドでやや多く出土するほか、須恵器や古代の土師器が B1、B2、C2 グリッドで散見され、標高の低いところでわずかながら活動があったと考えられる。

この様相を大国地頭所遺跡と比較すると、弥生時代中期後葉に量は少ないものの土器の出土が見

られる。塩町式土器に類似した土器も出土する。弥生時代後期にも遺跡は継続する。そして草田３期に土器の出土量が増え、土器群が形成される。平地式または竪穴建物と考えられる弧状の溝や柱穴、土坑などが築かれ始める。その後も遺跡は継続し、特に小谷２～３式の土器が多い。大国地頭所遺跡は古墳時代中期まで続いた後、一度古墳時代後期後葉まで断絶があるが、遺構や遺物のピークは松林寺遺跡と一致しており、同じ遺跡の丘陵部と平地部ということが可能である。

土器埋設遺構は類例が乏しいが、江津市都治町高津遺跡の「土器棺墓 01」は楕円形の土坑を約10㎝掘りくぼめ、甕を合わせ口にしている（江津市教育委員会編 2005）。「竪穴住居 08・09」のすぐ脇に位置している。報告書では「土器棺墓」としているが、竪穴建物が集中する居住域の中にあり、遺構のすぐ脇に位置すること、土器の時期がほぼ同時期であることから、松林寺遺跡の土器埋設遺構と似た特徴がある。

２．遺物について

土器の出土量では、弥生土器と古墳時代前期の土師器で全体の９割を超える。弥生土器と古墳時代前期の土師器では、重量は弥生土器が多い一方、点数は土師器の方が多い。これは、弥生土器には器壁が厚いものが多いのに対し、土師器は器壁が薄いことに因る。弥生土器は７割～９割が甕で、壺は１～２割、鼓形器台は１割以下、高坏は数点という組成になり、この時期における土器組成としては一般的である。古墳時代前期の土師器は、壺、鼓形器台が 5% から１割未満、高坏と低脚坏を合わせて 5% 前後、甕が７～８割という組成である。

なお、前述したように松林寺遺跡の弥生土器と土師器は、胎土に含む鉱物の有無から破片であっても弥生土器と土師器を区別することができた。

土器以外の遺物は少なく、砥石や敲石が数点出土した。鉄器は出土しなかった。

弥生土器の甕における口縁部の形態は、最も多いものが IIBb1 類で、約４割を超える。次に多いのは IIAb1 類、IIBa1 類で、それぞれ１割前後である。口縁部が内傾・直立するものは全体の 5% 前後で、口縁部が外反するものがほとんどであった。また、口縁部下の稜の突出が弱いａ類は全体の 1/4 前後、口縁部に文様のあるものは８割を超える。文様をナデ消すものや無文のものは約 15% であった。これらの特徴からも、松林寺遺跡の弥生土器の時期は草田２期が少量あり、草田３～４期が中心であることの傍証となる。

弥生土器の文様では、壺や甕の口縁部に櫛や貝殻による直線文があり、山陰の特徴を示す。その中で口縁部に波状文があるもの（146）は、近隣の遺跡では美郷町沖丈遺跡で出土している（邑智町教育委員会編 2001、49-67、205-66）。また、鼓形器台 178 のように、受部や台部が短い草田２期の特徴が後の時期にも残るようで、183 のような典型的な草田３期の特徴があるものは少ない。口縁部をゆがめて注口状にする甕 124 は、他に例を見ない。

古墳時代前期の土師器では、鼓形器台の筒部が短く、内面の稜の高さが短いものが多い。時期が下る特徴と見なすことができるが、大国地頭所遺跡でもこの傾向があるので、この地域の特徴の可能性がある。

台付装飾壺は５点を図示した。大国地頭所遺跡でも２点出土しており、石見地域では出土点数が多い遺跡になる。なお、台付装飾壺は（松井 2013）に詳しいが、石見地域では江津市高津遺跡、大田市川合遺跡で出土している。

外来系土器は弥生土器と古墳時代前期の土師器ともに存在する。弥生土器では土器溜まり（36）、

谷状地形（66）、包含層（262 ～ 270）がある。このうち最も多いのは、北部九州系の壺 66、264 ～ 268 である。全体の器形がわかるものはないが、264 ～ 266 は頸部と胴部の境に 1 条の太い突帯があり、267、268 から肩部にも突帯があるものがある。器形は豊前から長門にかけての地域の特徴に似るものである。内外の調整は粗いハケである。66、264 ～ 266 は浅黄橙色、267、268 は橙色の胎土であり、内面のハケ調整とあわせて胴部片でも区別できた。66 は内傾する複合口縁の器高 35㎝前後の壺、264 ～ 268 はそれよりも大型の壺と考えられる。これらの土器は北部九州の下大隈式新段階に相当すると考えられる（常松 2002）。このうち 265 は胴部と頸部で大きく屈曲することから、単純口縁で時期がさかのぼる可能性がある。高坏 269 は坏部外面に稜があり、そこから外反して口縁へ至ることから、北部九州の下大隈式新段階から北部九州の「IA 期」や北九州市域の 1 期にかかる段階の高坏と考えられる（久住 1999、常松 2002、中村 2017）。

第 7 表　松林寺遺跡弥生土器甕数量表

甕分類	重量（g）	点数	重量比	点数比
IIAa1	3296.17	58	7.3%	8.0%
IIAa3	284.72	8	0.6%	1.1%
IIAa-	131.66	1	0.3%	0.1%
IIAb1	4142.20	116	9.2%	16.1%
IIAb2	83.72	3	0.2%	0.4%
IIAb3	750.32	29	1.7%	4.0%
IIBa1	6050.40	64	13.5%	8.9%
IIBa2	981.10	6	2.2%	0.8%
IIBa3	340.36	9	0.8%	1.2%
IIBa-	155.79	2	0.3%	0.3%
IIBb1	19236.63	333	42.9%	46.1%
IIBb2	962.94	11	2.1%	1.5%
IIBb3	1665.44	35	3.7%	4.8%
IIBb-	528.83	4	1.2%	0.6%
I---	474.31	17	1.1%	2.4%
IAa-	298.37	3	0.7%	0.4%
IAa1	190.85	4	0.4%	0.6%
IAb1	297.40	3	0.7%	0.4%
IAa2	33.65	1	0.1%	0.1%
IBa1	172.40	1	0.4%	0.1%
IBb1	574.73	2	1.3%	0.3%
IBb2	1090.52	2	2.4%	0.3%
IBb-	288.80	2	0.6%	0.3%
大型 IBb1	501.22	1	1.1%	0.1%
大型 IIBa1	495.31	3	1.1%	0.4%
大型 IIBb1	1664.24	3	3.7%	0.4%
大型 IIBb3	190.95	1	0.4%	0.1%
	44883.03	722		

短頸の壺 262、263 は胎土が 264 ～ 266 に似る。系譜は不明であるが、山陰以外の影響を受けた外来系土器と考えられる。36 は口縁部に 2 段以上の波状文があることから、山陰の土器とは考えにくく、外来系土器と考えられる。器台 270 は特徴に加えて胎土も異なる土器である。近畿北部系土器の可能性があるが、系譜は不明である。

古墳時代前期の甕 271、272 は、中四国地方に多い「布留形甕」であり（次山 1997）、遺跡での破片点数は 22 点であった。大国地頭所遺跡でも出土しているが、草田 7 期～小谷 3 式の幅の中におさまると考えられる。この特徴を持つ甕は出雲東部では少なく、出雲市古志本郷遺跡や下古志遺跡など出雲西部の遺跡で多く見られる。小型器台 273 は 271、272 に伴う時期と考えられる。

弥生土器や古墳時代前期の土師器の特徴は、山陰の特徴を示すが、台付装飾壺や「く」字口縁甕の存在、外来系土器の特徴から、隣接する出雲西部地域との交流の濃さがうかがえる。土器の出土量からみて、松林寺遺跡は大国地頭所遺跡とあわせて弥生時代後期～古墳時代前期の仁万平野における中心的な集落遺跡ということができるが、その背景の一つには出雲西部地域との交流の濃さがあると考えられる。

３．２区について

遺構としてほぼ南北にのびる石列を確認した。遺物は少なかったが、17 世紀末から 19 世紀中頃の土器を確認したほか、宝篋印塔や五輪塔、灯籠が出土した。また、2 区に隣接する墓地では 18 世紀中頃から 19 世紀末の墓石を確認した。2 区出土遺物の時期と調和的である。

また、2 区に隣接する土地には「(浄土宗）松林庵」があったといわれている。北西側の丘陵斜面に平坦面や墓石があることから、「松林庵」の南端を調査したことになる。

【参考文献】

出雲弥生の森博物館編 2015『西谷 3 号墓発掘調査報告書』、島根大学考古学研究室調査報告第 14 冊、出雲弥生の森博物館研究紀要第 5 集

邑智町教育委員会編 2001『沖丈遺跡　主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、邑智町教育委員会

鹿島町教育委員会編 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5　南講武草田遺跡』、鹿島町教育委員会

江津市教育委員会編 2005『高津遺跡』都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書 II、江津市教育委員会

島根県教育委員会編 2014『庵寺古墳群 II　大迫ツリ遺跡　小釜野遺跡　一般国道 9 号（仁摩温泉津道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5』、島根県教育委員会

島根県教育委員会編 2018『大国地頭所遺跡　一般国道 9 号（静間仁摩道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7』、島根県教育委員会

久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX、庄内式土器研究会、62-143

次山　淳 1997「初期布留式土器群の西方展開 - 中四国地方の事例から」『古代』第 103 号、早稲田大学考古学会、135-156

常松幹雄 2002「九州地方の土器」赤塚次郎編『考古資料大観 2 土器 II』小学館、91-106

中村利至久 2017「北九州市域の古式土師器について」『九州島における古式土師器　第 19 回九州前方後円墳研究会』、九州前方後円墳研究会、164-178

松井　潔 2013「台付装飾壺」『みずほ別冊　弥生研究の群像』大和弥生文化の会、359-376

松山智弘 2015「4 山陰」、中国四国前方後円墳研究会第 18 回研究集会編『前期古墳を再考する II- 古墳出土土器をめぐって -』発表要旨・資料集、37-129

第 8 表　松林寺遺跡土器観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径（cm）	その他の寸法（cm）	残存率（%）	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
1	第 59 図	図版 69	弥生土器	甕	段状遺構 1	床面	（13.0）		40	18 条の直線文	浅黄橙色（10YR8/3）	IAa1
2	第 59 図	図版 53	弥生土器	甕	段状遺構 1	床面	（16.4）		60	摩滅	（外）橙色（7.5YR6/6） （内）橙色（7.5YR7/6）	IAa-
3	第 59 図	図版 69	弥生土器	甕	段状遺構 1	床面	（15.0）		10	20 条の直線文、波状文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	IIBb1
4	第 59 図	図版 69	土師器	甕	段状遺構 1	貼床	（18.0）		10	摩滅	にぶい黄橙（10YR7/3）	Ib
5	第 59 図	図版 53	弥生土器	甕	段状遺構 1	埋土	（20.0）		30	摩滅により 8 条の直線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IIBb1
6	第 59 図	図版 69	弥生土器	甕	段状遺構 1	埋土	（17.8）		15	摩滅により 5 条の直線文が残る、肩部列点文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	IIBa1
7	第 59 図	図版 69	弥生土器	鉢	段状遺構 1	埋土	（12.0）		30	摩滅、口縁部列点文、胴部に「八」の字文、5 条の直線文、列点文	（外）明赤褐色（5YR5/8） （内）赤褐色（5YR4/6）	
8	第 59 図	図版 53	弥生土器	鉢	段状遺構 1	埋土	11.0	胴部14.4	胴部完存	摩滅、口縁部に向かい合わせの孔二つで一対	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	
9	第 59 図	図版 53	土師器	壺	段状遺構 1	埋土	17.0		現存部完存		（外）橙色（5YR7/8） （内）橙色（5YR7/6）	
10	第 59 図	図版 53	土師器	甕	段状遺構 1	埋土	（18.0）		20	摩滅、肩部波状文？	（外）橙色（5YR6/6） （内）浅黄橙色（7.5YR8/6）	草田 4-5 期
11	第 59 図	図版 53	土師器	甕	段状遺構 1	埋土	（16.0）		30	摩滅	（外）橙色（2.5YR6/6） （内）橙色（5YR6/6）	草田 4-5 期
12	第 59 図	図版 53	土師器	甕	段状遺構 1	埋土	（18.0）		35	摩滅	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）橙色（5YR6/6）	草田 4-5 期
13	第 59 図	図版 69	土師器	甕	段状遺構 1	埋土	（16.0）		25	摩滅	（外）にぶい黄橙色（10YR7/2） （内）にぶい赤褐色（10YR7/3）	草田 4-5 期
14	第 59 図	図版 69	土師器	甕	段状遺構 1	埋土				摩滅	（外）にぶい赤褐色（2.5YR5/4） （内）にぶい赤褐色（5YR5/4）	草田 5 期
15	第 59 図	図版 69	土師器	鼓形器台	段状遺構 1	埋土	（24.0）		10		（外）橙色（7.5YR7/6） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	
16	第 59 図	図版 69	土師器	鼓形器台	段状遺構 1	埋土		底径（17.0）	15		灰白色（10YR8/2）	
17	第 59 図	図版 69	土師器	高坏	段状遺構 1	埋土			現存部完存	摩滅	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
19	第 60 図	図版 69	土師器	壺	段状遺構 2	埋土	（17.4）		10	摩滅	（外）淡黄色（2.5Y8/3） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
20	第 60 図	図版 69	土師器	甕	段状遺構 2 下層	埋土下層	（16.0）		15	内面摩滅	（外）にぶい橙色（7.5YR6/4） （内）にぶい黄橙色（7.5YR7/6）	
21	第 60 図	図版 69	土師器	鉢	段状遺構 2	埋土	（12.0）		15		（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）黄橙色（10YR8/6）	
22	第 60 図	図版 69	土師器	高坏	段状遺構 2	埋土			現存部完存	摩滅	（外）灰白色（10YR8/2） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
24	第 60 図	図版 53	土師器	甕	土器埋設遺構	土器埋設遺構	34.7	胴径40.0	85	摩滅、ヨコハケ	黄橙色（10YR8/6）	
25	第 61 図	図版 53	弥生土器	甕	段状遺構 3	埋土	（17.0）		25	20 条の貝殻直線文、肩部に貝殻文押引	浅黄橙色（10YR8/3）	IIBb1
26	第 61 図	図版 54	弥生土器	甕	段状遺構 3	埋土	19.2		80	摩滅により 10 条の直線文が残る	浅黄橙色（10YR8/3）	IIAb1
27	第 61 図	図版 54	土師器	甕	段状遺構 3	埋土	（19.0）		35	摩滅	（外）にぶい黄橙色（10YR6/3） （内）灰黄橙色（10YR6/2）	草田 5 期
28	第 61 図	図版 54	土師器	甕	段状遺構 3	埋土	（15.0）		35	摩滅	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）浅黄橙色（7.5YR8/4）	草田 5 期
29	第 61 図	図版 54	土師器	甕	段状遺構 3	埋土	（18.0）		30	摩滅	にぶい黄橙色（10YR7/2）	小谷 3 以降
30	第 61 図	図版 70	土師器	甕	段状遺構 3	埋土	（19.0）		20	磨滅、肩部綾杉文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/3） （内）にぶい黄橙色（10YR7/2）	
31	第 61 図	図版 70	土師器	甕	段状遺構 3	埋土	（18.0）		30	摩滅	（外）にぶい黄橙色（10YR7/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	
32	第 61 図	図版 54	弥生土器	甕	土坑	上面	（21.0）		45	摩滅、肩部波状文	浅黄橙色（10YR8/3）	IBb-
33	第 61 図	図版 70	弥生土器	甕	土坑	上面	（22.0）		10	磨滅	（外）黄橙色（10YR8/6） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	IBb-
34	第 61 図	図版 70	土師器	壺	土坑周辺	周辺	（25.0）		25		（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）黄橙色（10YR8/6）	
35	第 62 図	図版 54	弥生土器	壺	土器溜まり	土器溜まり	（18.2）		20	磨滅、15 条の貝殻直線文	浅黄橙色（10YR8/3）	
36	第 62 図	図版 54	弥生土器	壺	土器溜まり	土器溜まり	（20.2）		頸部完存	磨滅、口縁部は 2 段以上の波状文、外来系	橙色（2.5YR6/8）	
37	第 62 図	図版 55	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（19.0）		45	11 条の直線文、肩部に 11 条の波状文	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄色（2.5Y8/4）	IIBa1
38	第 62 図	図版 70	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（20.0）		25	磨滅により 8 条分の直線文が残る	浅黄橙色（10YR8/3）	IIBa1?
39	第 62 図	図版 55	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（16.0）		30	磨滅、12 条の直線文、肩部波状文	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	IIBa2
40	第 62 図	図版 70	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（19.2）		15	9 条の直線文ナデ消し、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/2）	IIBa2
41	第 62 図	図版 55	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（15.0）		25	11 条の直線文をナデ消し、頸部強いヨコナデ、肩部波状文	（外）灰褐色（7.5YR6/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	IIBa2
42	第 62 図	図版 55	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（19.0）		頸部完存	磨滅、16 条以上の貝殻直線文、肩部波状文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/3） （内）浅黄橙色（7.5YR8/4）	IIBb1
43	第 62 図	図版 70	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（24.0）		20	16 条の直線文、肩部波状文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	IIBb1
44	第 62 図	図版 55	弥生土器	甕	土器溜まり	土器溜まり		胴径23.5	70	磨滅	（外）にぶい黄褐色（10YR5/3） （内）灰黄褐色（10YR6/2）	
45	第 62 図	図版 55	弥生土器	鼓形器台	土器溜まり	土器溜まり		台部径（20.4）	筒部完存	磨滅	黄色（2.5Y8/6）	
46	第 62 図	図版 55	弥生土器	鉢	土器溜まり	土器溜まり	（12.2）	器高11.3 胴径（10.8）	30	磨滅、底部平底、底部は被熱	黄橙色（10YR7/8）	
47	第 63 図	図版 55	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	17.5	胴径（19.4）	口縁 - 頸部完存	磨滅、肩部に 13 条の直線文と波状文、直線文が波状文を切る	黄橙色（10YR7/8）	草田 4 期
48	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（16.0）		25	磨滅、肩部波状文	（外）橙色（7.5YR6/6） （内）橙色（7.5YR7/6）	草田 4 期
49	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（17.0）		30	磨滅、肩部の波状文がわずかに残る	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）黄橙色（10YR8/6）	草田 4 期

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径（cm）	その他の寸法（cm）	残存率（%）	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
50	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	14.8	器高18.5 胴径15.9	口縁部完存	肩部直線文、波状文5条程度、単位の細かいナナメハケ、底部は被熱、平底だが自立せず	淡黄色（2.5Y8/3）	草田 4-5 期
51	第 63 図	図版 71	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（19.0）		40	磨滅	（外）褐色（10YR4/4） （内）明黄褐色（10YR7/6）	草田 4-5 期
52	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（20.8）	胴径23.4	頸部完存	磨滅、肩部の直線文と波状文は一部残存	（外）黄色（2.5Y8/6） （内）明黄褐色（10YR6/8）	草田 5 期
53	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	17.8	胴径（22.4）	頸部完存	肩部に直線文と波状文	黄橙色（10YR8/6）	草田 5 期
54	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（17.6）		75	磨滅	浅黄橙色（10YR8/4）	草田 5 期
55	第 63 図	図版 71	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（15.8）		30	磨滅	黄橙色（10YR8/6）	草田 5 期
56	第 63 図	図版 71	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（15.0）		20	磨滅	にぶい黄橙色（10YR6/4）	草田 5 期
57	第 63 図	図版 56	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（15.4）	胴径（14.8）	40	磨滅、やや軟質	浅黄橙色（7.5YR8/4）	草田 6 期
58	第 63 図	図版 71	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり		胴径（18.0）	30	磨滅、肩部に 7 条の直線文、波状文	明黄褐色（10YR7/6）	
59	第 63 図	図版 56	土師器	鼓形器台	土器溜まり	土器溜まり	20.4		口縁部60、筒部完存	磨滅	橙色（7.5YR7/6）	
60	第 63 図	図版 71	土師器	鼓形器台	土器溜まり	土器溜まり	（19.0）		15	磨滅	（外）明黄褐色（10YR7/6） （内）にぶい黄橙色（10YR7/4）	
61	第 63 図	図版 57	土師器	甕	土器溜まり	土器溜まり	（16.6）	胴径（28.2）	頸部完存		浅黄橙色（10YR8/4）	
63	第 64 図	図版 71	弥生土器	壺	B1	谷状地形				3 条の凹線文	灰白色（10YR8/2）	
64	第 64 図	図版 71	弥生土器	壺	B0.B1	谷状地形		胴径（42.7）	15	内面磨滅、胴部に列点文、やや軟質	（外）淡黄色（2.5Y8/3） （内）炭白色（2.5Y8/2）	
65	第 64 図	図版 72	弥生土器	壺	B1	谷状地形	（26.2）		10	4 条の凹線文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）灰白色（10YR8/2）	
66	第 64 図	図版 57	弥生土器	壺	B1	谷状地形			30	頸部に突帯、内外粗いハケ調整、焼成良好、下大隅式	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）浅黄橙色（7.5YR8/3）	
67	第 64 図	図版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	（16.0）		15	外面磨滅、2 条の凹線文、肩部 2 列の列点文	（外）灰白色（2.5Y8/1） （内）灰白色（2.5Y8/2）	IAb1
68	第 64 図	図版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	（17.0）		20	6 条の貝殻直線文	灰白色（10YR8/2）	IIAa1
69	第 64 図	図版 57	弥生土器	甕	B0	谷状地形	（16.0）		40	8 条の凹線文、肩部貝殻列点文	（外）灰黄褐色（10YR4/2） （内）灰白色（10YR8/1）	IIAb1
70	第 64 図	図版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（14.0）		35	頸部に刺突文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/4）	IIAb3
71	第 64 図	図版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	18.0		90	6 条の直線文、一部ナデにより単位が不明瞭	灰白色（5Y8/2）	IBb2
72	第 64 図	図版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	17.1		口縁部完存	10 条の直線文、一部ナデ消し、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/1）	IBb2
73	第 65 図	図版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	17.0		80	14 条の直線文、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/2）	IIBa1
74	第 65 図	図版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	17.7		75	19 条の直線文	灰白色（5Y8/2）	IIBa1
75	第 65 図	図版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（14.0）		50	16 条の直線文、胴部刺突文	灰白色（2.5Y8/1）	IIBa1
76	第 65 図	図版 57	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（19.0）		30	摩滅、14 条の貝殻直線文	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰白色（2.5Y8/1）	IIBa1
77	第 65 図	図版 58	弥生土器	甕	B1	谷状地形	17.0		80	摩滅、10 条の直線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IIBa2
78	第 65 図	図版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（23.0）		30	磨滅、11 条の直線文	灰白色（2.5Y8/1）	IIBb1
79	第 65 図	図版 58	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（18.0）		30	18 条の貝殻直線文、肩部波状文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/2） （内）灰白色（10YR8/2	IIBb1
80	第 65 図	図版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	（19.0）		25	17 条の貝殻直線文、肩部貝殻波状文	（外）灰白色（10YR8/2） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	IIBb1
81	第 65 図	図版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	（19.0）		30	13 条の直線文、一部赤彩？	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	IIBb1
82	第 65 図	図版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（18.6）		35	17 条の直線文、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/1）	IIBb1
83	第 65 図	図版 72	弥生土器	甕	B0	谷状地形	（17.0）		25	計 9 条の貝殻直線文 、一部ヨコナデ、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/1）	IIBb2
84	第 65 図	図版 58	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（16.0）		40	14 条の直線文、一部ナデ消し、肩部波状文	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰白色（10YR8/1）	IIBb2
85	第 65 図	図版 58	弥生土器	甕	B0.B1	谷状地形	（17.0）		35	14 条の櫛描直線文、肩部櫛描波状文	灰白色（10YR8/2）	IIBb2
86	第 65 図	図版 72	弥生土器	甕	B1	谷状地形	（19.0）		15	14 条の直線、一部ナデ消し	灰白色（10YR8/2）	IIBb2
87	第 65 図	図版 58	弥生土器	鉢	B1	谷状地形	（11.6）		40	17 条の櫛描直線文、肩部波状文、平底だが自立せず	灰白色（10YR8/1）	
88	第 65 図	図版 73	弥生土器	鼓形器台	B1	谷状地形	（21.0）		15	摩滅、28 条の貝殻直線文、原体幅約 1.2cm	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）橙色（5YR7/6）	
89	第 65 図	図版 58	弥生土器	鼓形器台	B1	谷状地形		底径17.0	80	金気が付着、12 条の直線文	（外）浅黄橙色（7.5YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	
90	第 65 図	図版 58	弥生土器	鼓形器台	B1	谷状地形			15	計 22 条の直線文、一部赤彩	灰白色（10YR8/1）	
91	第 65 図	図版 73	弥生土器	鼓形器台	B1	谷状地形	（22.0）		10	磨滅	（外）浅黄橙色（7.5YR8/4） （内）浅黄橙色（7.5YR8/6）	
92	第 65 図	図版 58	弥生土器	器台	B1	谷状地形			体部完存	磨滅、赤彩残る	浅黄橙色（7.5YR8/4）	
93	第 66 図	図版 73	土師器	壺	B1	谷状地形	（9.0）		20		（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	
94	第 66 図	図版 73	土師器	甕	B1	谷状地形	（22.0）		15	磨滅	灰白色（10YR8/2）	
95	第 66 図	図版 59	土師器	甕	B1	谷状地形	（16.0）		20		（外）にぶい橙色（5YR7/3） （内）明褐灰色（7.5YR7/2）	草田 6 期
96	第 66 図	図版 59	土師器	甕	B1	谷状地形	（18.0）		35	肩部波状文と直線文	灰白色（10YR8/2）	小谷 3 式
97	第 66 図	図版 73	土師器	低脚坏	B0	谷状地形			70	内面磨滅	灰白色（2.5Y8/2）	草田 5-6 期
100	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B1	褐色土	（17.0）		15	3 本の凹線文	（外）灰白色（2.5Y8/2） （内）灰白色（2.5Y8/1）	
101	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B1	褐色土	（14.5）		10	15 条の直線文	（外）浅黄橙色（7.5YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	
102	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B2	褐色土	（17.0）		25	磨滅、9 条の直線文	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）にぶい褐色（7.5YR6/3）	
103	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B0	褐色土	（17.0）		10	磨滅、本来は直線文があった？	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
104	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	C9	褐色土			25	磨滅、本来は直線文があった？	浅黄橙色（10YR8/4）	
105	第 67 図	図版 59	弥生土器	壺	B0	褐色土	（13.0）		75	磨滅、胎土は土師器に似る	橙色（5YR7/8）	
106	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B2	褐色土		底径（9.0）	30	磨滅	（外）浅黄色（2.5Y8/3） （内）灰白色（2.5Y8/1）	

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径（cm）	その他の寸法（cm）	残存率（%）	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
107	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B1	褐色土		底径（6.0）	40	磨滅	（外）灰黄褐色（10YR6/2） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
108	第 67 図	図版 74	弥生土器	壺	B9	褐色土		底径6.1	現存部完存	磨滅	（外）明黄褐色（10YR7/6） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
109	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	B1	褐色土	（15.0）		15	磨滅、焼成不良、4 条の凹線文	（外）灰白色（7.5YR8/1） （内）灰白色（2.5Y8/1）	IAa1
110	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	C2	褐色土	（16.0）		25	摩滅して文様の有無不明	（外）淡黄色（2.5Y8/4） （内）淡黄色（2.5Y8/3）	IAa-
111	第 67 図	図版 59	弥生土器	甕	B0	褐色土	（16.0）		45	11 条の直線文、原体は貝殻ではないと考えられる	（外）灰黄褐色（10YR6/2） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	IAb1
112	第 67 図	図版 59	弥生土器	甕	B1	褐色土	（19.0）		35	摩滅、12 条の直線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IBa1
113	第 67 図	図版 59	弥生土器	甕	B0	褐色土	19.6		50	摩滅、11 条の直線文、肩部波状文	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）橙色（5YR7/8）	IBb1
114	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	C9.C0	褐色土	（26.0）		35	内面摩滅、口縁端部は外方へ折れるように屈曲、15 条の櫛描直線文、肩部櫛描波状文	（外）灰白色（10YR8/1） （内）にぶい黄橙色（10YR7/2）	IBb1
115	第 67 図	図版 59	弥生土器	甕	B0	褐色土	（22.0）		45	9 条の貝殻直線文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/2） （内）灰黄褐色（10YR6/2）	IBb1
116	第 67 図	図版 75	弥生土器	壺	B0	褐色土	（17.0）		20	摩滅により口縁部下半分は不明、3 条の凹線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IIAa1
117	第 67 図	図版 59	弥生土器	甕	B0	褐色土	（14.0）	器高19.0 最大径16.3	胴部下半完存	外面磨滅、7 条の直線文、肩部波状文、平底だが自立しない	灰白色（10YR8/2）	IIAa1
118	第 67 図	図版 60	弥生土器	甕	B0	褐色土	（17.0）		45	摩滅、7 条の直線文	灰白色（2.5Y8/1）	IIAa1
119	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	B1	褐色土	（17.0）		30	磨滅、7 条の直線文	（外）淡橙色（5YR8/4） （内）橙色（5YR7/6）	IIAa1
120	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	B0	褐色土	（16.0）		30	9 条（一部 10 条）の直線文、一部ナデ消し	浅黄橙色（10YR8/3）	IIAa1
121	第 67 図	図版 60	弥生土器	甕	B0	褐色土	（18.0）		65	8 条の直線文、一部ナデ消し	（外）灰黄褐色（10YR4/2） （内）灰白色（10YR8/2）	IIAa1
122	第 67 図	図版 60	弥生土器	甕	B0	褐色土	（17.0）		35	摩滅により口縁部下半分は不明、7 条以上の直線文、肩部櫛描波状文	灰白色（10YR8/2）	IIAa-
123	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	B0	褐色土	（16.0）		25	磨滅、10 条の直線文	灰白色（10YR8/1）	IIAb1
124	第 67 図	図版 60	弥生土器	甕？	B0	褐色土	（13.0）		30	口縁注口状、7 条の貝殻直線文、肩部貝殻波状文	（外）灰黄褐色（10YR6/2） （内）灰黄褐色（10YR5/2）	IIAa1
125	第 67 図	図版 75	弥生土器	甕	B0	褐色土	（20.0）		10	摩滅	（外）にぶい黄橙色（10YR6/3） （内）灰白色（10YR8/2）	IIAa-
126	第 68 図	図版 60	弥生土器	甕	B0	褐色土	（19.0）		40	16 条の貝殻直線文、肩部の貝殻列点文は列が上下する	（外）灰白色（2.5YR8/2） （内）灰白色（2.5YR8/1）	IIBa1
127	第 68 図	図版 75	弥生土器	甕	不明	地上直上	（16.0）		20	13 条の直線文	（外）灰白色（2.5Y8/1） （内）灰白色（5Y8/1）	IIBa1
128	第 68 図	図版 60	弥生土器	甕	B1	褐色土	（17.0）		45	摩滅により 6 条の直線文が残る	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	IIBa1
129	第 68 図	図版 60	弥生土器	甕	B1	褐色土	18.0		90	摩滅により 3 条の直線文が残る、本来は口縁部全面に施文	（外）にぶい橙色（5YR6/3） （内）にぶい黄橙色（10YR7/2）	IIBa1
130	第 68 図	図版 60	弥生土器	甕	C9	褐色土	15.6		口縁部完存	摩滅により 4 条の直線文が残る、本来は口縁外面全面に施文	灰白色（10YR8/2）	IIBa1
131	第 68 図	図版 60	弥生土器	甕	C0	褐色土	17.8		50	摩滅、7 条以上の直線文	灰白色（10YR8/2）	IIBa1
132	第 68 図	図版 75	弥生土器	甕	B1	褐色土	（21.0）		30	摩滅により 10 条程度の直線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IIBa1
133	第 68 図	図版 75	弥生土器	甕	B2	褐色土	（18.0）		35	9 条の直線文、肩部列点文	（外）灰黄褐色（10YR6/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	IIBa1
134	第 68 図	図版 60	弥生土器	甕	C2	褐色土	18.0		75	磨滅により 8 条の櫛描直線文が残る	浅黄橙色（10YR8/3）	IIBa1
135	第 68 図	図版 61	弥生土器	甕	B1	褐色土	（19.4）		45	磨滅、13 条の直線文、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/2）	IIBa1
136	第 68 図	図版 76	弥生土器	甕	B1	褐色土	（17.0）		20	8 条の直線文、肩部波状文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	IIBa1
137	第 68 図	図版 76	弥生土器	甕	B2	褐色土	（16.0）		20	10 条の直線文、肩部波状文	（外）灰黄褐色（10YR6/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	IIBa1
138	第 68 図	図版 61	弥生土器	甕	C9	褐色土	（18.0）		30	摩滅、文様の有無不明	灰白色（10YR8/2）	IIBa-
139	第 68 図	図版 76	弥生土器	甕	B2	褐色土	（22.0）		25	内面摩滅、19 条の直線文、肩部波状文	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰黄褐色（10YR5/2）	IIBb1
140	第 68 図	図版 61	弥生土器	甕	B1	褐色土	16.8		85	摩滅、22 条の直線文	灰白色（10YR8/2）	IIBb1
141	第 68 図	図版 61	弥生土器	甕	B1	褐色土	（16.0）		35	24 条の直線文、肩部刺突文	灰白色（10YR8/2）	IIBb1
142	第 68 図	図版 76	弥生土器	甕	B1	褐色土	（24.0）		25	摩滅、10 条の貝殻直線文	灰白色（2.5Y8/2）	IIBb1
143	第 68 図	図版 76	弥生土器	甕	B0	褐色土	（16.0）		25	摩滅、12 条の貝殻直線文	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰白色（2.5Y8/1）	IIBb1
144	第 68 図	図版 61	弥生土器	甕	B0	褐色土	（18.0）		45	13 条の貝殻直線文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）浅黄橙色（7.5YR8/4）	IIBb1
145	第 68 図	図版 61	弥生土器	甕	C2	褐色土	（16.0）		25	摩滅、11 条の直線文	にぶい黄橙色（10YR7/4）	IIBb1
146	第 68 図	図版 76	弥生土器	甕	C2	褐色土	（33.6）		15	口縁部波状文、肩部 7 条の貝殻列点文と直線文	灰白色（2.5 Y 8/2）	IIBb1
147	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	C2	褐色土	（21.6）		15	摩滅により 3 条の直線文が残る	（外）浅黄褐色（7.5YR8/6） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	IIBb1
148	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B1	褐色土	（24.0）		15	摩滅により 9 条の直線文が残る	（外）にぶい黄橙色（10YR7/3） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	IIBb1
149	第 69 図	図版 61	弥生土器	甕	B1	褐色土	（17.0）		30	摩滅により 13 条の直線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IIBb1
150	第 69 図	図版 61	弥生土器	甕	C0	褐色土	（20.0）		20	摩滅により 10 条の直線文が残る	灰白色（10YR8/2）	IIBb1
151	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	B1	褐色土	（17.0）		20	8 条の直線文、肩部二列の波状文	灰白色（10YR8/2）	IIBb1
152	第 69 図	図版 61	弥生土器	甕	B2	褐色土	（18.0）		20	18 条の直線文、一部ナデ消し、原体は貝殻ではないと考えられる	（外）灰白色（10YR8/2） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	IIBb1
153	第 69 図	図版 61	弥生土器	甕	C2	褐色土	（16.0）		40	9 条の直線文、一部ナデ消し、肩部波状文	灰白色（10YR8/2） 灰白色（2.5Y8/2）	IIBb1
154	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	D1	褐色土	（17.0）		25	12 条の直線文、口縁内面変色	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	IIBb1

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径（cm）	その他の寸法（cm）	残存率（%）	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
155	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B1	褐色土	（22.0）		35	摩滅により 7 条の直線文が残る、口縁部上端付近は凹線上、肩部刺突文	（外）灰白色（10YR8/1） （内）灰白色（10YR8/2）	IIBb1
156	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B1	褐色土	（24.0）		15	16 条の直線文、一部ナデ消し？	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）淡黄色（2.5Y8/3）	IIBb1
157	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	B1	褐色土	（30.0）		15	摩滅により 3 条の直線文が残る、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/2）	IIBb-
158	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	B1	褐色土	（23.0）		15	12 条の直線文、口縁部は直線文ナデ消し、肩部波状文	灰白色（2.5Y8/2）	IIBb2
159	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	B1	褐色土	20.4		90	摩滅	灰白色（2.5Y8/2）	IIBb3
160	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B0	褐色土	（24.6）		15	外面摩滅	灰白色（10YR8/2）	IIBb3
161	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	B2	褐色土	23.8		50		黄橙色（7.5YR7/8）	IIBb3
162	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B1	褐色土			30	3 条の直線文、肩部貝殻による押引文	（外）灰白色（5Y8/1） （内）灰白色（2.5Y8/1）	-
163	第 69 図	図版 62	弥生土器	甕	C0	褐色土			40	磨滅、肩部貝殻列点文	（外）にぶい黄橙色（10YR6/3） （内）灰黄褐色（10YR6/2）	
164	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	C1	褐色土		底径5.0	底部完存	摩滅、被熱	（外）淡橙色（5YR8/4） （内）褐灰色（10YR4/1）	
165	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B0	褐色土		底径（8.0）	40	磨滅、突出気味の平底	（外）灰黄褐色（10YR5/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	
166	第 69 図	図版 77	弥生土器	甕	B1	褐色土				頸部に列点文	（外）浅黄橙色（7.5YR8/4） （内）浅黄橙色（7.5YR8/6）	
167	第 70 図	図版 78	弥生土器	蓋	B1	褐色土	（13.0）		25	内面磨滅	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰白色（2.5YR8/2）	
168	第 70 図	図版 78	弥生土器	鉢	B1	褐色土	（9.0）		20		灰白色（10YR8/2）	
169	第 70 図	図版 62	弥生土器	鉢	C2	褐色土	（13.8）	胴径（13.6）	70	磨滅、直線文、肩部 2 列の貝殻羽状文	灰白色（10YR8/2）	
170	第 70 図	図版 78	弥生土器	鉢	B0	褐色土	（5.6）		40	磨滅	（外）黒褐色（2.5Y3/1） （内）黄灰色（2.5Y4/1）	
171	第 70 図	図版 78	弥生土器	台付装飾壺	C1	褐色土	（8.8）	底径8.0	台部完存	磨滅著しい、2 組一対の穿孔、直線文 4 条以上、胴部の突帯上に逆 C 字の刺突文	（外）黄橙色（10YR8/6） （内）浅黄橙色（7.5YR8/6）	
172	第 70 図	図版 63	弥生土器	台付装飾壺	C0	褐色土		胴径19.5	胴部完存	磨滅著しい、2 組一対の穿孔、刺突文、列点文、3 条の直線文	明黄褐色（10YR7/6）	
173	第 70 図	図版 78	弥生土器	台付装飾壺	C9.B1	褐色土			10	磨滅著しい、外面赤彩、鋸歯文、列点文、直線文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	
174	第 70 図	図版 63	弥生土器	台付装飾壺	B1	褐色土	8.8	器高15.0 胴径（17.3） 底径10.2	85	2 組一対の穿孔、4 条の貝殻直線文、綾杉文、鋸歯文、列点文、歪みあり	淡黄色（2.5Y8/3）	
175	第 70 図	図版 78	弥生土器	台付装飾壺	C9	褐色土				列点文、3 条の直線文、同心円のスタンプ文、4 条の直線文、貝殻鋸歯文	浅黄橙色（10YR8/3）	
176	第 70 図	図版 78	弥生土器	鉢？	B1	褐色土				磨滅、1 条の直線文、貝殻羽状文	浅黄橙色（10YR8/3）	
177	第 70 図	図版 78	弥生土器	鉢？	B1	褐色土				磨滅、貝殻羽状文	灰白色（2.5Y8/2）	
178	遺物 13	図版 63	弥生土器	鼓形器台	B0	褐色土	（14.8）	器高18.5 脚径13.4	脚部 80、筒部完存	受部に 16 条、台部に 17 条の櫛描直線文	（外）淡黄色（2.5Y8/4） （内）灰白色（2.5Y8/2）	
179	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	B0	褐色土	（21.2）		10	内外赤彩、直線文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	
180	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	D2	褐色土		脚径（17.0）	20	摩滅、12 条の直線文	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
181	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	B1	褐色土	（23.0）		10	摩滅、内面黒変	（外）褐色（7.5YR4/3） （内）灰褐色（7.5YR4/2）	
182	第 71 図	図版 63	弥生土器	鼓形器台	C2	褐色土			現存部完存	摩滅、16 条の直線文	（外）淡黄橙色（7.5YR8/6） （内）にぶい橙色（7.5YR7/4）	
183	第 71 図	図版 63	弥生土器	鼓形器台	B1	褐色土	（24.7）	筒部径6.4	筒部完存	受部に 33 条の直線文、台部に 13 条の直線文、施文後ナデ消し部分あり	淡黄色（2.5Y8/3）	
184	第 71 図	図版 63	弥生土器	器台	B2	褐色土			現存部完存	摩滅	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）明黄褐色（10YR7/6）	
185	第 71 図	図版 78	弥生土器	器台	B1	褐色土		脚径（24.0）	10	摩滅、高坏型器台か？	灰白色（2.5Y8/2）	
186	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	C2	褐色土	（24.0）		15	摩滅	浅黄色（2.5Y8/3）	
187	第 71 図	図版 63	弥生土器	鼓形器台	C2	褐色土	（19.0）		筒部完存	摩滅により 10 条の直線文が残る、受部外面は変色	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）明黄褐色（10YR7/6）	
188	第 71 図	図版 63	弥生土器	鼓形器台	B1	褐色土			現存部完存	台部全面に直線文が施されていたと思われるが摩滅により不明、8 条の直線文が残る。	灰白色（2.5Y8/2）	
189	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	B1	褐色土			15	摩滅、筒部に 3 条の凹線文	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
190	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	C2	褐色土	（17.0）		15	摩滅	浅黄橙色（10YR8/4）	
191	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	C1	褐色土		脚径（19.0）	20	摩滅	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰白色（2.5Y8/1）	
192	第 71 図	図版 78	弥生土器	鼓形器台	B1	褐色土		脚径（17.0）	20	内面摩滅	灰白色（2.5Y8/1）	
193	第 71 図	図版 63	弥生土器	高坏	B0	褐色土			40	円形の透かし穴四方向、内面シボリ痕	浅黄橙色（7.5YR8/6）	
194	第 72 図	図版 64	土師器	壺	B2.C2	褐色土	（18.0）		20		（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）橙色（7.5YR6/6）	
195	第 72 図	図版 79	土師器	壺	B2	褐色土	（19.6）		20		（外）にぶい黄橙色（10YR6/4） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
196	第 72 図	図版 64	土師器	壺	C2	褐色土	（21.0）		40	磨滅、軟質	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）黄橙色（7.5YR8/8）	
197	第 72 図	図版 64	土師器	壺	C2	褐色土			25	磨滅	浅黄橙色（10YR8/3）	
198	第 72 図	図版 79	土師器	壺	B1	褐色土				軟質、肩部に直線文と波状文	（外）黄橙色（7.5YR7/8） （内）橙色（7.5YR7/6）	
199	第 72 図	図版 79	土師器	壺	C2	褐色土	（20.2）		20	磨滅	浅黄色（2.5Y7/3）	
200	第 72 図	図版 79	土師器	壺	C2	褐色土	（11.0）		15	磨滅	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）橙色（7.5YR6/6）	
201	第 72 図	図版 79	土師器	壺	B1	褐色土	（15.0）		15	短頸の壺か	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）黄灰色（2.5Y4/1）	
202	第 72 図	図版 79	土師器	壺	C2	褐色土			10	磨滅	橙色（7.5YR7/6）	
203	第 72 図	図版 64	土師器	甕	B1	褐色土	（17.0）		50	磨滅、肩部直線文、列点文、波状文	にぶい橙色（7.5YR7/4）	草田 4 期

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径（cm）	その他の寸法（cm）	残存率（%）	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
204	第 72 図	図版 79	土師器	甕	B1	褐色土	（15.0）		25	内面磨滅	（外）にぶい黄橙色（10YR6/4） （内）橙色（7.5YR7/6）	草田 4 期
205	第 72 図	図版 79	土師器	甕	C0	褐色土	（16.0）		15	磨滅	橙色（7.5YR7/6）	草田 4 期
206	第 72 図	図版 64	土師器	甕	A2	褐色土	（19.0）		20	磨滅、波状文？	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）橙色（10YR7/6）	草田 4-5 期
207	第 72 図	図版 79	土師器	甕	C2	褐色土	（18.0）		15		浅黄橙色（10YR8/4）	草田 4 期？
208	第 72 図	図版 64	土師器	甕	C1	褐色土	17.0		60	磨滅	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）橙色（7.5YR7/6）	草田 4 期？
209	第 72 図	図版 64	土師器	甕	B2	褐色土	（17.2）		20	磨滅、波状文？	黄橙色（10YR7/8）	草田 5 期
210	第 72 図	図版 64	土師器	甕	C1	褐色土	15.0	胴径17.6	口縁部完存	摩滅、肩部に上から見て時計回りの直線文、一部波状文風に上下する	（外）黄橙色（7.5YR8/8） （内）浅黄橙色（7.5YR8/6）	草田 5 期
211	第 72 図	図版 65	土師器	甕	B1	褐色土	15.8	胴径（19.0）	60	口縁部波状文、肩部波状文と直線文	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）橙色（7.5YR7/6）	草田 5 期
212	第 72 図	図版 79	土師器	甕	B2	褐色土	（15.0）		25	外面磨滅	橙色（7.5YR7/6）	草田 5 期
213	第 72 図	図版 79	土師器	甕	C9	褐色土	（16.0）		20	磨滅、波状文	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）黄橙色（7.5YR7/8）	草田 5 期
214	第 73 図	図版 79	土師器	甕	B2	褐色土	（22.2）		40	外面磨滅、肩部波状文、底部は突出気味の平底	橙色（5YR6/8）	草田 5-6 期
215	第 73 図	図版 80	土師器	甕	B2	褐色土		頸部（23.0）	15	肩部波状文	橙色（7.5YR6/8）	
216	第 73 図	図版 80	土師器	甕	C2	褐色土	（28.0）		25	磨滅	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）にぶい黄橙色（10YR6/3）	草田5-6期?
217	第 73 図	図版 79	土師器	甕	B1	褐色土	（14.6）		20	磨滅	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	草田 6 期？
218	第 73 図	図版 79	土師器	甕	B0	褐色土	（15.0）		25	肩部ヘラ描羽状文	（外）灰白色（2.5Y8/2） （内）淡黄色（2.5Y8/3）	草田 6 期
219	第 73 図	図版 79	土師器	甕	C9.C0	褐色土	（14.0）		30	磨滅	（外）にぶい黄橙色（10YR6/3） （内）にぶい黄橙色（10YR7/4）	草田 7 期
220	第 73 図	図版 65	土師器	甕	B1	褐色土	（14.4）	胴径19.2	85	摩滅、肩部直線文、波状文	（外）にぶい黄橙色（10YR7/3） （内）にぶい黄橙色（10YR7/2）	小谷 3 式
221	第 73 図	図版 65	土師器	甕	B0	褐色土	（20.0）		20	磨滅、退化した複合口縁	（外）橙色（5YR6/6） （内）橙色（5YR6/8）	
222	第 73 図	図版 80	土師器	甕	C2	褐色土	（16.0）		10	外面磨滅、退化した複合口縁	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）灰黄褐色（10YR5/2）	
223	第 73 図	図版 80	土師器	甕	B8	褐色土	（21.0）		15	磨滅	浅黄橙色（10YR8/3）	
224	第 73 図	図版 64	土師器	注口土器	B1	褐色土			25		橙色（7.5YR7/6）	
225	第 73 図	図版 80	土師器	注口土器	B2	褐色土			現存部完存	先端欠損	（外）にぶい黄橙色（10YR7/2） （内）灰白色（10YR8/2）	
226	第 74 図	図版 65	土師器	甕	B1	褐色土	24.8	胴径（31.2）	90	磨滅、軟質	浅黄橙色（7.5YR8/4）	草田 4-5 期
227	第 74 図	図版 65	土師器	甕	B1	褐色土	（22.6）	胴径（27.0）	40	肩部直線文と波状文、胴部に穿孔	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）灰白色（10YR8/2）	草田 5-6 期
228	第 74 図	図版 80	土師器	甕	A2	褐色土	（19.0）	胴径（35.3）	20	肩部列点文	（外）黄橙色（10YR8/6） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	草田 5 期以降？
229	第 75 図	図版 65	土師器	鼓形器台	B2	褐色土	（20.8）	器高11.5 脚径（21.4）	25	稜は鈍い	黄橙色（7.5YR7/8）	
230	第 75 図	図版 66	土師器	鼓形器台	B2	褐色土	（22.4）	器高13.5 脚径（22.8）	30	稜は鈍い	浅黄橙色（7.5YR8/6）	
231	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	C2	褐色土	（25.8）		45	稜は突出	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）明黄褐色（10YR7/6）	
232	第 75 図	図版 66	土師器	鼓形器台	A2.B1	褐色土	16.0	筒部径7.8	筒部完存	稜は鈍い	黄橙色（7.5YR7/8）	
233	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	B2	褐色土	（26.8）		25	稜は鈍い、受部外面に直線文	（外）黄橙色（7.5YR7/8） （内）黄橙色（7.5YR7/8）-（10YR7/8）	
234	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	C2	褐色土	（20.0）		20	磨滅、稜は鋭い	浅黄橙色（10YR8/4）	
235	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	C1	褐色土	（23.0）		10		浅黄橙色（10YR8/4）	
236	第 75 図	図版 66	土師器	鼓形器台	B1	褐色土			現存部完存		（外）灰白色（10YR8/2） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	
237	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	C2	褐色土			25	磨滅、稜は鋭い	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）橙色（7.5YR6/8）	
238	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	C2	褐色土		脚径（22.0）	20	磨滅、稜は鋭い	明黄褐色（10YR7/6）	
239	第 75 図	図版 66	土師器	鼓形器台	C2	褐色土		脚径（23.0）	40	磨滅、稜は鋭い	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）浅黄橙色（7.5YR8/3）	
240	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	B1	褐色土	（19.0）		20	稜は鋭い	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）にぶい橙色（10YR7/4）	
241	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	A2	褐色土		脚径（17.0）	15	磨滅	（外）浅黄橙色（7.5YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
242	第 75 図	図版 81	土師器	鼓形器台	C0	褐色土		脚径（18.0）	20	磨滅	浅黄橙色（7.5YR8/4）	
244	第 76 図	図版 82	土師器	高坏	C0	褐色土	（24.0）		10	磨滅、内面煤付着	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）にぶい黄褐色（10YR5/3）	
245	第 76 図	図版 82	土師器	高坏	B2	褐色土			現存部完存	坏部内面に穴 2 つ	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）浅黄橙色（7.5YR8/6）	
246	第 76 図	図版 66	土師器	高坏	B1	褐色土			現存部完存	磨滅	（外）黄橙色（10YR8/6） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
247	第 76 図	図版 66	土師器	高坏	B2	褐色土			現存部完存	磨滅、坏部内面に穴	浅黄橙色（10YR8/4）	
248	第 76 図	図版 82	土師器	高坏	C2	褐色土			50		（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄色（2.5Y7/3）	
249	第 76 図	図版 66	土師器	高坏	B0	褐色土			脚柱部完存	磨滅	灰白色（10YR8/2）	
250	第 76 図	図版 66	土師器	高坏	C2	褐色土			90	磨滅	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
251	第 76 図	図版 66	土師器	高坏	C2	褐色土			90	磨滅	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）橙色（5YR6/8）	
252	第 76 図	図版 67	土師器	高坏	B1	褐色土			50	磨滅	橙色（7.5YR6/8）	
253	第 76 図	図版 82	土師器	高坏	C2	褐色土			25		（外）にぶい橙色（7.5YR7/4） （内）黄橙色（10YR8/6）	
254	第 76 図	図版 82	土師器	高坏	B2	褐色土			80		（外）橙色（7.5YR7/6） （内）橙色（5YR6/6）	
255	第 76 図	図版 67	土師器	高坏？	C2	褐色土		脚径（8.6）	75	磨滅	（外）浅黄橙色（7.5YR8/6） （内）黄橙色（10YR8/6）	
256	第 76 図	図版 67	土師器	高坏	C2	褐色土		脚径7.0	現存部完存	磨滅	（外）にぶい黄橙色（10YR7/4） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	口径（㎝）	その他の寸法（㎝）	残存率（%）	形態、文様の特徴	色調	型式 / 時期
257	第 76 図	図版 67	土師器	低脚坏	B1	褐色土	（11.8）	脚径5.2	50	磨滅	浅黄橙色（7.5YR8/6）	
258	第 76 図	図版 67	土師器	低脚坏	C9	褐色土	（14.5）	器高5.6 脚径（6.6）	口縁部 20	磨滅	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
259	第 76 図	図版 82	土師器	低脚坏	C2	褐色土			60		（外）浅黄色（2.5Y7/3） （内）にぶい黄橙色（10YR7/3）	
260	第 76 図	図版 82	土師器	低脚坏	B1	褐色土		脚径5.4	60		（外）灰白色（2.5Y8/1） （内）灰白色（10YR8/2）	
261	第 76 図	図版 67	土師器	低脚坏？	C2	褐色土	（10.6）	器高6.6 脚径（3.6）	脚部完存		（外）橙色（7.5YR6/6） （内）橙色（7.5YR7/6）	
262	第 77 図	図版 82	弥生土器	壺	B9	褐色土	（13.8）		15	短頸、外来系？	橙色（7.5YR7/6）	
263	第 77 図	図版 67	弥生土器	壺	C1	褐色土	（13.0）		20	磨滅、短頸、外来系	（外）灰白色（10YR8/2） （内）灰白色（10YR8/1）	
264	第 77 図	図版 82	弥生土器	壺	C2	褐色土			20	磨滅、頸部に突帯、頸部と胴部で強く屈曲、北部九州系	（外）浅黄橙色（10YR8/3） （内）淡黄色（2.5Y8/3）	
265	第 77 図	図版 67	弥生土器	壺	B2	褐色土			20	内面磨滅、頸部に突帯、頸部と胴部で強く屈曲、北部九州系	（外）浅黄橙色（7.5YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
266	第 77 図	図版 82	弥生土器	壺	C2	褐色土			10	磨滅、頸部に突帯、北部九州系	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
267	第 77 図	図版 83	弥生土器	壺	B1.C1.C2	褐色土			15	磨滅、突帯の上に刻み目、北部九州系	（外）明赤褐色（2.5YR5/8） （内）橙色（2.5YR7/6）	
268	第 77 図	図版 83	弥生土器	壺	B1.B2.C2	褐色土				内面磨滅、胴部に突帯、突帯は違う胎土を使用、北部九州系	（突帯部）浅黄橙色（7.5YR8/4） （外）橙色（5YR7/8） （内）橙色（5YR7/8）～にぶい橙色（5YR6/4）	
269	第 77 図	図版 82	弥生土器	高坏	B1	褐色土	（23.0）		10	磨滅、坏部に稜、胎土は土師器に近い	浅黄橙色（10YR8/4）	
270	第 77 図	図版 67	弥生土器	器台	B1.C1.C2	褐色土	（24.8）		45	磨滅、口縁部に４条の凹線文、列点文、円形浮文、外来系	橙色（5YR6/8）	
271	第 77 図	図版 82	土師器	甕	B1	褐色土	（16.0）		10	磨滅、「く」字口縁	（外）橙色（7.5YR6/6） （内）にぶい橙色（7.5YR6/4）	
272	第 77 図	図版 82	土師器	甕	B1	褐色土	（15.4）		10	磨滅、「く」字口縁	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/6）	
273	第 77 図	図版 82	土師器	小型器台	B1	褐色土	（9.0）		15	摩滅	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）橙色（5YR7/8）	
274	第 78 図	図版 84	縄文土器	深鉢	B2	褐色土				内外ナデ	（外）橙色（5YR7/6） （内）橙色（5YR7/8）	
			縄文土器	深鉢	B2	褐色土				内面と外面のナデは異なる	（外）橙色（5YR7/6） （内）にぶい橙色（5YR7/4）	
			縄文土器	深鉢	B2	褐色土		底径（11.7）	15	上げ底	（外）にぶい橙色（5YR7/4） （内）にぶい橙色（5YR7/3）	
275	第 78 図	図版 84	土師器	甕	C2	褐色土	（16.2）		10	摩滅、軟質	（外）オリーブ灰色（2.5GY6/1） （内）橙色（7.5YR7/6）	
276	第 78 図	図版 84	土師器	高坏	B1	褐色土			坏基部 完存		（外）明褐色（7.5YR5/8） （内）橙色（7.5YR6/8）	
277	第 78 図	図版 84	土師器	高坏	C2	褐色土			50	摩滅	橙色（5YR7/8）	
278	第 78 図	図版 68	土師器	高坏	C2	褐色土		脚径（13.0）	脚端部 75	磨滅	（外）浅黄橙色（10YR8/4） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
279	第 78 図	図版 68	土師器	高坏	B1	褐色土			脚柱部 80		（外）橙色（5YR6/8） （内）橙色（5YR7/8）	
280	第 78 図	図版 68	土師器	高坏	C2	褐色土			現存部 完存	磨滅	（外）黄橙色（7.5YR7/8） （内）橙色（7.5YR6/8）	
281	第 78 図	図版 84	土師器	高坏	C1	褐色土			坏基部 完存	磨滅	浅黄橙色（10YR8/3）	
282	第 78 図	図版 68	土師器	高坏	C2	褐色土			現存部 80	磨滅	黄橙色（7.5YR7/8）	
283	第 78 図	図版 84	土師器	高坏	A1	褐色土			現存部 完存	磨滅、外面赤彩、坏部に穿孔	（外）にぶい橙色（7.5YR7/4） （内）橙色（7.5YR7/6）	
284	第 78 図	図版 84	土師器	高坏	B9	褐色土	（6.0）		50	磨滅、坏部内面に穴	（外）黄橙色（7.5YR7/8） （内）黄橙色（7.5YR8/8）	
285	第 78 図	図版 84	須恵器	蓋	C2	褐色土	（14.0）		25		（外）灰色（7.5Y6/1） （内）灰色（10Y6/1）	
286	第 78 図	図版 84	土師器	甕	C2	褐色土	（20.0）		40		（外）灰黄褐色（10YR6/2） （内）にぶい黄褐色（10YR4/3）	
287	第 78 図	図版 84	土師器	坏	C0	褐色土上位		底径（8.0）	25	摩滅、回転ナデ	（外）にぶい黄橙色（10YR7/3） （内）明黄褐色（10YR8/3）	
288	第 78 図	図版 84	須恵器	甕	C2	褐色土				同一個体	灰色（N6/1）	
289	第 78 図	図版 84	須恵器	甕	C2	褐色土					灰色（N6/1）	
290	第 78 図	図版 84	土師器	甕	C2	褐色土				外面タテハケ	（外）にぶい黄橙色（10YR6/4） （内）明黄褐色（10YR7/6）	
291	第 78 図	図版 84	須恵器	壺	B8	褐色土				カキメ	（外）褐灰色（10YR6/1） （内）灰白色（7/）	
292	第 78 図	図版 84	須恵器	坏蓋	B8	褐色土				天井部回転ヘラケズリ	（外）灰白色（5Y7/1） （内）灰白色（7/）	
293	第 78 図	図版 84	須恵器	甕	C8	褐色土					（外）灰色（7.5Y6/1） （内）灰白色（7.5Y7/1）	
294	第 78 図	図版 84	磁器	碗	B0	褐色土			現存部 完存	龍泉窯系青磁碗Ｄ類、周囲を打ち欠いて円盤状に成形	（外）灰色（5Y6/1） （内）灰白色（7.5Y7/2）	
295	第 78 図	図版 84	土製品？	不明	B1	褐色土				磨滅、高坏の坏部が剝離したものか？	（外）橙色（7.5YR7/6） （内）浅黄橙色（10YR8/4）	
296	第 78 図	図版 84	土師器	甑	C2	褐色土			現存部 完存	摩滅、取っ手部分	（外）橙色（5YR6/8） （内）明赤褐色（5YR5/8）	
297	第 78 図	図版 68	土師器	手捏ね土器	B9	褐色土	4.2	器高4.6 底径1.5	90		明黄褐色（10YR6/6）	
298	第 78 図	図版 68	土師器	手捏ね土器	C2	褐色土	4.5	器高3.6 底径1.0	90		（外）橙色（5YR7/8） （内）橙色（5YR6/8）	
299	第 78 図	図版 68	土師器	手捏ね土器	C2	褐色土	5.8	器高2.8	現存部 完存		橙色（5YR6/8）	
300	第 79 図	図版 68	陶器	碗	2 区	灰褐色土		底径（4.6）	40	肥前系、呉器手碗	淡黄色（2.5Y8/3）	
301	第 79 図	図版 68	陶器	碗	2 区	灰褐色土		底径5.0	底部完存	肥前系、呉器手碗	（外）灰白色（10YR8/2） （内）浅黄橙色（10YR8/3）	
302	第 79 図	図版 68	磁器	碗	2 区	地山直上	（10.0）		40	肥前系、呉須で絵付、その後に透明釉	灰白色（2.5GY8/1）	

第 9 表　松林寺遺跡石器観察表

遺物番号 / 整理番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	形態の特徴
18	第 59 図	図版 69	石器	敲石	段状遺構 1	床面	14.7	9.6	8.0	1,400	
23	第 60 図	図版 69	石器	台石	段状遺構 2	貼床	21.5	14.2	6.0	2,550	
62	第 65 図	図版 71	石器	被熱痕のある石	土器溜まり	土器溜まり	9.1	8.1	7.7	800	
243	第 75 図	図版 83	石器	砥石	C2	褐色土	（23.1）	（7.5）	（3.7）	（950）	
№.1			石器	剥片	B0	褐色土	2.45	2.38	0.69	3.00	黒曜石
№.2			石器	剥片	C1	褐色土	3.53	1.73	0.65	2.73	黒曜石
№.3			石器	剥片	B0	褐色土	1.68	1.41	0.44	0.44	黒曜石

第 10 表　松林寺遺跡木製品観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	形態の特徴
98	第 66 図	図版 73	土木材	杭	杭 6	谷状地形	35.8	5.9	3.7	方形に加工、四方向から削る、側面は平坦に仕上げる
99	第 66 図	図版 73	施設材・器具材	杭？	B0	谷状地形	22.3	2.8	2.5	五方向から削る、加工痕は見えない

第 11 表　松林寺遺跡石造物観察表

遺物番号	挿図番号	写真図版	種別	器種	出土地点 / 遺構	材質	長さ（cm）	幅（cm）	高さ（cm）	重さ（g）	形態の特徴
303	第 79 図	図版 85	石製品	宝篋印塔	2 区	白色凝灰岩	25.0	24.7	19.0	11,500	笠
304	第 79 図	図版 85	石製品	五輪塔	2 区表土	白色凝灰岩	28.5	28.2	14.8	12,400	火輪
305	第 79 図	図版 85	石製品	灯籠	2 区	福光石	36.2	35.9	11.4	20,000	

第 12 表　松林寺遺跡遺構計測表

遺構名	遺構図	グリッド	桁行き	梁行き	長軸（m）	短軸（m）
掘立柱建物	第 41 図	B1	2	1	2.2	1.5
柵	第 42 図	B1.B2	1		3.8	

遺構名	遺構図	グリッド	平面形	長さ（m）	幅（m）	床面の標高（m）
段状遺構 1	第 44 図	C1	台形？	6.0	3.6	30.50
段状遺構 2	第 45 図	C1	台形？	6.0	3.0	31.73
段状遺構 3	第 46 図	B0.C0	台形？	5.6 以上	1.0 以上	33.80
土坑	第 47 図	B9	不整形	2.2	1.5	39.84
Pit2	第 40 図	B1	楕円形	0.3	0.2	30.51
Pit6	第 40 図	B1	楕円形	0.4	0.3	30.31
Pit10	第 40 図	B1	楕円形	0.3	0.2	30.15
Pit11	第 40 図	B1	楕円形	0.3	0.2	30.11
Pit12	第 40 図	B1	円形	0.2	0.2	30.20
Pit13	第 40 図	B1	楕円形	0.3	0.2	30.09
Pit14	第 40 図	B1	円形	0.2	0.2	30.18
Pit22	第 39 図	C9	楕円形	0.3	0.2	38.08
Pit23	第 39 図	C9	楕円形	0.8	0.7	40.06

掘立柱建物

規模		桁行き		2	梁行き		1
主軸		N53° W					
柱穴	番号	Pit3	Pit4	Pit5	Pit7	Pit8	Pit9
	上面径（m）	0.2 × 0.2	0.2 × 0.2	0.2 × 0.2	0.3 × 0.2	0.2 × 0.2	0.3 × 0.2
	床面の標高（m）	30.40	30.41	30.38	30.30	30.26	30.24
柱間距離		Pit3-Pit4	Pit4-Pit5	Pit5-Pit7	Pit7-Pit8	Pit8-Pit9	Pit9-Pit3
（m）		1.08	1.16	1.48	1.16	1.18	1.48

柵

主軸				
柱穴	番号	Pit1	Pit15	Pit16
	上面径（m）	0.3 × 0.2	0.3 × 0.2	0.2 × 0.2
	床面の標高（m）	30.30	30.36	30.10
	柱間距離	Pit1-Pit15	Pit15-Pit16	
	（m）	1.76	2.08	

第 13 表　松林寺遺跡土器数量表

種別	器種・特徴	C8		B8		C9		B9		土坑周辺		土坑	
		重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数
弥生土器	壺			46.45	1	244.47	1	315.08	4				
	壺：中期												
	壺：外来系							70.08	2				
	台付装飾壺					59.68	1.5						
	甕	56.27	7	243.02	15	2504.08	143.5	324.67	23	91.40	7	456.15	15
	鼓形器台					46.48	2	54.46	1			23.12	2
	高坏					5.61	1						
	高坏：中期												
	高坏：外来系												
	注口土器							16.43	1				
	蓋												
	鉢												
	不明												
合計		56.27	7	289.47	16	2860.32	149.0	780.72	31	91.40	7	479.27	17
古墳前期の土師器	壺			63.15	2					249.38	1		
	甕	266.93	34	946.17	97	594.23	49.5	1048.25	134	190.64	8	126.81	17
	甕：く字口縁												
	鼓形器台			15.17	1			30.35	1	52.76	1		
	器台												
	小型器台												
	高坏					20.66	1	70.13	2				
	注口土器												
	低脚坏					121.16	2						
	鉢	37.70	1										
	不明												
合計		304.63	35	1024.49	100	736.05	52.5	1148.73	137	492.78	10	126.81	17
縄文土器													
古墳中期以降の土師器	壺												
	甕												
	高坏							58.15	1				
	鉢												
	手捏ね							40.57	1				
須恵器		81.31	2	115.61	2	7.30	1	83.15	4				
古代の土師器				87.74	3			25.35	2				
土製品													
中世土師器								14.86	1				
中世土器													
青磁													
白磁													
青花													
備前焼													
中世陶器													
合計		81.31	2	203.35	5	7.30	1	222.08	9				
総計		**442.21**	**44**	**1517.31**	**121**	**3603.67**	**203**	**2151.53**	**177**	**584.18**	**17**	**606.08**	**34**

種別	器種・特徴	C0		段状遺構 3 付近		B0・C0		B0		A0		D1	
		重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数
弥生土器	壺	46.37	1					673.78	12				
	壺：中期												
	壺：外来系												
	台付装飾壺	280.08	1										
	甕	3737.22	185.5	764.93	15	143.34	14	9261.49	380	86.79	9	129.06	1
	鼓形器台	26.43	1					1266.48	12				
	高坏							83.81	1				
	高坏：中期												
	高坏：外来系												
	注口土器												
	蓋												
	鉢							58.53	1				
	不明												
合計		4090.10	188.5	764.93	15	143.34	14	11344.09	406	86.79	9	129.06	1
古墳前期の土師器	壺	57.85	2	77.45	1			36.90	1				
	甕	934.41	72.5	452.46	7			853.77	67	498.86	35		
	甕：く字口縁												
	鼓形器台	32.16	1					70.69	6				
	器台												
	小型器台												
	高坏	53.22	1					127.15	4	12.24	1		
	注口土器												
	低脚坏												
	鉢												
	不明												
合計		1077.64	76.5	529.91	8			1088.51	78	511.10	36		
縄文土器													
古墳中期以降の土師器	壺												
	甕			144.55	2			580.74	1				
	高坏							30.99	4				
	鉢												
	手捏ね												
須恵器		31.71	2					59.82	3	54.97	1		
古代の土師器		16.65	1										
土製品													
中世土師器		35.25	2										
中世土器								20.90	1				
青磁		11.83	1					38.76	1				
白磁													
青花		6.60	1							9.60	1		
備前焼													
中世陶器								16.70	1				
合計		102.04	7	144.55	2			747.91	11	64.57	2		
総計		**5269.78**	**272**	**1439.39**	**25**	**143.34**	**14**	**13180.51**	**495**	**662.46**	**47**	**129.06**	**1**

種別	器種・特徴	C1		段状遺構２埋土		段状遺構２床		段状遺構１埋土		段状遺構１床		B1	
		重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数
弥生土器	壺			43.60	1	9.95	1	297.14	4			2549.27	51
	壺：中期												
	壺：外来系	2184.40	34.66									1141.46	9.66
	台付装飾壺	311.13	1									954.57	1.5
	甕	1826.39	78	304.50	19	7.85	1	2300.93	86	656.65	11	24164.81	835
	鼓形器台	252.08	6					18.48	1			1809.45	15
	高坏							142.34	1				
	高坏：中期												
	高坏：外来系											81.28	1
	注口土器												
	蓋											64.03	1
	鉢							461.87	3			85.97	6
	不明												
合計		4574.00	119.66	348.10	20	17.80	2	3220.76	95	656.65	11	30850.84	920.16
古墳前期の土師器	壺	510.77	15	211.14	5			516.57	1			1430.20	32
	甕	2858.72	113	585.04	49	15.16	1	1702.89	112	281.07	9	21788.02	888
	甕：く字口縁											152.70	10
	鼓形器台	154.98	5	10.26	1			157.78	4			1702.97	53.5
	器台	297.26	0.33									297.26	0.33
	小型器台											11.15	1
	高坏	180.58	8	70.54	5			60.72	1			1172.17	47
	注口土器											59.84	1
	低脚坏											484.82	9
	鉢	67.98	7	31.92	1							215.44	17
	不明							176.68	8			156.70	1
合計		4070.29	148.33	908.90	61	15.16	1	2614.64	126	281.07	9	27471.27	1059.83
縄文土器													
古墳中期以降の土師器	壺											599.53	32
	甕												
	高坏	49.55	1									171.61	2
	鉢												
	手捏ね												
須恵器		581.06	22									91.37	2
古代の土師器		117.46	6									169.20	10
土製品													
中世土師器													
中世土器													
青磁		2.63	1										
白磁													
青花													
備前焼													
中世陶器													
合計		750.70	30									1031.71	46
総計		**9394.99**	**298**	**1257.00**	**81**	**32.96**	**3**	**5835.40**	**221**	**937.72**	**20**	**59353.82**	**2026**

種別	器種・特徴	A1		D2		C2		土器溜まり		B2		A2	
		重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数
弥生土器	壺					172.44	3	782.90	3	1011.31	10		
	壺：中期												
	壺：外来系				43203	1883.20	39.33	841.20	1	488.18	3.33		
	台付装飾壺												
	甕					7604.14	249	3661.03	57	4106.16	171	188.44	10
	鼓形器台					1710.62	17	809.39	2	396.10	6		
	高坏									15.62	1		
	高坏：中期												
	高坏：外来系												
	注口土器												
	蓋												
	鉢					250.30	1	185.89	2				
	不明					70.40	4						
合計						11691.10	313.33	6280.41	65	6017.37	191.33	188.44	10
古墳前期の土師器	壺					2016.30	34.5			824.94	10.5		
	甕					8662.80	515	5071.26	107	4709.80	223	663.76	20
	甕：く字口縁					26.31	1	961.86	1	75.22	6		
	鼓形器台			78.38	1	2164.05	82	743.89	9	1448.15	31	196.92	4.5
	器台					297.26	0.33						
	小型器台												
	高坏					865.92	17			702.03	8	18.49	2
	注口土器									67.65	1		
	低脚坏					441.35	9			19.47	2		
	鉢												
	不明												
合計				78.38	1	14473.99	658.83	6777.01	117	7847.26	281.5	879.17	26.5
縄文土器										182.32	1		
古墳中期以降の土師器	壺												
	甕					34.61	1						
	高坏	88.06	1			951.29	25						
	鉢					160.52	10						
	手捏ね					74.72	2						
須恵器						1215.90	25						
古代の土師器						1511.15	45			554.13	27		
土製品						105.04	2						
中世土師器						14.22	2			7.51	1		
中世土器													
青磁										4.22	1		
白磁										3.29	1		
青花													
備前焼										41.30	1		
中世陶器													
合計		88.06	1			4067.45	112			792.77	32		
総計		**88.06**	**1**	**78.38**	**1**	**30232.54**	**1084**	**13057.42**	**182**	**14657.40**	**505**	**1067.61**	**37**

種別	器種・特徴	C3		A0/ 谷状地形		B0/ 谷状地形		B1/ 谷状地形		排土・地点不明		重量（g）	点数
		重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数		
弥生土器	壺					46.75	6	241.89	7			6,481.40	105
	壺：中期					1356.01	0.5	1440.95	1.5			2,796.96	2
	壺：外来系							256.92	1			6,865.44	91
	台付装飾壺											1,605.46	5
	甕	86.52	5	19.67	2	3190.63	152.5	10897.26	223.5	142.22	5	76,826.56	2,719
	鼓形器台					95.80	3	1378.97	8			7,887.86	76
	高坏											247.38	4
	高坏：中期					7.38	1					7.38	1
	高坏：外来系											81.28	1
	注口土器											16.43	1
	蓋											64.03	1
	鉢							190.33	1			1,232.89	14
	不明									34.68	1	105.08	5
合計		86.52	5	19.67	2	4696.57	163	14406.32	242	176.90	6	104,218.15	3,025
古墳前期の土師器	壺	46.69	1			35.93	2	49.12	1			6,126.39	109
	甕	117.21	11	33.07	5	578.83	45	886.13	111	65.06	11	53,931.35	2,741
	甕：く字口縁			23.03	2	25.18	2					1,264.30	22
	鼓形器台							167.98	6			6,948.11	206
	器台					8.82	1	97.30	3			997.90	5
	小型器台											11.15	1
	高坏					27.21	2	5.83	1			3,386.89	100
	注口土器											127.49	2
	低脚坏					95.69	1	20.83	1			1,183.32	24
	鉢											353.04	26
	不明									7.61	1	340.99	10
合計		163.90	12	56.10	7	771.66	53	1227.19	123	72.67	12	74,670.93	3,246
縄文土器												182.32	1
古墳中期以降の土師器	壺											599.53	32
	甕											759.90	4
	高坏											1,261.59	33
	鉢											160.52	10
	手捏ね											115.29	3
須恵器				11.30	1					171.06	5	2,504.56	70
古代の土師器												2,481.68	94
土製品												105.04	2
中世土師器												71.84	6
中世土器												20.90	1
青磁												57.44	4
白磁												3.29	1
青花										29.48	1	45.68	3
備前焼												41.30	1
中世陶器												16.70	1
合計				11.30	1					200.54	6	8,427.58	266
総計		**250.42**	**17**	**442.21**	**44**	**5468.23**	**216**	**15633.51**	**365**	**450.11**	**24**	**187,316.66**	**6,537**